

## 【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	2023年6月29日
【事業年度】	第110期(自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
【会社名】	エスビー食品株式会社
【英訳名】	S & B FOODS INC.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 池村 和也
【本店の所在の場所】	東京都中央区日本橋兜町18番6号
【電話番号】	(03)3668-0551(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員管理サポートグループ経理管理室長 山崎 崇弘
【最寄りの連絡場所】	東京都中央区日本橋兜町18番6号
【電話番号】	(03)3668-0551(代表)
【事務連絡者氏名】	執行役員管理サポートグループ経理管理室長 山崎 崇弘
【縦覧に供する場所】	エスビー食品株式会社 板橋スパイスセンター (東京都板橋区宮本町38番8号) 株式会社東京証券取引所 (東京都中央区日本橋兜町2番1号)

## 第一部【企業情報】

## 第1【企業の概況】

## 1【主要な経営指標等の推移】

## (1) 連結経営指標等

回次	第 106 期	第 107 期	第 108 期	第 109 期	第 110 期
決算年月	2019年 3 月	2020年 3 月	2021年 3 月	2022年 3 月	2023年 3 月
売上高 (百万円)	145,160	112,578	114,255	118,046	120,651
経常利益 (百万円)	7,071	7,121	9,383	8,709	5,465
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	4,317	5,485	6,652	6,225	4,080
包括利益 (百万円)	3,859	4,591	7,962	6,628	4,661
純資産額 (百万円)	43,622	47,679	55,137	59,903	62,925
総資産額 (百万円)	109,532	120,470	125,410	128,984	130,462
1株当たり純資産額 (円)	3,434.68	3,754.21	4,341.44	4,843.38	5,207.10
1株当たり当期純利益金額 (円)	339.96	431.92	523.78	492.16	332.28
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	39.83	39.58	43.97	46.44	48.23
自己資本利益率 (%)	10.29	12.02	12.94	10.82	6.64
株価収益率 (倍)	12.25	9.50	9.28	7.48	10.62
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	5,248	12,158	11,313	8,170	641
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	6,233	11,215	6,575	5,736	3,049
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	1,258	3,109	1,317	2,898	3,941
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	17,984	22,025	25,563	25,213	20,755
従業員数 (人) (外、平均臨時雇用者数)	1,979 (1,376)	2,015 (1,163)	2,084 (922)	2,122 (876)	2,152 (815)

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 2018年12月1日を効力発生日として普通株式1株につき2株の割合で株式分割を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額は、第106期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して算定しております。

3. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)及び「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2021年3月26日)を第108期の期首から適用しており、第107期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## (2) 提出会社の経営指標等

回次	第 106 期	第 107 期	第 108 期	第 109 期	第 110 期
決算年月	2019年 3月	2020年 3月	2021年 3月	2022年 3月	2023年 3月
売上高 (百万円)	125,431	95,688	100,040	103,898	105,427
経常利益 (百万円)	7,108	6,496	7,770	7,140	3,653
当期純利益 (百万円)	4,054	5,347	6,132	5,706	3,156
資本金 (百万円)	1,744	1,744	1,744	1,744	1,744
発行済株式総数 (千株)	13,954	13,954	13,954	13,622	13,622
純資産額 (百万円)	40,038	44,042	50,818	55,100	57,098
総資産額 (百万円)	92,076	98,322	102,489	104,713	104,539
1株当たり純資産額 (円)	3,152.54	3,467.78	4,001.38	4,455.03	4,724.88
1株当たり配当額 (うち1株当たり中間配当額) (円)	60.00 (40.00)	44.00 (22.00)	46.00 (22.00)	50.00 (25.00)	54.00 (27.00)
1株当たり当期純利益金額 (円)	319.21	421.04	482.88	451.17	257.02
潜在株式調整後1株当たり 当期純利益金額 (円)	-	-	-	-	-
自己資本比率 (%)	43.48	44.79	49.58	52.62	54.62
自己資本利益率 (%)	10.52	12.72	12.93	10.78	5.63
株価収益率 (倍)	13.05	9.75	10.06	8.16	13.73
配当性向 (%)	12.53	10.45	9.53	11.08	21.01
従業員数 (外、平均臨時雇用者数) (人)	1,403 (188)	1,431 (181)	1,465 (182)	1,506 (179)	1,527 (178)
株主総利回り (比較指標：配当込みTOPIX) (%)	72.75 (94.96)	72.47 (85.94)	86.33 (122.15)	66.78 (124.57)	65.12 (131.82)
最高株価 (円)	11,600 (4,835)	4,400	5,090	4,915	3,760
最低株価 (円)	8,310 (3,970)	3,765	3,850	3,500	3,420

(注) 1. 潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額は、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

2. 2018年12月1日を効力発生日として普通株式1株につき2株の割合で株式分割を実施いたしました。1株当たり純資産額及び1株当たり当期純利益金額は、第106期の期首に当該株式分割が行われたと仮定して算定しております。

3. 第106期の1株当たり配当額60.00円は、中間配当額40.00円と期末配当額20.00円の合計となります。なお、2018年12月1日を効力発生日として普通株式1株につき2株の割合で株式分割を実施いたしましたので、中間配当額40.00円は当該株式分割前の配当額、期末配当額20.00円は当該株式分割後の配当額となります。

4. 最高株価及び最低株価は、2022年4月3日以前は東京証券取引所市場第二部におけるものであり、2022年4月4日以降は、東京証券取引所スタンダード市場におけるものであります。なお、2018年12月1日を効力発生日として普通株式1株につき2株の割合で株式分割を実施いたしましたため、第106期の株価については当該株式分割前の最高株価及び最低株価を記載し、( )内にて当該株式分割後の最高株価及び最低株価を記載しております。

5. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)及び「収益認識に関する会計基準の適用指針」(企業会計基準適用指針第30号 2021年3月26日)を第108期の期首から適用しており、第107期に係る主要な経営指標等については、当該会計基準等を遡って適用した後の指標等となっております。

## 2【沿革】

当社は、初代社長山崎峯次郎（創業者）が1923年カレーの調合に成功し、自家営業に着手したときにその源を築き、わが国スパイス産業の草分けとして浅草に興じました日賀志屋をもってその母体といたします。

1930年	「ヒドリ印」カレーを発売する。
1935年11月	東京都板橋区に工場（のちの東京工場）を建設する。
1940年4月	株式会社日賀志屋に改組し、本店所在地を東京都板橋区志村清水町347番地とする。
1949年7月	本店を東京都中央区日本橋兜町三丁目32番地（現在の東京都中央区日本橋兜町18番6号）に移転する。
1949年12月	商号をエスピー食品株式会社に変更する。
1951年6月	東京店頭売買銘柄の承認を受け、株式を公開する。
1960年3月	エスピーガーリック工業株式会社を設立する。
1961年4月	エスピースパイス工業株式会社を設立する。（現・連結子会社）
1961年10月	東京証券取引所市場第二部に株式上場する。
1973年5月	上田工場を新築竣工する。
1973年10月	株式会社エスピーカレーの王様を設立する。（2014年2月清算終了）
1974年4月	有限会社大伸を設立する。（1993年6月株式会社に組織変更。現・連結子会社）
1977年11月	東松山工場を新築竣工する。
1979年4月	株式会社エスピー興産を設立する。（現・連結子会社）
1981年3月	東京工場の生産設備を東松山工場へ移転する。
1981年6月	エスピー資料開発センターを設置する。
1983年11月	開発部研究室を拡充し、中央研究所に改称する。
1984年5月	エスピー資料開発センター内にスパイス展示館並びにエスピーミーティングホールを設置し、中央研究所と併せ、エスピースパイスセンターと改称する。
1989年7月	株式会社エスピーサンキョーフーズを設立する。（現・連結子会社）
1990年3月	株式会社ヒガシヤデリカを設立する。（現・連結子会社）
1991年10月	エスピースパイスセンター内に、中央研究所棟を新築竣工する。
1992年4月	S&B INTERNATIONAL CORPORATIONを設立する。（現・連結子会社）
1992年12月	エスピースパイスセンター内に、事務所棟を新築竣工する。
1993年6月	宮城工場を新築竣工する。
1994年11月	エスピーガーリック工業株式会社とヒドリ食品株式会社が合併し、エスピーガーリック食品株式会社に商号変更する。（現・連結子会社）
1995年12月	埼玉県入間郡三芳町に、首都圏物流センターを設置する。
2000年1月	兵庫県西宮市に、関西物流センターを設置する。（現・関西ロジスティクスセンター）
2003年6月	執行役員制度を導入する。
2005年1月	茨城県結城郡石下町（現在の茨城県常総市）に、エスピーハーブセンターつくばを設置する。
2006年4月	埼玉県入間郡三芳町に、首都圏第2物流センターを設置する。
2007年4月	沖縄県豊見城市に、JAおきなわエスピーハーブセンターを設置する。
2008年7月	本社屋を新築竣工（建替え）する。
2008年9月	エスピースパイスセンターを板橋スパイスセンターに改称する。
2008年11月	東京都中央区に、八丁堀ハーブテラスを新築竣工（建替え）する。
2010年11月	首都圏物流センターを埼玉県川越市に移転し、首都圏第2物流センターを首都圏物流センターに統合（2011年1月）する。
2015年5月	岩手県北上市において、株式会社ヒガシヤデリカ岩手工場が稼働する。
2017年12月	S&B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.を設立する。（現・連結子会社）
2019年9月	株式会社ヒガシヤデリカ岩手工場を事業譲渡する。
2019年11月	静岡県焼津市に、株式会社エスピーサンキョーフーズの工場を新設・移転し、稼働する。
2020年5月	株式会社泰秀の全株式を取得する。（現・連結子会社）
2022年4月	東京証券取引所の市場区分の見直しにより、東京証券取引所スタンダード市場へ移行する。

### 3【事業の内容】

当社及び当社の関係会社は、主としてスパイスを原料とする食料品の製造・加工会社を中心に、原材料・商品の供給及び販売等を担当する会社をもって構成されており、当社及び主な関係会社の位置づけは次の通りであります。

なお、次のセグメントは「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項」に掲げるセグメントの区分と同一であります。

#### (1) 食料品事業

各種香辛料、即席カレー、チューブ製品、レトルトカレー等の製造・販売のほか、関連する原材料の調達を行っております。

当社が製造・販売を行うほか、下記の活動を行っております。

##### ・生産関係

エスビーガーリック食品株式会社、エスブースパイス工業株式会社、株式会社エスビーサンキョーフーズ、株式会社大伸は、商品の製造を担当し、当社に納入しております。

##### ・原材料関係

株式会社エスビー興産、株式会社泰秀、峯栄興業株式会社は、輸入原料及び国内原材料等の調達を担当しております。

##### ・販売関係

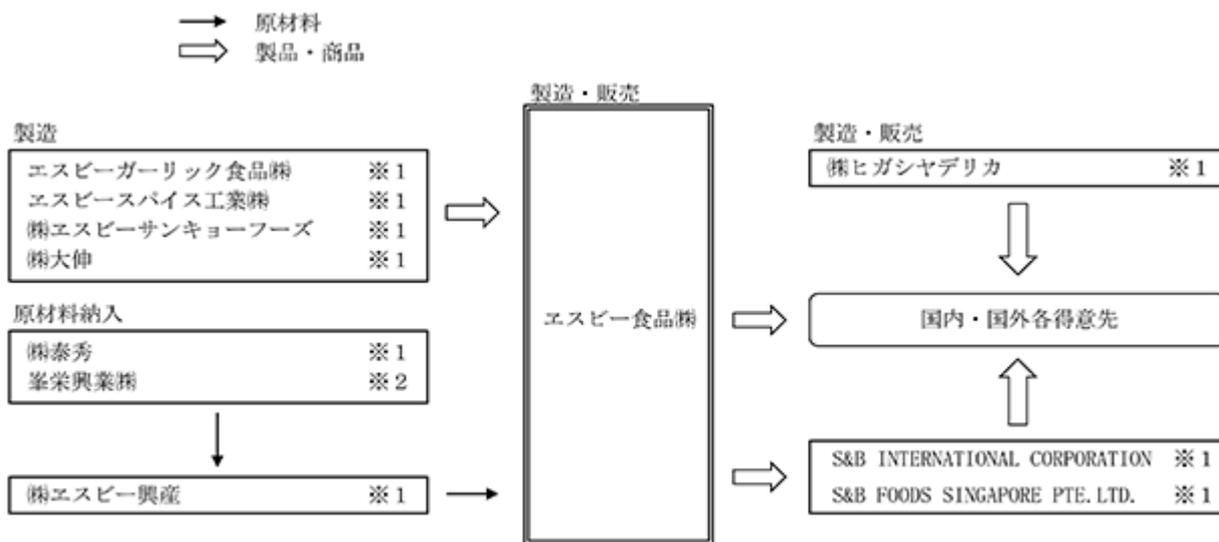
S&B INTERNATIONAL CORPORATIONは米州で加工食品の販売を行っており、当社より商品を供給しております。

S&B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.はアジア、オセアニア地域で加工食品の販売を行っており、当社より商品を供給しております。

#### (2) 調理済食品

株式会社ヒガシヤデリカは調理麺等の製造・販売を行っております。

上記の状況について事業系統図を示すと次の通りであります。



(注) 1 連結子会社  
 2 非連結子会社で持分法非適用会社

4【関係会社の状況】

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の所有 割合又は被所 有割合(%)	関係内容
(連結子会社) エスピーガーリック 食品(株)	栃木県足利市	89	食料品事業	100	商品を当社に納入している。 役員の兼任等あり。 当社は機械装置、事務所等を 貸与している。
エスピースパイス工 業(株)	東京都文京区	32	食料品事業	100	商品を当社に納入している。 役員の兼任等あり。 当社は建物、機械装置、事務 所等を貸与している。
(株)エスピー興産 (注)2	東京都中央区	50	食料品事業	100	原材料を当社に納入してい る。 役員の兼任等あり。 当社は事務所を貸与してい る。
(株)エスピーサンキョ ーフーズ	静岡県焼津市	10	食料品事業	100	商品を当社に納入している。 役員の兼任等あり。 当社は機械装置等を貸与して いる。
(株)大伸 (注)3	埼玉県比企郡川 島町	10	食料品事業	100 (100)	商品を当社に納入している。 役員の兼任等あり。 当社は機械装置等を貸与して いる。
(株)ヒガシヤデリカ (注)4	東京都板橋区	80	調理済食品	100	当社は土地を貸与している。 役員の兼任等あり。
(株)泰秀 (注)3	東京都板橋区	10	食料品事業	100 (100)	原材料を連結子会社に納入し ている。 資金援助あり。
S&B INTERNATIONAL CORPORATION	アメリカ合衆国 カリフォルニア 州	100千US\$	食料品事業	100	当社製品を米州で販売してい る。 役員の兼任等あり。
S&B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.	シンガポール	650千SG\$	食料品事業	100	当社製品をアジア、オセアニ ア地域で販売している。

- (注) 1. 主要な事業の内容欄には、セグメントの名称を記載しております。  
 2. 特定子会社に該当いたします。  
 3. 議決権の所有割合の( )内は、間接所有割合で内数であります。  
 4. (株)ヒガシヤデリカについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く。)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	13,268百万円
	(2) 経常利益	784 "
	(3) 当期純利益	604 "
	(4) 純資産額	1,461 "
	(5) 総資産額	5,170 "

## 5【従業員の状況】

### (1) 連結会社の状況

2023年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数(人)
食料品事業	2,034(311)
調理済食品	118(504)
合計	2,152(815)

(注)従業員数は就業人員(嘱託契約の社員を含む)であり、臨時雇用者(パートタイマー及び派遣社員)の人数は( )内に年間の平均人員を外数で記載しております。

### (2) 提出会社の状況

2023年3月31日現在

従業員数(人)	平均年齢(歳)	平均勤続年数(年)	平均年間給与(円)
1,527(178)	41.1	13.8	5,760,221

セグメントの名称	従業員数(人)
食料品事業	1,527(178)

(注)1.従業員数は就業人員(嘱託契約の社員を含む)であり、臨時雇用者(パートタイマー及び派遣社員)の人数は( )内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2.平均年間給与は、正社員及び嘱託契約の社員を対象に算出しており、賞与及び基準外賃金を含んでおりません。

### (3) 労働組合の状況

当社及び連結子会社(以下、「当社グループ」といいます。)の労働組合のうち主なものはエスピー食品従業員組合(2023年3月31日現在組合員数842人)であります。

なお、労働組合との間に特記すべき事項はありません。

### (4) 管理職に占める女性労働者の割合、男性労働者の育児休業取得率及び労働者の男女の賃金の差異

提出会社

当事業年度				
管理職に占める女性労働者の割合(%) (注)1	男性労働者の育児休業取得率(%) (注)2	労働者の男女の賃金の差異(%) (注)3		
		全労働者	正規雇用労働者	パート・有期労働者
11.6	88.2	73.5	72.1	76.6

(注)1.「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき、当社人事制度における役割等級に基づく女性労働者の割合を算出したものであります。

2.「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律」(平成3年法律第76号)の規定に基づき、「育児休業、介護休業等育児又は家族介護を行う労働者の福祉に関する法律施行規則」(平成3年労働省令第25号)第71条の4第1号における育児休業等の取得割合を算出したものであります。第3次中期経営計画では「子が1歳に達するまでに育児休業を取得した男性労働者の割合」における育児休業取得率も算出してあります。

3.「女性の職業生活における活躍の推進に関する法律」(平成27年法律第64号)の規定に基づき算出したものであります。賃金は性別に関係なく同一の基準を適用してありますが、役割別人数構成、勤続年数の差などにより男女間の賃金差異が生じております。(平均勤続年数(正社員・契約社員):男性15.8年、女性10.0年)

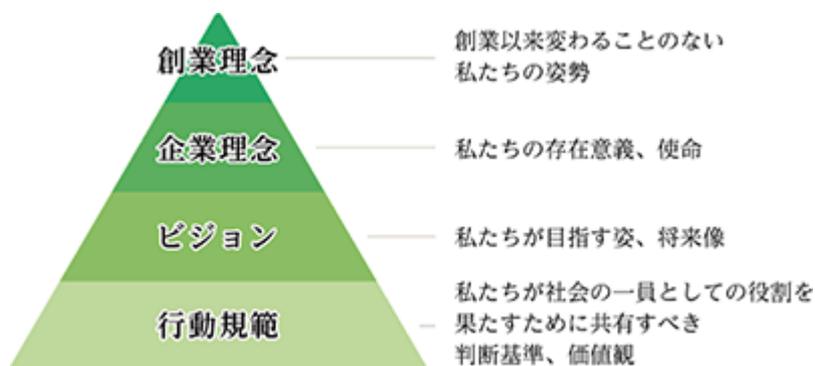
## 第2【事業の状況】

### 1【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 会社の経営の基本方針

当社グループは、日々の活動の拠りどころとして、理念とビジョンを掲げております。この理念とビジョンのもと、従業員一人ひとりが同じ方向に向かって活動していくことで、組織力を高め、いかなる環境においても持続的に成長し、社会から必要とされる人・企業になることを目指しております。



#### ・創業理念

「美味求真」

お客様に喜んでいただくために、ただひたすら真つすぐに“本物のおいしさ”を追い求めます。

#### ・企業理念

「食卓に、自然としあわせを。」

一) 常に研究を怠らず、創意工夫をこらして高い品質と新たな価値を創出します。

二) 常にお客様の視点で考え、心から満足していただける製品を追求します。

三) 常に自然に感謝し、食卓から幸せな生活と豊かな社会づくりに貢献します。

#### ・ビジョン

「『地の恵み スパイス&ハーブ』の可能性を追求し、

おいしく、健やかで、明るい未来をカタチにします。」

今後も、お客様はもとより、株主、取引先、地域社会、そして従業員を含め、すべてのステークホルダーの皆様から信頼され、選ばれる企業を目指して、鋭意事業活動に取り組んでまいります。

#### (2) 中長期的な会社の経営戦略

グローバル化・デジタル化といった社会環境の変化が進むなかで、個人の嗜好や価値観、生活様式も多種多様となり、食に対するニーズは複雑化・高度化が進むものと想定されます。一方で、気候変動やそれに起因する食料危機、短期的な利益追求による資源枯渇や廃棄物の増加といった社会課題に対しては、一刻も早い対処が必要な状況にあります。

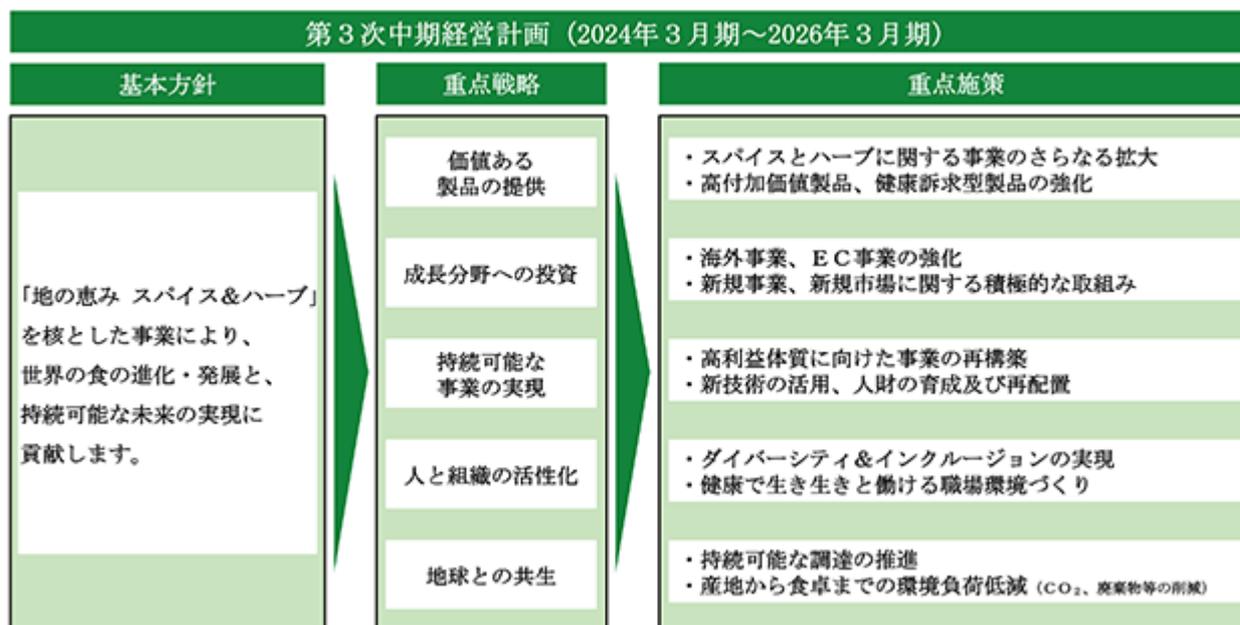
当社グループは、香辛料のトップメーカーとして創業より100年にわたり培ってきた技術力と開発力を活かし、コアコンピタンスである「地の恵み スパイス&ハーブ」を常に進化させるとともに、お客様視点での研究開発や製品開発、マーケティング活動の強化により、さまざまなニーズの変化に対応してまいります。そして、これら食の進化・発展を追求するだけでなく、環境負荷の低減や社会・環境・人権に配慮した原材料調達及び製品供給を通じ、社会課題の解決に取り組んでまいります。

事業環境といたしましては、日本国内では人口減少・少子高齢化が進む一方、世界人口は年々増加しております。これに対し当社グループは、世界中の食卓に自然としあわせを届けるべく、各国の市場に向けた販売を強化し、20年後の2043年に海外売上高構成比40%超を目指して取り組んでまいります。

また、世界的にも高齢化が進むなかで、健康に寄与する食品への関心はますます高まっていくものと思われます。スパイスやハーブは、世界の各地で調味料として使われるだけでなく、太古より人々の生活に欠かせない活力源や生薬として重宝されており、その将来性が大いに期待されることです。こうしたことから、事業の基盤となるコアコンピタンスの進化に向け、スパイスやハーブの研究を加速させるとともに、栽培技術の獲得や産地開発への取組みをさらに深めてまいります。

そして、これら取組みをより確かなものにするために、グローバル人財・デジタル人財・研究者等の育成に向けた教育を進め、生産性を向上させるべく業務や事業構造の改革を進めてまいります。

以上を踏まえ、2023年4月より開始いたしました第3次中期経営計画におきましては、スパイスとハーブに関する事業を通じて、世界のお客様の豊かで健やかな暮らしに貢献するとともに、社会課題の解決に取り組んでまいります。



### (3) 目標とする経営指標

社会環境や経営環境がめまぐるしく変化し先の見えない状況のなかで、持続的な成長と企業価値の向上のため、事業領域の拡張や事業の再構築により収益力を高めるとともに、経営の効率化と財務体質の強化を進めてまいります。経営指標といたしましては、売上高営業利益率、自己資本比率及びROEの向上を重視してまいります。

第3次中期経営計画の最終年である2026年3月期の目標値は、以下の通りであります。

売上高	1,207億円
営業利益	64億円
売上高営業利益率	5.3%
ROE	6.0%

(注)2024年3月に、株式会社ヒガシヤデリカが運営する調理済食品事業の事業譲渡を予定しております（2023年3月期 売上高132億68百万円、営業利益7億87百万円）。

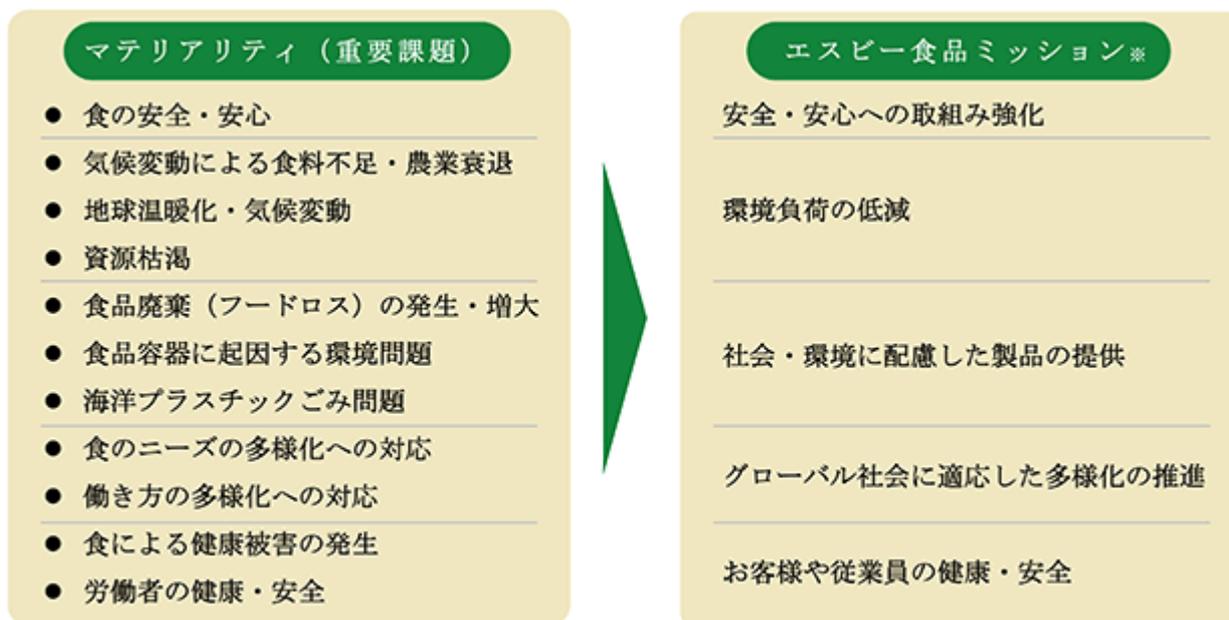
### (4) 経営環境及び対処すべき課題

今後の経済環境につきましては、新型コロナウイルス感染症に関する感染症法上の分類が移行したことに伴い、経済活動の正常化が加速するとみられる一方、ウクライナ情勢の長期化の影響等により、原材料・エネルギー価格は引き続き高い水準で推移するものと見込んでおります。

食品業界におきましては、原材料価格等の高騰が企業収益や価格に影響を与えるなかで、お客様の節約志向の高まりなど消費行動や市場構造の変化への対応が求められるものと想定されます。

当社グループといたしましては、「(2) 中長期的な会社の経営戦略」に記載しております中期経営計画の施策に取り組むことで、さまざまな環境変化や、お客様のニーズの変化・多様化に柔軟かつスピーディに対応し、食品メーカーとしての使命を果たすとともに、常に新たな価値を提供し続けてまいります。そして、当社ビジョンの実現に向け、当社グループの強みをさらに伸ばし、ブランド価値を高めていくなかで、さらなる企業価値の向上に努めてまいります。

また、世界的な気候変動や人口増加・高齢化、そして生活様式や価値観の多様化など、世界中で社会環境が大きく変化を続けるなかで、企業や製品に求められるものは、これまで以上に多岐にわたっております。当社グループでは、社会に価値を提供する企業として永続的に存在し、成長し続けるため、重要度の高い社会課題「マテリアリティ」を特定し、活動目標として「エスビー食品ミッション」を掲げております。この「エスビー食品ミッション」のもと、地球環境保全やSDGsの達成に寄与することを目指し、活動テーマに沿った事業活動を進めてまいります。



※当社グループが社会に価値を提供する企業として永続的に存在し、成長し続けるための活動目標

第3次中期経営計画におきましては、以下の非財務目標を中心に、世界の人々のしあわせと持続可能な未来の創造に取り組んでまいります。

エスビー食品ミッション	KPI	2026年3月期 目標
安全・安心への取組み強化	品質保証部門と各工場による「品質保証協議会」の実施率	100%
環境負荷の低減、 社会・環境に配慮した製品の提供	石油由来プラスチック製パッケージ削減率：2020年度比	3%減
	家庭用レトルト製品のレンジ対応化率	40%
グローバル社会に適応した 多様化の推進	主要香辛料、パーム油、紙の持続可能な調達を推進※	—
	男性・女性の新卒採用比率	それぞれ40%以上
	男性の育休取得率	80%
	年次有給休暇取得率	80%
	従業員エンゲージメント指標の向上率：2022年度比	5%増
お客様や従業員の健康・安全	レシピサイト掲載の減塩レシピ数	60レシピ
	カレー製品（即席ルウ、レトルト）の塩分削減率：2020年度比	1.5%減
	「食事」「運動」「睡眠」に関する生活改善プログラムの実施率	70%
	保健師・栄養士による特定保健指導の実施率：期間累計	100%

「持続可能な調達に関するコミットメント」、2030年目標

コーポレート・ガバナンスにつきましては、執行役員制度のもと、取締役と執行役員の役割を明確にすることで、意思決定と業務執行のスピードアップを図り、経営環境の変化に迅速かつ的確に対応いたしますとともに、取締役会の実効性を高めるための取組みを継続して進めてまいります。また、当社グループ全体の内部統制の充実を図るとともに、企業活動を取り巻くさまざまなリスクに対しては「リスクマネジメント委員会」を中心として、継続的に管理体制を強化してまいります。

## 2【サステナビリティに関する考え方及び取組】

当社グループのサステナビリティに関する考え方及び取組みは、次の通りであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

### (1) サステナビリティに関する考え方

当社グループは、「食卓に、自然としあわせを。」という企業理念のもと、「エスビー食品行動規範」に基づいた事業活動を実践しております。

そして、環境負荷低減やダイバーシティなどさまざまな社会的課題の解決を当社グループにとっての経営上の重要な課題として捉え、それらに関わるすべてのステークホルダーの皆様の信頼が得られるように、コーポレート・ガバナンス体制を強化しております。

#### <サステナビリティ方針>

私たちは、「地の恵み」を事業の核とする企業として、社会や環境との調和を図り、理念と行動規範に基づく活動を通じて、すべてのステークホルダーの皆様から信頼を得られるよう努めるとともに、持続可能な社会の実現に貢献します。

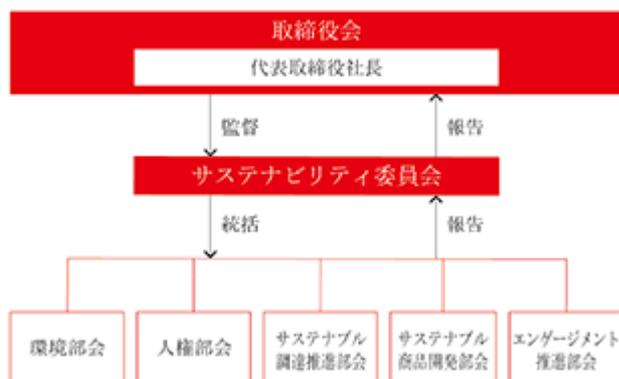
この他、関連方針として「人権方針」「環境基本方針」「サステナビリティ調達基本方針」「マルチステークホルダー方針」を制定し取組みを進めております。各方針の詳細につきましては、当社ホームページをご覧ください。

- ・人権方針 (URL <https://www.sbfoods.co.jp/company/policy/humanright/>)
- ・環境基本方針 (URL <https://www.sbfoods.co.jp/company/sustainability/environment/policy.html>)
- ・サステナビリティ調達基本方針  
(URL <https://www.sbfoods.co.jp/company/sustainability/society/procurement/policy.html>)
- ・マルチステークホルダー方針  
(URL [https://www.sbfoods.co.jp/company/policy/pdf/multi\\_stakeholder.pdf](https://www.sbfoods.co.jp/company/policy/pdf/multi_stakeholder.pdf))

#### サステナビリティ推進体制（ガバナンス）

当社グループのサステナビリティ推進体制は下図の通りになっており、取締役会の直轄組織であり、代表取締役社長が委員長を務める「サステナビリティ委員会」を年2回開催し、取締役会への報告を行っております。また、下部組織として環境部会、サステナブル商品開発部会、サステナブル調達推進部会、エンゲージメント推進部会の4部会にて、サステナビリティに関する目標設定や進捗状況のモニタリング、達成内容の評価などを行なうことに加え、2023年4月より当社事業に関わる全ての人々の人権尊重の強化を目的に「人権部会」を設置いたしました。新設の「人権部会」においては、サステナビリティ調達推進部会及びリスクマネジメント委員会並びに下部組織のコンプライアンス部会と連携しながら、当社グループの人権デューデリジェンス体制の構築・運用を推進してまいります。

#### <サステナビリティ推進体制>



#### マテリアリティとエスビー食品ミッション（リスク管理と戦略）

当社グループでは、外部の専門家の協力のもと、食品業界に関連する社会課題を網羅的に抽出し、社内外のステークホルダーへのアンケートを通して重要度を評価しております。評価の結果を踏まえて、当社グループにとって重要度の高い課題をマテリアリティとして特定し、当社グループが社会に価値を提供する企業として永続的に存在し、成長し続けるために取り組む社会課題の目標を「エスビー食品ミッション」として掲げております。

このミッションのもと、事業を通じてSDGsの達成に寄与することを目指し、バリューチェーンの各段階において、社会・環境に配慮した商品の提供、環境負荷の低減や、ダイバーシティの推進といったさまざまな活動に継続して取り組んでおります。

当社グループのマテリアリティと「エスビー食品ミッション」につきましては、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」をご参照ください。

また、サステナビリティ分野を含む「全社共通リスク」「オペレーショナルリスク」はリスクマネジメント体制にて管理・監督を行っております。詳細につきましては、「3 事業等のリスク」をご参照ください。

指標と目標

「エスビー食品ミッション」は、当社グループの経営計画にも盛り込んでおります。第3次中期経営計画における非財務目標につきましては、「1 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」をご参照ください。

また第3次中期経営計画の非財務目標のうち、「持続可能な調達」につきましては2023年度、2030年度を目標とした以下コミットメントを制定し取り組みを進めております。

<持続可能な調達に関するコミットメント>

・香辛料

主要香辛料（1）について、2030年度を目標として安全・人権・環境・コンプライアンスに配慮した持続可能な調達を目指します。また、フェアトレード・有機認証香辛料の調達や契約栽培の拡大も引き続き進めていきます。

1 主要香辛料：こしょう・唐辛子・マスタード・パセリ・ローレル・オレガノ・わさび・ターメリック・コリアンダー・クミン

・パーム油

当社グループの全製品に使用しているパーム油を2023年度中に100%RSPO認証油に切り替え（2）、今後もこの取り組みを継続するとともに、2030年度を目標として産地、サプライヤーとの連携を通じて、持続可能な調達実現のためのエンゲージメントの構築（3）を目指します。

2：2023年度100%RSPO認証（マスパランスとブックアンドクレームの組み合わせにより）達成を目標

3：定期的な現地調査、サプライヤーを通じた農園や現地工場との連携及び小規模農家支援、苦情処理手順の構築

・紙

当社グループのカレーなどのルウ製品、レトルト及びチューブ入り香辛料のパッケージに使用している紙について、2023年度中に100%FSC認証紙に切り替えます。

以降、対象製品を瓶入り香辛料のラベルや紙を使用している製品の袋等にも拡大し、2030年度までに当社グループの製品パッケージに使用する紙を100%FSC認証紙に切り替えることを目指します。

(2) TCFD提言への対応（気候変動への対応）

当社グループでは、地球環境保全への取り組みとして環境負荷の低減を「エスビー食品ミッション」の一つとして掲げております。特に気候変動は事業に重大な影響を与える問題と捉えており、脱炭素活動を推進していくとともに、激甚化傾向にある自然災害に対しては、リスクマネジメントにより、リスクの低減に努めております。また、TCFD（気候関連財務情報開示タスクフォース）の提言に基づき、「ガバナンス」「戦略」「リスク管理」「指標と目標」の4項目について、積極的に情報開示を推進してまいります。

項目	内容
ガバナンス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・災害リスクを含む気候変動に関するリスクと機会は、サステナビリティ委員会及びリスクマネジメント委員会で議論しており、取締役会の直轄組織として設置しております。両委員会のメンバーは取締役を中心に構成され、代表取締役社長が委員長を担い、気候変動に関する課題の最終責任を負っております。</li> <li>・取締役会は、気候変動や災害リスクに関する活動をリスクマネジメント委員会より年2回進捗確認し、経営判断及び管理・監督を行っております。また、サステナビリティ委員会より報告された非財務目標を決議し、持続可能な調達に関するコミットメントやCO<sub>2</sub>排出量削減目標の発表や進捗の確認を行っております。</li> </ul>

項目	内容				
戦略	<p>・当社は、気候変動のリスクと機会による事業インパクト、対応策の検討に向けて、2050年の世界観に基づいてシナリオ分析を実施いたしました。なお、シナリオは、国連気候変動に関する政府間パネル（IPCC）及び国際エネルギー機関（IEA）の情報を参照し、2 /1.5 シナリオと4 シナリオの2つのシナリオを選択いたしました。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>主なリスク項目</th> <th>主な対応策</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>炭素税、排出量取引枠</li> <li>消費者の行動変化</li> <li>平均気温の上昇</li> <li>異常気象の激甚化</li> </ul> </td> <td> <ul style="list-style-type: none"> <li>CO<sub>2</sub>排出量削減目標の達成に向けた取組み</li> <li>環境配慮商品の開発など、ビジネスモデルの転換</li> <li>香辛料の栽培適応地の分散、シフト、新規開拓</li> <li>水害や熱中症 / 感染症に対する職場環境対策</li> </ul> </td> </tr> </tbody> </table>	主なリスク項目	主な対応策	<ul style="list-style-type: none"> <li>炭素税、排出量取引枠</li> <li>消費者の行動変化</li> <li>平均気温の上昇</li> <li>異常気象の激甚化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>CO<sub>2</sub>排出量削減目標の達成に向けた取組み</li> <li>環境配慮商品の開発など、ビジネスモデルの転換</li> <li>香辛料の栽培適応地の分散、シフト、新規開拓</li> <li>水害や熱中症 / 感染症に対する職場環境対策</li> </ul>
主なリスク項目	主な対応策				
<ul style="list-style-type: none"> <li>炭素税、排出量取引枠</li> <li>消費者の行動変化</li> <li>平均気温の上昇</li> <li>異常気象の激甚化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>CO<sub>2</sub>排出量削減目標の達成に向けた取組み</li> <li>環境配慮商品の開発など、ビジネスモデルの転換</li> <li>香辛料の栽培適応地の分散、シフト、新規開拓</li> <li>水害や熱中症 / 感染症に対する職場環境対策</li> </ul>				
リスク管理	<p>・代表取締役社長を委員長としたリスクマネジメント委員会を設置し、業績への影響が大きいリスクを重要度分析により「全社共通リスク」と「オペレーショナルリスク」に分けて管理しており、「全社共通リスク」の中には、気候変動による災害リスクが含まれております。また、四半期毎の委員長への活動報告及び年2回の取締役会での状況報告により、リスクの管理・監督を行っております。</p> <p>&lt;気候変動に関するリスク対応の例&gt;          地域や事業内容に応じたBCPを策定し、自然災害や感染症に対する初期対応・報告方法・各対策本部の設置と役割を明確にしております。</p>				
指標と目標	<p>当社グループは、2050年までにカーボンニュートラルを目指します。          2030年の目標は以下になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>CO<sub>2</sub>排出量50%の削減（2019年度比 スコープ1、2）</li> <li>サプライチェーンCO<sub>2</sub>排出量30%の削減（2019年度比 スコープ3）</li> </ul>				

### (3) 人的資本

#### 戦略

当社は、社員が会社にとっての「財産」であるという考えのもと、「個性のミックススパイス」である社員が多様な強みを発揮し、生き生きとやりがいをもって働けることが重要であると考えております。社員一人ひとりが、理念・ビジョンに共感し主体的な理想を持ち同じ方向に向かって活動をしていくことで組織力を高め、いかなる環境においても持続的に成長し、社会から必要とされる人・企業になることを目指して、人財育成や、ダイバーシティ&インクルージョンの実現、健康で生き生きと働ける職場づくりに関する各種施策を推進し、積極的な人的資本経営を行っております。

#### < S & B 人事ポリシー >

当社で働く人財に対する普遍的な価値観（人事理念）を「S & B 人事ポリシー」として掲げ、多様な人財が個々の能力を最大限発揮し、主体性をもって活躍できるよう、各種人事施策を実施しております。

#### ・一人ひとりの多様な強みを活かせる体制を追求します

「個性のミックススパイス」である当社において、社員一人ひとりが理念やビジョンに共感し、それぞれの多様な強みを活かして働けることはとても大切であると考えています。それぞれの得意分野を伸ばすことで、一人ひとりがイキイキと働ける体制を追求していきます。

#### ・挑戦する人が成長できる機会と仕組みを提供します

「成長したい!」という強い想いで色々な仕事に挑戦している人をサポートします。失敗を恐れずに挑戦することを評価し、そのような仲間が互いに切磋琢磨して成長できる機会と仕組みを提供していきます。

#### ・個々の「役割」や「成果」に対して、正しく報います

期待される役割や、その役割を通じて出された成果に正しく報います。過去の実績にとらわれず、今の役割と成果貢献を適切に評価することで、次の活躍機会の提供に繋がっていきます。

#### ・誰もが健やかに働き続けられる環境を整備します

おいしさと健康をお届けする企業として、社員一人ひとりが健やかであることが基盤であると考えています。社員のみなさんが心身ともに元気に働き続けられるよう、会社としてサポートできる環境を整備していきます。

## ア．人財育成

当社では、公正かつ透明な環境のなかで、社員一人ひとりの持ち味や主体性、自ら成長しようとする意欲を最大限に尊重し、成長をサポートする各種育成プログラムの整備を進めております。具体的には、次世代を担う中核人財の育成プログラムや、海外・ITなどの重点分野における専門的なスキルの獲得に向けた育成プログラム、当社のコアコンピタンスであるスパイス&ハーブに関する基本教育など、積極的に人財投資を行い、生産性向上と付加価値の最大化を実現し、持続的な成長を目指しております。

### a．次世代を担う中核人財の育成

#### (次世代グローアッププログラム)

企業の持続的な成長に向けた社員力向上のため、次世代を担う人財に必要な要素である“ポータブルスキル”(=部門、職種の垣根を越えて基盤となるスキル)の習得を狙いとした育成体制を整備し、若年層から自律的かつ計画的な学習による成長を支援しています。

### b．重点分野における専門的スキルの獲得

#### (デジタル人財育成)

業務変革、デジタルシフトの取組み推進を目的に、2022年より全社でデジタルリテラシー教育を強化しております。公募型の「デジタル人財育成研修」では、一定期間に亘る研修の中で、デジタル技術による新たな価値創造や業務改革の企画実行スキルを、各階層や育成後の期待役割に応じて身に付けられるよう支援しております。また、デジタル技術を業務改善に活用するために、高度な知識を持たなくても利用できる「ローコードアプリ開発研修」の実施や、全社員を対象とした「ITパスポート」の資格取得を推進しております。

#### (グローバル人財育成)

重点分野である海外ビジネスにおいて、将来的なグローバルリーダーとなりうる人財の戦略的な育成を図るために、グローバル人財育成プログラム(国内外研修)を行っております。育成プログラムを通じて、グローバルフィールドにおける事業の流れを網羅的に把握し、多様な相手との異文化コミュニケーションやグローバルリーダーとしての素養、多文化適応能力、ビジネスを進めるスキルを獲得することを狙いとし、積極的に取組みを進めております。

### c．コアコンピタンスであるスパイス&ハーブに関する基本教育

#### (スパイス&ハーブ資格制度)

当社ではコアコンピタンスであるスパイス&ハーブをあらゆる業務知識の土台とし、関連する知識や経験の習得については、スパイス&ハーブの楽しみ方、魅力、感動を伝える際などに必要な基本教育と捉えております。2003年より「スパイス&ハーブマスター」という社内資格を制定し、ステークホルダーに向けてスパイス&ハーブの魅力を伝える活動を行っている他、2007年より全社を対象にスパイス&ハーブの社内検定試験を実施するとともに、年1回の資格更新制度を導入し、定期的な学び直しにより習得した知識の維持・活用を図っております。

## イ．ダイバーシティ&インクルージョンの実現～多様な人財の活躍 働きやすく・働きがいのある職場～

当社では、「ダイバーシティ・マネジメント」を企業の持続的な成長に向けた重要な経営戦略の一つと位置付け、ダイバーシティ推進の「5つの柱」のもと、組織の人財多様化を進め、多様な人財が主体性をもって活躍できる環境整備などの施策を積極的に推進しております。各種施策を推進し、社員一人ひとりが「働きやすさ」「働きがい」を感じられる職場の実現を目指してまいります。



a．組織の人財多様化推進

多様な人財の採用や育成、登用を積極的に進めることで企業活動に多様な視点を取り入れ、イノベーションを生み出すことのできる組織を目指しております。管理職の登用においては、性別を問わず、適した人財を適切なタイミングで登用することが当たり前の風土を醸成し、誰もが活躍できる組織の実現に取り組んでおります。今後も、変化スピードの著しい世の中に対応し、多様な人財を確保し続けるために、男女同程度の新卒採用比率の継続を目標とするとともに、キャリア採用においても必要な人財を適宜採用・登用してまいります。

b．仕事と生活がともに充実できる環境

個々の状況に応じて仕事と私生活を両立し、安心して力を発揮できるように、育児・介護関連をはじめとする各種制度の整備にも力を入れて、働きやすい職場づくりの実現にも取り組んでおります。

育児との両立支援施策としては、事業所内保育所である「バジリック保育園」の運営や、お子様の1歳のお誕生日をお祝いする制度などを設けており、2021年1月には、優良な「子育てサポート企業」として、男性の育休取得率や、出産後の在職率などの特例認定基準を満たし、より高い水準の取組みを行ったとのことで、厚生労働大臣の特例認定（プラチナくるみん認定）を受けました。



c．従業員エンゲージメントの向上

さらなる組織力強化を目指し、2017年より従業員エンゲージメント向上のための各種施策に取り組んでおります。年1回以上の社員意識調査や、役職者向けの組織力向上ワークショップ、組織ごとの分科会の実施やアクションプランの策定・実行、社内コミュニケーション向上のためのオンライン座談会などを実施し、活躍する社員一人ひとりが働きがいを感じられる職場の実現にも力を入れております。

ウ．健康で生き生きと働ける職場づくり

おいしさと健康をお届けする企業として、社員一人ひとりが健康で生き生きと活躍できる「健康企業」を目指し、健康推進方針を掲げ、社員の健康増進や昼食環境整備の実施など、実質的健康度の向上に向けた取組みを進めております。

<健康推進方針>

当社のビジョン「『地の恵み スパイス&ハーブ』の可能性を追求し、おいしく、健やかで、明るい未来をカタチにします。」のもと、おいしさとともに健康をお届けする企業として、社員一人ひとりが健やかであることが基盤と考え、社員がより生き生きと活躍できるよう健康管理を推進してまいります。

a．社員の健康増進

社員の心と身体の健康の維持と向上を担う「健康推進局」を設置し、定期健康診断やストレスチェック運営のほか、健康に関する情報発信、各事業所・職場の保健衛生活動の支援等を行っております。また、健康推進局には常勤の保健師のほか、管理栄養士、産業カウンセラーの有資格者が在籍し、社員のさまざまな個別相談にも応じております。当社は、経済産業省と日本健康会議が共同で選定する「健康経営優良法人認定制度」において、「健康経営優良法人2023（大規模法人部門）」に認定されており、2020年に初めて認定を受けて以来、4年連続で認定を受けております。



b. 昼食環境の整備 板橋スパイスセンター社員食堂「SPICE SQUARE」

おいしさと健康をお届けする企業として、社員一人ひとりにおいても「食を大切に楽しみ」「健康で生き生きと」活躍できる環境整備を更に推進することを趣旨として、2021年4月に板橋スパイスセンターの社員食堂を「SPICE SQUARE」としてリニューアルオープンいたしました。当社らしいこだわりのカレーや、スパイス&ハーブをポイントとしたメニュー提供のみならず、「おいしく・健康的」をポイントに、健康米や野菜を摂取しやすいメニューなど、バランスのよい食事を提供しております。減塩やビタミン強化などのテーマ性をもたせたフェアメニューの実施や、血管年齢や肌年齢測定などの健康啓発イベントも定期的に行っております。



指標と目標

重点項目	取組み内容	指標と目標	
人財育成	次世代を担う中核人財の育成	次世代グローアッププログラムの参加者	(実績) 2022年3月時点 228名
	重点分野における専門的スキルの獲得	デジタル人財育成研修の受講者	(実績) 2022年3月時点 20名
	コアコンピタンスであるスパイス&ハーブの基本教育	スパイス&ハーブ資格制度の取得者	(実績) 2022年3月時点 1,084名 (スパイス&ハーブマスター25名)
ダイバーシティ&インクルージョンの実現	組織の人財多様化推進	男性・女性の新卒採用比率	(目標) それぞれ40%以上を継続 (注) 1 (実績) 2023年4月入社 男性: 52.2%、女性: 47.8%
		管理職に占める女性労働者の割合	(実績) 2023年3月時点 11.6%
		キャリア採用比率(男女計)	(実績) 2022年度採用 57.5%
	仕事と生活がともに充実できる環境	男性社員の育休取得率(子が1歳に達するまでに育児休業を取得した者の割合)(注) 2	(目標) 2025年度までに80%以上取得 (注) 1 2030年度までに100%取得 (実績) 2022年度 66.7%
		年次有給休暇取得率	(目標) 2025年度までに80%取得 (注) 1 (実績) 2022年度 76.9%
	従業員エンゲージメントの向上	社員意識調査回答率	(実績) 2022年度 100%
		社員意識調査によるエンゲージメント指標の向上	(目標) 2025年度までに5%向上(2022年度比) (注) 1
健康で生き生きと働ける職場づくり	社員の健康増進	「食事」「運動」「睡眠」に関する生活改善プログラムの実行	(目標) 2025年度までに70%以上の社員のプログラム達成 (注) 1
		健康保険組合保健師・栄養士による特定保健指導の実施	(目標) 2025年度までに全社員100%の実施 (注) 1

(注) 1. 第3次中期経営計画の非財務目標としても掲げております。

2. 「第1 企業の概況 5 従業員の状況」に記載の数値とは、算出方法が異なっております。

### 3【事業等のリスク】

#### [方針]

当社グループは、社会的責任を果たすため、企業活動を取り巻くさまざまなリスクに備えた体制を整備しております。当社グループの経営に重大な影響を及ぼすおそれのあるリスクの回避、または軽減を図るため、「リスクマネジメント基本規程」や各種マニュアルを制定・作成しております。また、諸種のリスク管理を所管する「リスクマネジメント委員会」を設置し、リスク管理体制の構築と運用にあっております。

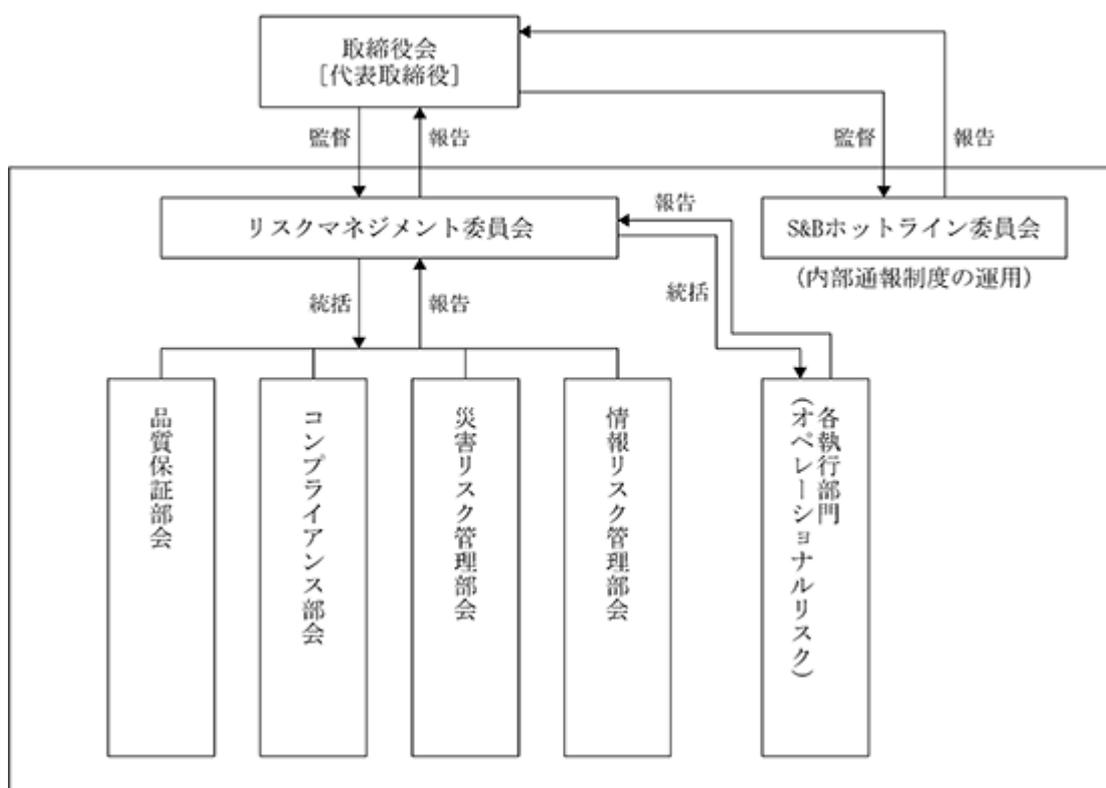
部門横断的な対応が求められるリスクに関しては、リスクの種類に応じて設置された専門部会が、それぞれ主体的にリスク対策を構築しております。専門部会は、リスクの発生を想定した訓練や従業員向けのeラーニングを定期的実施するなど、不測の事態が発生した時に、迅速かつ適切に対応できるよう、平時からの備えを充実させております。

また、各執行部門で管轄するリスクについても、同様の考え方に基づいて対応しております。

リスクマネジメント委員会は、部門横断的な対応が求められるリスクや、各執行部門で管轄するリスク（オペレーショナルリスク）について、リスクアセスメント（特定・分析・評価）の実施、対応策の策定、管理状況のモニタリングを行っております。また、これらの活動に対して、コミュニケーション及び協議を行い、適切なリスクマネジメント活動を推進しております。そして、定期的に取り締役に活動を報告し、取締役会から重大リスクへの対応を監督されております。

有価証券報告書提出日現在のリスクマネジメント体制図は次の通りであります。

#### <リスクマネジメント体制>



#### [個別のリスク]

有価証券報告書に記載した事業の状況、経理の状況等に関する事項のうち、経営者が連結会社の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況に重要な影響を及ぼす可能性があると認識している主要なリスクは、以下の通りであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

#### (1) 市場環境の変化

当社グループの事業の大部分は、日本国内で展開しておりますが、国内人口は依然として減少傾向にあります。また、世帯構造の変化、生活習慣や嗜好の多様化などにより、製品に求められるものも複雑になってきており、市場環境の変化に対応した製品の開発に努めておりますが、国内における長期的な人口減少や、パンデミック、自然災害、国際紛争（ウクライナにおける地政学リスク等）、人権問題等から生ずるお客様の消費行動の急激な変化など、市場環境が大きく変わる場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(2) 原材料の調達

当社グループは、世界的な気候変動や需給バランス、作柄、国際相場などさまざまな調達リスクや市場の変化に素早く対応できるよう、原料により産地を分散化し安定的に調達できるよう努めております。さらに、サステナビリティ調達基本方針及び人権方針によりサプライチェーン上での人権リスクの予防・低減を図っております。

また、当社グループの製品の原材料は多岐にわたっているため、通常は特定の原材料の市況変動等が当社グループの業績に与える影響は大きくありません。

しかしながら、世界的な需給バランスの変化や不作、調達国における法律等の変更や政治的混乱、国際紛争、長期間に及ぶ大きな為替変動等により原材料の大幅な価格上昇や調達量不足が生じた場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(3) 食の安全性の問題

当社グループは、製品の安全・安心を経営の重要課題と捉え、原材料調達及び生産・流通の各段階において食の安全性や品質を確保するため、FSSC 22000の管理手法を取り入れた品質管理体制の整備拡充を進めるとともに、トレーサビリティをはじめ生産履歴に関する情報管理システムのさらなる充実に努めております。また、意図的な異物混入等に対するフードディフェンス（食品防御）について、生産工場の屋外管理・アクセス管理・施設内の工程管理・従業員教育等を進めております。

しかしながら、食の安全性や品質に係る社会的な問題等、このような取組みの範囲を超えた事象が発生した場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(4) 法的規制等

当社グループは、食品衛生法、日本農林規格等に関する法律（JAS法）、食品表示法、不当景品類及び不当表示防止法、環境・リサイクル関連法規等の法的規制を受けております。当社グループにおいては、これらの法的規制等を遵守すべく体制の整備を図っておりますが、これらの法的規制が強化または現時点において予期し得ない法的規制等が設けられた場合には、当社グループの活動が制限される可能性があり、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(5) 海外での事業展開

当社グループは、米州や欧州、アジア、オセアニア、中近東など、世界各地域の小売店やレストランなどに向けて製品を販売し、海外事業を展開しております。各地域で異なる地域特性や法規制、市場ニーズなどを考慮しながら事業活動を展開しておりますが、これら各地域の国々における法律等の変更や政治的混乱、国際紛争、パンデミック、自然災害等により予期せぬ事象が発生した場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(6) 情報及び情報システム

当社グループは、開発、生産、販売その他の業務を情報システムにより管理しておりますが、これらのシステムは、サイバー攻撃への対策など、現在想定しうる適切な情報セキュリティ対策を実施し保護に努めております。また、当社グループは、販売促進キャンペーン等を通じ多くのお客様の個人情報を保持しておりますが、これら個人情報を含む重要情報は、改正個人情報保護法に対応し、会社情報取扱規程、情報セキュリティ管理規程等の社内規程に基づき適切な管理体制を構築するとともに、全役職員への周知を図っております。

しかしながら、ソフトウェアや情報機器の欠陥、不正アクセス、コンピューターウイルスの感染、自然災害の発生など想定を超えた事象により、情報システムに障害が発生する可能性、及び情報の消失、漏えい等の被害を受ける可能性があります。このような事態が発生した場合には、事業活動への支障、社会的信用の低下等により、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(7) レピュテーション

当社グループは、全役職員共通の規範・価値観を持ち、企業価値の向上に努めております。また、社会的に発せられる情報に対して、迅速・適切・冷静に対応しております。

しかしながら、情報の内容・発信方法等によって企業価値が下がるような場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(8) 自然災害等

当社グループは、上田工場、東松山工場、宮城工場等の生産工場を有しております。大地震や台風等の風水害といった自然災害等の緊急事態に備え事業継続計画（BCP）、防災マニュアルを整備し、これに基づき対処する体制をとるとともに、定期的な訓練を行っております。

しかしながら、設備の重大な被害、原材料のサプライチェーン及び社会インフラ等の問題により生産に支障をきたした場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(9) パンデミック

当社グループは、ウイルスや細菌等による感染症が急速に拡大した時を想定し、全役職員が速やかに適切な行動をとれるように対応マニュアルを作成しております。

2020年より感染が拡大した新型コロナウイルス感染症に対して上記対応マニュアルを逐次改訂し、在宅勤務などのテレワークや国内外への出張制限等を実施、必要に応じてPCR検査体制を構築することで、全役職員の感染予防・拡大防止を徹底しております。

しかしながら、これまでにない新型のウイルス等による感染症の発生・流行の拡大など、予期せぬ事象が発生した場合には、国内外における消費の低迷やサプライチェーンの混乱、全役職員や協力企業、取引先への感染等による事業活動への影響により、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(10) 人材流出

当社グループは、活力ある企業であり続けるために、従業員一人ひとりが個性を發揮し、生き生きとやりがいをもって働くことができることが重要であると考え、さまざまな人事施策を検討・実施し、労働市場において一定の競争力を持ち得る処遇体系を整備しております。

しかしながら、国内の少子高齢化や労働市場のグローバル化等を背景とした雇用の流動化に伴って人材確保の難易度は上がっており、計画した採用予定数の不足や予期せぬ人材の流出などが発生した場合には、間接的に当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(11) 社会・環境への責任

当社グループは、水使用量削減、CO<sub>2</sub>排出量削減、廃棄物再資源化等の徹底を図り、関連する各種環境規制を遵守しております。また、人権・労働基準・環境等の社会的責任にも配慮した調達・生産活動を推進しており、さらにTCFD提言に沿った対応を進めてまいります。気候変動や社会環境問題への注目など、当社グループの取組みの範囲を超えた社会的現象や法的規制の強化が発生した場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(12) 取引先の経営状態による影響

当社グループは、債権保全のため情報収集や与信管理を徹底し、債権の回収不能という事態の未然防止に注力しております。また、売上債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を貸倒引当金として計上しておりますが、このような取組みの範囲を超える予期せぬ取引先の経営状態の悪化が生じた場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(13) 投資有価証券

当社グループは、安定的・中長期的な取引関係の維持・強化を目的として主要取引先の株式を所有しており、前連結会計年度末及び当連結会計年度末現在の投資有価証券の状況は下記の通りであります。

今後、株式相場の状況によっては、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額（百万円）	構成比（％）	金額（百万円）	構成比（％）
投資有価証券	9,436	7.3	10,100	7.7
上記のうち評価差額	4,314	3.3	5,031	3.9
総資産額	128,984	100.0	130,462	100.0

(14) 退職給付会計

退職給付費用及び債務は、退職給付会計基準や関連する実務指針等に従い計算を行っており、計算にあたっては数理計算上使用するさまざまな基礎率を使用しておりますが、会計基準や基礎率等、計算の前提条件、退職給付制度や関連する法令等が変更になった場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(15) 繰延税金資産

当社グループは繰延税金資産について、回収可能性を検討し計上を行っておりますが、今後の業績動向等により、その回収可能性の判断に変更が生じた場合には、繰延税金資産の計上額が変動し、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、税率の変更を伴う税制の改正等があった場合には、法定実効税率の変動による繰延税金資産の増減が生じ、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(16) 減損会計

当社グループは、継続的に収支の把握がなされている単位を基礎として資産のグルーピングを行い減損の判定を行っておりますが、収益性の低下、地価の下落等により減損損失の計上が必要となった場合には、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

## 4【経営者による財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

## (1) 経営成績等の状況の概要

当連結会計年度における当社グループの財政状態、経営成績及びキャッシュ・フロー（以下、「経営成績等」といいます。）の状況の概要は以下の通りであります。

## 財政状態及び経営成績の状況

当連結会計年度におけるわが国経済は、新型コロナウイルス感染症に伴う行動制限が緩和され、徐々に、経済活動の正常化の動きが見られる一方、ウクライナ情勢長期化の影響等による原材料の価格高騰や供給面での制約に加え、外国為替市場での急激な円安の進行などから、先行きは依然として不透明な状況で推移いたしました。

食品業界におきましては、外食需要の回復の動きといった消費行動や市場構造の変化、原材料・エネルギー価格の高騰等の要因により物価上昇が続いているほか、更なる物価上昇懸念等の先行きへの不安からお客様の節約志向が高まるなど、引き続き厳しい経営環境となりました。

このような状況のなかで、当社グループは、企業理念・ビジョンのもと、2020年4月より開始いたしました第2次中期経営計画に基づき、「地の恵み スパイス&ハーブ」を核とした事業活動を推進するとともに、社会環境の変化やお客様のニーズの多様化への対応に全社一体となって取り組んでまいりました。

また、新型コロナウイルス感染症に対しては、徹底した対策を継続し従業員の安全確保と製品の安定的な生産・供給に努めてまいりました。

以上の結果、当連結会計年度の売上高は、食料品事業におきまして、外食需要の回復の動きが進んだことに加え、即席グループやインスタント食品その他グループを中心に、家庭用製品も堅調に推移いたしましたことなどから、前期比26億4百万円増の1,206億51百万円（前期比2.2%増）となりました。利益面につきましては、売上高は増加いたしましたものの、原材料価格等の高騰により売上原価率が上昇いたしましたことから、営業利益は前期比32億18百万円減の53億99百万円（同37.3%減）、経常利益は前期比32億44百万円減の54億65百万円（同37.2%減）、親会社株主に帰属する当期純利益は前期比21億44百万円減の40億80百万円（同34.5%減）となりました。

セグメント別・製品区分別の経営成績は、以下の通りであります。

なお、食料品事業内の各製品区分別の売上高は出荷価格ベースのため、その合計は食料品事業の売上高と一致いたしません。

（単位：百万円）

	売上高			セグメント利益		
	2022年3月期	2023年3月期	増減額	2022年3月期	2023年3月期	増減額
食料品事業	104,948	107,382	2,434	7,805	4,568	3,236
調理済食品	13,098	13,268	169	769	787	17
調整	-	-	-	42	42	0
合計	118,046	120,651	2,604	8,617	5,399	3,218

（注）1．各セグメントの売上高は、セグメント間内部売上高消去後の数値を記載しております。

2．セグメント利益の調整額は、セグメント間取引消去であります。

## ア．食料品事業

即席グループやインスタント食品その他グループが順調に推移いたしましたことから、売上高は前期比24億34百万円増の1,073億82百万円（同2.3%増）となりました。なお、セグメント利益（営業利益）は前期比32億36百万円減の45億68百万円（同41.5%減）となりました。

## &lt;スパイス&amp;ハーブ&gt;

業務用香辛料が堅調に推移いたしましたものの、洋風スパイス、シーズニングスパイスが減少いたしました。

以上の結果、売上高は前期比1億12百万円減の303億25百万円となりました。

## &lt; 即席 &gt;

主力ブランドの「ゴールデンカレー」が順調に推移いたしますとともに「栗原はるみ わたしのカレー」などのパウダールウ製品も寄与いたしました。

以上の結果、売上高は前期比29億41百万円増の362億70百万円となりました。

## &lt; 香辛調味料 &gt;

チューブ製品はお徳用タイプが堅調に推移したものの、「本生」シリーズなどが減少いたしました。また、「李錦記」ブランド製品も減少いたしました。

以上の結果、売上高は前期比13億円減の412億81百万円となりました。

## &lt; インスタント食品その他 &gt;

レトルトカレーや「どんぶり党」シリーズなどの家庭用製品が伸長したことに加え、業務用製品も順調に推移いたしました。

以上の結果、売上高は前期比20億43百万円増の315億91百万円となりました。

## イ．調理済食品

調理麺等が増加いたしましたことから、売上高は前期比1億69百万円増の132億68百万円（同1.3%増）となりました。なお、原価低減に努めたことなどからセグメント利益（営業利益）は前期比17百万円増の7億87百万円（同2.3%増）となりました。

## キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度における現金及び現金同等物（以下、「資金」といいます。）は、営業活動により増加したものの投資活動及び財務活動により減少し、前連結会計年度末に比べ44億57百万円減少して、当連結会計年度末には207億55百万円となりました。

当連結会計年度における各キャッシュ・フローの状況とそれらの要因は、次の通りであります。

（単位：百万円）

	2022年3月期	2023年3月期	増減額
営業活動によるキャッシュ・フロー	8,170	641	7,528
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,736	3,049	2,687
財務活動によるキャッシュ・フロー	2,898	3,941	1,043
現金及び現金同等物に係る換算差額	113	74	39
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	350	6,274	5,924
現金及び現金同等物の期首残高	25,563	25,213	350
連結の範囲の変更に伴う現金及び現金同等物の増減額（は減少）	-	1,817	1,817
現金及び現金同等物の期末残高	25,213	20,755	4,457

## （営業活動によるキャッシュ・フロー）

営業活動の結果獲得した資金は、6億41百万円となりました。これは主に、棚卸資産の増加による資金の減少50億78百万円などがあったものの、税金等調整前当期純利益55億10百万円などがあったことによるものであります。

前期と比較して獲得資金は75億28百万円減少いたしました。この要因は主に、棚卸資産の増加による資金の減少（41億35百万円）、仕入債務の減少による資金の減少（32億19百万円）による影響であります。

## （投資活動によるキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は、30億49百万円となりました。これは主に、有形固定資産の売却による収入11億99百万円などがあったものの、有形固定資産の取得による支出49億84百万円などがあったことによるものであります。

前期と比較して使用資金は26億87百万円減少いたしました。この要因は主に、投資有価証券の取得による支出の減少（14億27百万円）、有形固定資産の売却による収入の増加（11億91百万円）による影響であります。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動の結果使用した資金は、39億41百万円となりました。これは主に、借入金の借入・返済に伴う差引支出額20億33百万円、自己株式の取得による支出10億27百万円などがあったことによるものであります。

前期と比較して使用資金は10億43百万円増加いたしました。この要因は主に、借入金の借入・返済に伴う差引支出額の増加(12億1百万円)による影響であります。

また、キャッシュ・フロー関連指標の推移は、以下の通りであります。

	2020年 3月期	2021年 3月期	2022年 3月期	2023年 3月期
自己資本比率(%)	39.6	44.0	46.4	48.2
時価ベースの自己資本比率(%)	43.3	49.2	35.3	32.7
キャッシュ・フロー対有利子負債比率(%)	290.0	305.7	412.4	4,941.3
インタレスト・カバレッジ・レシオ(倍)	24.4	23.5	17.1	1.4

自己資本比率：自己資本 / 総資産

時価ベースの自己資本比率：株式時価総額 / 総資産

キャッシュ・フロー対有利子負債比率：有利子負債 / キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：キャッシュ・フロー / 利払い

(注) 1. いずれも連結ベースの財務数値により計算しております。

2. 株式時価総額は、自己株式を除く発行済株式数をベースに計算しております。

3. キャッシュ・フローは、営業キャッシュ・フローを利用しております。

4. 有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っている全ての負債を対象としております。

5. 「収益認識に関する会計基準」(企業会計基準第29号 2020年3月31日)等を2021年3月期の期首より適用しております。2020年3月期の自己資本比率及び時価ベースの自己資本比率につきましては、当該会計基準等を遡って適用した後の数値となっております。

生産、受注及び販売の実績

ア. 生産実績

当連結会計年度における生産実績をセグメントごとに示すと、次の通りであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	前期比(%)
食料品事業(百万円)	107,926	102.2
調理済食品(百万円)	13,265	101.3
合計(百万円)	121,192	102.1

(注) 金額は出荷価格によっております。

イ. 商品仕入実績

当連結会計年度における商品仕入実績をセグメントごとに示すと、次の通りであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	前期比(%)
食料品事業(百万円)	14,393	103.1
調理済食品(百万円)	-	-
合計(百万円)	14,393	103.1

(注) 金額は商品仕入価格によっております。

ウ. 受注状況

主要製品の受注生産を行っていないため、記載を省略しております。

## エ．販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次の通りであります。

セグメントの名称	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	前期比(%)
食料品事業(百万円)	107,382	102.3
調理済食品(百万円)	13,268	101.3
合計(百万円)	120,651	102.2

(注) 1. セグメント間の取引については相殺消去しております。

2. 最近2連結会計年度の主な相手先別の販売実績及び当該販売実績の総販売実績に対する割合は次の通りであります。なお、出荷価格ベースの売上高により、割合を算出しております。

相手先	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)		当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)	
	金額 (百万円)	割合 (%)	金額 (百万円)	割合 (%)
三菱食品㈱	38,279	25.7	38,062	24.9
三井物産㈱	30,830	20.7	29,530	19.3
国分グループ本社㈱	22,358	15.0	22,946	15.0

## (2) 経営者の視点による経営成績等の状況に関する分析・検討内容

経営者の視点による当社グループの経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容は以下の通りであります。

なお、文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在において当社グループが判断したものであります。

## 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、我が国において一般に公正妥当と認められている会計基準に基づき作成されております。当社グループの連結財務諸表作成において判断や見積りを要する重要な会計方針等につきましては、過去の実績等合理的と考えられる前提に基づき判断し、見積りを実施しておりますが、見積り特有の不確実性があるため、実際の結果は異なる場合があります。

詳細につきましては、「第5 経理の状況 1 連結財務諸表等 (1) 連結財務諸表 注記事項 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

## 当連結会計年度の経営成績等の状況に関する認識及び分析・検討内容

当社グループの当連結会計年度の経営成績等は、概ね「(1) 経営成績等の状況の概要」に記載しておりますが、その主な要因等は次の通りであります。

## ア．財政状態の分析

## (資産)

資産は、前連結会計年度末と比較して14億77百万円増加し、1,304億62百万円となりました。これは主に、現金及び預金の減少44億59百万円などがあったものの、棚卸資産の増加51億19百万円、貸倒引当金の減少10億69百万円などがあったことによるものであります。

## (負債)

負債は、前連結会計年度末と比較して15億44百万円減少し、675億36百万円となりました。これは主に、仕入債務の増加13億5百万円などがあったものの、借入金の減少20億33百万円、未払法人税等の減少6億67百万円などがあったことによるものであります。

## (純資産)

純資産は、前連結会計年度末と比較して30億22百万円増加し、629億25百万円となりました。これは主に、利益剰余金の増加34億74百万円などがあったことによるものであります。この結果、自己資本比率は48.2%(前期46.4%)となりました。

## イ．当連結会計年度の経営成績の分析

## (売上高)

売上高は、前期比26億4百万円増の1,206億51百万円(前期比2.2%増)となりました。これは、「食料品事業」及び「調理済食品」の売上高がともに増加したことによるものであります。

セグメント別の状況につきましては、「(1)経営成績等の状況の概要 財政状態及び経営成績の状況」をご参照ください。

## (営業利益)

売上高は増加したものの、売上原価率も増加したことにより、売上総利益は前期比26億96百万円減の292億11百万円(同8.5%減)となりました。

また、販売費及び一般管理費につきましては、広告宣伝費等が減少したものの、人件費等が増加したことにより、売上高に対する比率は19.7%(前期19.7%)となり、売上総利益が減少したことから、営業利益は前期比32億18百万円減の53億99百万円(前期比37.3%減)となりました。この結果、売上高営業利益率は4.5%(前期7.3%)となりました。

## (経常利益)

営業外損益につきましては、支払利息4億53百万円などがあったものの、受取配当金2億63百万円、為替差益1億6百万円などがあったことから、66百万円の利益となりました。なお、営業利益が減少したことにより、経常利益は前期比32億44百万円減の54億65百万円(前期比37.2%減)となりました。

## (親会社株主に帰属する当期純利益)

特別損益につきましては、固定資産除却損などの特別損失が2億81百万円発生しましたが、補助金収入などの特別利益が3億26百万円発生したことから、44百万円の利益となったものの、税金等調整前当期純利益は前期比30億93百万円減の55億10百万円(同36.0%減)となりました。

なお、当期の税効果会計適用後の法人税等の負担率は25.9%(前期27.6%)となり、親会社株主に帰属する当期純利益は前期比21億44百万円減の40億80百万円(前期比34.5%減)となりました。この結果、ROEは6.6%(前期10.8%)となりました。

	2022年3月期	2023年3月期
売上高営業利益率	7.3%	4.5%
自己資本比率	46.4%	48.2%
ROE	10.8%	6.6%

## ウ．経営成績に重要な影響を与える要因

当社グループの経営成績に重要な影響を与える要因につきましては、「3 事業等のリスク」に記載した通りであります。

## エ．資本の財源及び資金の流動性

## a．資本政策の基本方針

当社グループは、事業活動により得られた資金の配分に関しましては、安定的な株主還元を行う中で、持続的な成長と企業価値の向上に資する事業や成長分野への投資へ配分するとともに、財務体質の強化と堅実な経営基盤の確保に努めることを資本政策の基本方針としております。

財務体質の強化にあたっては、事業活動に必要な水準の現金及び現金同等物を保有し流動性を確保するとともに、今後の事業展開に向けた投資と内部留保の充実のバランスを勘案しながら、自己資本比率及びROEの維持向上を目指して参ります。

## b．資金需要の内容

当社グループの運転資金需要のうち主なものは、製品製造に必要な原材料の調達費用や、製品販売のための販売促進費や広告宣伝費、物流費などの営業費用であります。設備投資需要のうち主なものは、製品製造のための建物等の建設費用及び生産設備の購入費用であります。

c. 資金調達

事業の持続的な成長と企業価値の向上に向けた投資を行うにあたっては、主として営業活動によるキャッシュ・フローを源泉とする自己資金に加え、外部からの資金調達を有効に活用しております。設備投資に関しては、獲得した営業キャッシュ・フローの範囲を原則としておりますが、手元流動性を確保するとともに、必要な資金については調達方法を勘案しながら主に金融機関からの借入により、安定的かつ機動的に調達を実施しております。また、当社グループにおいて借入を行っておりますが、資金調達にあたっては当社が管理を行うことにより、当社グループ全体での資金効率の向上や金融費用の削減に努めております。

d. 資金の流動性

現金及び現金同等物の水準と今後見込まれる営業キャッシュ・フローから、今後の事業活動に必要な手元流動性を十分に確保していると判断しております。また、金融機関と当座貸越枠やコミットメントライン等の設定を行い、緊急時における安定的かつ機動的な資金調達手段を備えております。

5【経営上の重要な契約等】

(事業の譲渡)

当社は、2022年10月7日開催の取締役会において、当社連結子会社である株式会社ヒガシヤデリカ（以下、「ヒガシヤデリカ」といいます。）が運営する事業を株式会社わらべや（現・わらべやデリカ株式会社、以下、「わらべや」といいます。）へ譲渡することを決議いたしました。また、ヒガシヤデリカ及びわらべや間において、当該事業譲渡を内容とする基本合意書を締結いたしました。

1. 事業譲渡の理由

当社グループは創業以来、香辛料を中心とした事業活動を推進しておりますが、近年は「地の恵み スパイス&ハーブ」をコアコンピタンスとし、「食料品事業」におけるスパイスとハーブに関する事業のさらなる拡大や海外事業の拡大などを重点テーマとして取り組んでおります。

このような当社グループの経営戦略を踏まえ、ヒガシヤデリカが運営する「調理済食品」事業のあり方について検討を進めてまいりましたが、このたび、ヒガシヤデリカと同じくセブン・イレブン向け食品製造事業を営むわらべやへヒガシヤデリカの事業を譲渡することを決定し、両社間において基本合意書を締結いたしました。

2. 事業譲渡の相手先の名称

株式会社わらべや（現・わらべやデリカ株式会社）

3. 事業譲渡の内容

(1) 譲渡部門の内容

ヒガシヤデリカの各工場（東松山工場及び北関東工場）で商品を製造し、セブン・イレブン店へ供給する取引に係る事業。

(2) 基本合意書締結日の直前事業年度における譲渡部門の売上高及び経常利益

	2022年3月期
売上高	13,098百万円
経常利益	776百万円（本社部門を含むヒガシヤデリカ全体）

(3) 譲渡部門の資産・負債の項目及び金額

現時点では確定しておりません。

(4) 譲渡価額

約24億円（北関東工場の土地を除く概算）

4. 事業譲渡の日程

取締役会決議日	2022年10月7日
基本合意書締結日	2022年10月7日
最終合意書締結日	2024年2月（予定）
事業譲渡時期	2024年3月（予定）。複数日に分けて実行予定。

## 6【研究開発活動】

当社グループは、企業理念「食卓に、自然としあわせを。」のもと、社会や環境との調和を図り、お客様の視点に立った安全・安心で価値がある製品の開発を推進しております。少子高齢化・女性活躍の推進など社会環境の変化に伴う時短・簡便、健康志向に対応した製品開発を行うとともに、食品ロス削減、環境負荷低減や食物アレルギーへの配慮、さまざまな国や地域の食文化などSDGsの達成を目指した製品開発にも力を入れております。さらに将来に向けた、新技術や新素材等の基礎研究から応用研究まで幅広い研究開発に取り組んでおります。

(主な研究開発)

主要原料であるスパイスとハーブについては、さらなる安全・安心と持続可能な安定供給を目指し、残留農薬分析や、育種・栽培技術、品質評価のための香り分析や、近年注目される優れた機能性の研究にも取り組んでおります。

また、お客様からの多様なニーズに対応した製品を開発するため、食品加工技術や容器包装、微生物制御管理技術等の研究を行っております。

この結果、当連結会計年度の当社グループの研究開発費の総額は、1,349百万円となりました。

なお、セグメント別の研究開発費の金額は、食料品事業1,215百万円、調理済食品133百万円であります。

### 第3【設備の状況】

#### 1【設備投資等の概要】

当連結会計年度において当社グループでは、上田、東松山、宮城の当社3工場及び子会社における製品の安全・安心対策や、生産性向上並びに供給体制の強化を目的とする生産設備の増強や更新、改良などにより、総額4,406百万円の設備投資を行いました。

食料品事業におきましては、当社上田工場及び宮城工場における生産設備の増強、更新を中心に4,120百万円、また、調理済食品におきましては、株式会社ヒガシヤデリカの生産設備の更新、改良などにより286百万円の設備投資を行いました。

なお、重要な設備の除却、売却等はありません。

#### 2【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次の通りであります。

##### (1) 提出会社

2023年3月31日現在

事業所名 (所在地)	セグメントの 名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
			建物及び 構築物 (百万円)	機械装置及 び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
東松山工場 (埼玉県東松山市)	食料品事業	香辛料他生産 設備	1,787	1,080	1,056 (21,540.08)	90	4,014	228 (54)
上田工場 (長野県上田市)	食料品事業	即席製品他生産 設備	4,883	2,591	1,304 (43,767.06)	399	9,178	230 (31)
宮城工場 (宮城県登米市)	食料品事業	香辛料他生産 設備	2,331	1,270	931 (34,741.85)	48	4,581	109 (34)
本社 (東京都中央区)	食料品事業	統括業務設備	666	-	398 (340.18)	665	1,730	58 (0)
八丁堀ハーブテラス (東京都中央区)	食料品事業	統括業務設備・ 販売設備	750	12	771 (641.80)	25	1,559	174 (9)
板橋スパイスセンター (東京都板橋区)	食料品事業	統括業務設備・ 研究開発設備・ 販売設備	1,089	3	1,391 (4,745.99)	227	2,711	393 (26)

##### (2) 国内子会社

2023年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	セグメント の名称	設備の内容	帳簿価額					従業員数 (人)
				建物及び 構築物 (百万円)	機械装置及 び運搬具 (百万円)	土地 (百万円) (面積㎡)	その他 (百万円)	合計 (百万円)	
エスピーガーリック 食品㈱	高田工場(新 潟県上越市)	食料品事業	即席製品他 生産設備	957	613	33 (37,382.57)	39	1,644	127 (12)
エスピースパイス 工業㈱	埼玉工場(埼 玉県北葛飾 郡松伏町)	食料品事業	香辛料他生 産設備	2,439	1,746	174 (22,639.13)	46	4,407	181 (73)
㈱エスピーサンキ ョーフーズ	(静岡県焼津 市)	食料品事業	レトルト製 品他生産設 備	1,681	1,633	452 (19,800.66)	9	3,776	130 (21)
㈱ヒガシヤデリカ	北関東工場 (群馬県太田 市)	調理済食品	調理済食品 生産設備	666	320	854 (12,477.76)	77	1,919	43 (147)
㈱ヒガシヤデリカ	東松山工場 (埼玉県東松 山市)	調理済食品	調理済食品 生産設備	522	383	419 (8,996.03)	67	1,392	63 (357)

(注) 1. 帳簿価額のうち「その他」は工具、器具及び備品・リース資産であり、建設仮勘定を含んでおります。

2. 金額には消費税等は含まれておりません（建設仮勘定を除く）。
3. 従業員数の（ ）内は臨時従業員で外数となっております。
4. 板橋スパイスセンターにおいては、上記のほか、連結会社以外の者より、土地4,311.75㎡を賃借しております。
5. エスビーガーリック食品㈱の高田工場内には、提出会社から貸与中の機械装置0百万円、その他0百万円を含んでおります。
6. エスビースパイス工業㈱の埼玉工場内には、提出会社から貸与中の建物2百万円、機械装置0百万円、その他0百万円を含んでおります。
7. ㈱エスビーサンキョーフーズには、提出会社から貸与中の機械装置0百万円、その他0百万円を含んでおります。
8. ㈱ヒガシヤデリカの北関東工場の土地はすべてエスビーガーリック食品㈱からの貸与であり、東松山工場の土地の内、7,117.03㎡は提出会社からの貸与であります。

### 3 【設備の新設、除却等の計画】

当連結会計年度末現在において、設備の新設、除却等についての重要な事項はありません。

## 第4【提出会社の状況】

### 1【株式等の状況】

#### (1)【株式の総数等】

##### 【株式の総数】

種類	発行可能株式総数(株)
普通株式	35,200,000
計	35,200,000

##### 【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数 (株) (2023年3月31日)	提出日現在発行数(株) (2023年6月29日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	13,622,234	13,622,234	東京証券取引所 スタンダード市場	単元株式数 100株
計	13,622,234	13,622,234	-	-

#### (2)【新株予約権等の状況】

##### 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

##### 【ライツプランの内容】

該当事項はありません。

##### 【その他の新株予約権等の状況】

該当事項はありません。

#### (3)【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】

該当事項はありません。

#### (4)【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (株)	発行済株式 総数残高 (株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
2018年12月1日(注)1	6,977,117	13,954,234	-	1,744	-	5,343
2022年3月4日(注)2	332,000	13,622,234	-	1,744	-	5,343

(注)1. 2018年12月1日を効力発生日として普通株式1株につき2株の割合で株式分割を実施いたしました。これにより、普通株式は6,977,117株増加し、発行済株式総数は13,954,234株となっております。

2. 取締役会決議に基づく自己株式の消却による減少であります。

( 5 ) 【所有者別状況】

2023年3月31日現在

区分	株式の状況(1単元の株式数100株)							単元未満株式の状況(株)	
	政府及び地方公共団体	金融機関	金融商品取引業者	その他の法人	外国法人等		個人その他		計
					個人以外	個人			
株主数(人)	-	20	15	172	69	12	12,460	12,748	-
所有株式数(単元)	-	42,519	1,316	31,176	3,753	16	57,194	135,974	24,834
所有株式数の割合(%)	-	31.27	0.97	22.93	2.76	0.01	42.06	100.00	-

(注) 自己株式1,537,671株は、「個人その他」に15,376単元及び「単元未満株式の状況」に71株を含めて記載しております。

( 6 ) 【大株主の状況】

2023年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数(千株)	発行済株式(自己株式を除く。)の総数に対する所有株式数の割合(%)
山崎兄弟会	東京都中央区日本橋兜町18番6号	1,200	9.93
農林中央金庫	東京都千代田区大手町一丁目2番1号	612	5.06
株式会社三菱UFJ銀行	東京都千代田区丸の内二丁目7番1号	542	4.49
株式会社きらぼし銀行	東京都港区南青山三丁目10番43号	489	4.05
セコム損害保険株式会社	東京都千代田区平河町二丁目6番2号	352	2.92
大日本印刷株式会社	東京都新宿区市谷加賀町一丁目1番1号	344	2.85
日本生命保険相互会社	東京都千代田区丸の内一丁目6番6号	325	2.70
第一生命保険株式会社	東京都千代田区有楽町一丁目13番1号	248	2.06
株式会社三井住友銀行	東京都千代田区丸の内一丁目1番2号	244	2.03
三井住友信託銀行株式会社	東京都千代田区丸の内一丁目4番1号	242	2.01
計	-	4,602	38.08

(注) 1. 上記のほか、自己株式が1,537千株あります。

2. 前事業年度末において主要株主であった山崎兄弟会は、当事業年度末現在では主要株主でなくなっております。

## (7)【議決権の状況】

## 【発行済株式】

2023年3月31日現在

区分	株式数(株)	議決権の数(個)	内容
無議決権株式	-	-	-
議決権制限株式(自己株式等)	-	-	-
議決権制限株式(その他)	-	-	-
完全議決権株式(自己株式等)	普通株式 1,537,600	-	-
完全議決権株式(その他)	普通株式 12,059,800	120,598	-
単元未満株式	普通株式 24,834	-	-
発行済株式総数	13,622,234	-	-
総株主の議決権	-	120,598	-

## 【自己株式等】

2023年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数(株)	他人名義所有 株式数(株)	所有株式数の 合計(株)	発行済株式総数 に対する所有株 式数の割合(%)
エスビー食品株式会社	東京都中央区日本橋兜町 18番6号	1,537,600	-	1,537,600	11.29
計	-	1,537,600	-	1,537,600	11.29

## 2【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第3号及び第7号に該当する普通株式の取得

### (1)【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

### (2)【取締役会決議による取得の状況】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2022年12月9日)での決議状況 (取得期間2022年12月13日~2022年12月13日)	213,340	900,000,000
当事業年度前における取得自己株式	-	-
当事業年度における取得自己株式	213,340	773,357,500
残存決議株式の総数及び価額の総額	-	-
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	-	-
当期間における取得自己株式	-	-
提出日現在の未行使割合(%)	-	-

(注) 当事業年度において、子会社が保有していた当社株式を、会社法第163条の規定により読み替えて適用される同法第156条の規定に基づき、取得したものであります。

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
取締役会(2022年12月9日)での決議状況 (取得期間2022年12月13日~2022年12月14日)	70,000	300,000,000
当事業年度前における取得自己株式	-	-
当事業年度における取得自己株式	70,000	253,750,000
残存決議株式の総数及び価額の総額	-	-
当事業年度の末日現在の未行使割合(%)	-	-
当期間における取得自己株式	-	-
提出日現在の未行使割合(%)	-	-

(注) 東京証券取引所における自己株式立会外買付取引(ToSTNeT-3)による取得であります。

### (3)【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数(株)	価額の総額(円)
当事業年度における取得自己株式	208	756,260
当期間における取得自己株式	-	-

(注) 当期間における取得自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数(株)	処分価額の総額(円)	株式数(株)	処分価額の総額(円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式	-	-	-	-
消却の処分を行った取得自己株式	-	-	-	-
合併、株式交換、株式交付、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	-	-	-	-
その他 (単元未満株式の売渡請求による売渡)	12	44,580	-	-
保有自己株式数	1,537,671	-	1,537,671	-

- (注) 1. 当期間における処理自己株式には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の売渡による株式は含まれておりません。  
 2. 当期間における保有自己株式数には、2023年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡による株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主の皆様に対する利益還元を経営の重要課題と位置付け、今後の事業展開に向けた投資のための内部留保の充実を図りつつ、経営体質の一層の強化と堅実な経営基盤の確保に努めますとともに、純資産配当率や配当性向などの各種指標を勘案し、業績に裏付けられた成果を、安定的な配当として維持、継続いたしますことを基本方針としております。

当社の剰余金の配当につきましては、中間配当及び期末配当の年2回を基本的な方針としております。また当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会決議によらず取締役会の決議によって定める」旨を定款に定めております。

内部留保資金につきましては、持続的な成長と企業価値の向上に資する事業や成長分野への投資に活用してまいります。

なお、当事業年度に係る剰余金の配当は以下の通りであります。

決議年月日	配当金の総額(百万円)	1株当たり配当額(円)
2022年10月31日 取締役会決議	333	27
2023年5月23日 取締役会決議	326	27

## 4【コーポレート・ガバナンスの状況等】

## (1)【コーポレート・ガバナンスの概要】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、いかなる経営環境にあっても企業理念の実現に向けて永続的に発展できる企業を目指しており、そのため経営環境の変化に対応した、最も効率的な経営管理体制を常に模索しております。経営の効率化が図られ、かつ企業コンプライアンスに資するとともに当社企業活動に関わるすべてのステークホルダーの皆様のご信頼が得られますようなコーポレート・ガバナンス体制の整備に努めてまいります。

企業統治の体制の概要及び当該体制を採用する理由

当社は監査役設置会社であり、かつ、「経営の意思決定及び監督機能」と「業務執行機能」を分離し、「経営の意思決定及び監督機能」は取締役会が担い、「業務執行機能」は執行役員が担う、執行役員制度を導入しております。

取締役会は、社外取締役も含め、事業規模や事業領域を勘案して、特定の専門分野に偏ることなく、また、個々の経験や能力を踏まえてバランスを考慮した構成とし、そのなかで、国籍や性別は問わないこととしております。また、定例取締役会のほか、必要に応じて臨時に取締役会を開催し、経営における基本戦略の策定や、法令で定められた重要事項を決定するとともに、執行役員の業務執行状況についての報告体制を確立して、業務執行状況の監督に専念しております。

当事業年度において、当社は取締役会を13回開催し、各取締役、監査役の出席状況は以下の通りであります。

役職	氏名	取締役会への出席状況
代表取締役会長	小形 博行	100% (13回 / 13回)
代表取締役社長	池村 和也	100% (13回 / 13回)
常務取締役	田口 裕司	92.3% (12回 / 13回)
常務取締役	小島 和彦	100% (13回 / 13回)
取締役	加治 正人	100% (13回 / 13回)
取締役	横井 実	取締役就任後 100% (9回 / 9回)
社外取締役	谷 修	100% (13回 / 13回)
社外取締役	大嶽 佐由美	92.3% (12回 / 13回)
社外取締役	瀧野 敏子	取締役就任後 100% (9回 / 9回)
監査役(常勤)	西邨 正敏	100% (13回 / 13回)
社外監査役	葛山 康典	100% (13回 / 13回)
社外監査役	松家 元	100% (13回 / 13回)
社外監査役	鶴高 利行	100% (13回 / 13回)

当事業年度における取締役会の主な検討内容は以下の通りであります。

- ・中長期視点の経営課題
- ・事業戦略や資本政策、主要な設備投資等当該期における重要な執行課題
- ・人事、組織体制方針

上記の他、サステナビリティやリスクマネジメントの活動内容について、定期的に報告を行っております。

経営会議は、取締役会の事前審議機関として、経営に関わる重要事項を検討・審議し、取締役会に報告しております。

執行役員は、毎月1回以上定期的に開催される執行役員会において、情報の共有化と業務執行の意思統一を図っております。

なお、取締役等の指名・報酬等に関する事項に関しましては、透明性・客観性を高めるため、取締役会の諮問機関として任意の指名諮問委員会及び報酬諮問委員会を設置し、同委員会で審議した結果を取締役に答申しております。

当事業年度において、当社は指名諮問委員会を2回開催し、各委員の出席状況は以下の通りであります。

	役職	氏名	指名諮問委員会への出席状況
委員長	社外取締役	谷 修	100% ( 2 回 / 2 回 )
委員	社外監査役	松家 元	100% ( 2 回 / 2 回 )
委員	取締役	加治 正人	100% ( 2 回 / 2 回 )

当事業年度における指名諮問委員会の主な検討内容は以下の通りであります。

- ・取締役、執行役員を選解任案
- ・選解任の基準及びプロセス

当事業年度において、当社は報酬諮問委員会を3回開催し、各委員の出席状況は以下の通りであります。

	役職	氏名	報酬諮問委員会への出席状況
委員長	社外取締役	谷 修	100% ( 3 回 / 3 回 )
委員	社外監査役	松家 元	100% ( 3 回 / 3 回 )
委員	取締役	加治 正人	100% ( 3 回 / 3 回 )

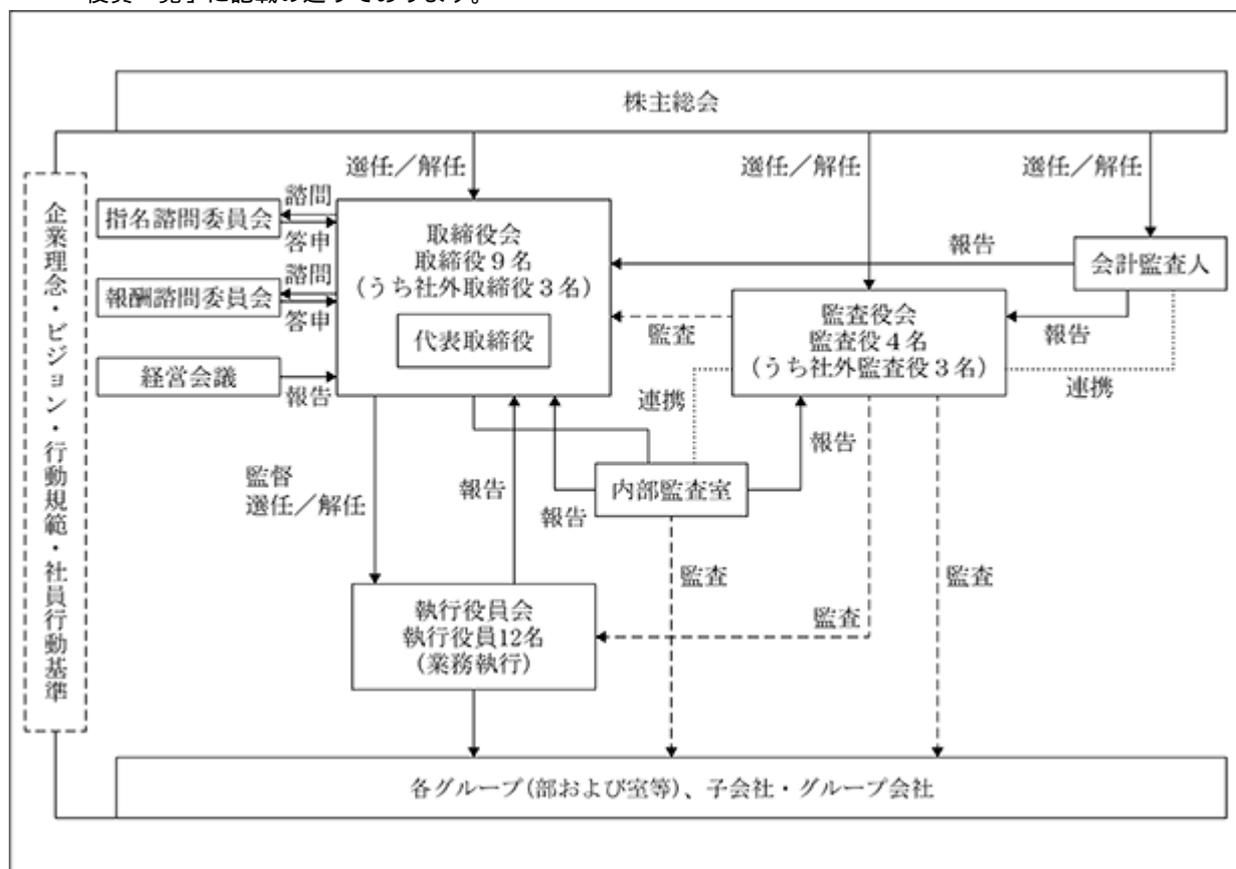
当事業年度における報酬諮問委員会の主な検討内容は以下の通りであります。

- ・取締役、執行役員の個人別報酬額の決定に関する方針及び決定プロセス
- ・個人別報酬額の算出に用いる評価指標

当社は、より効率的な経営管理体制を志向し、変化の激しい経営環境に迅速かつ的確に対応いたしますため、現在の体制を採用しております。「経営の意思決定及び監督機能」と「業務執行機能」を分離することにより、経営及び業務執行に関わる意思決定と業務執行のスピードアップが図られますとともに、監督機能を強化し、各々の権限と責任を明確にすることができると考えております。

なお、コーポレート・ガバナンスの一層の強化を図るため、社外取締役を選任しております。

取締役会及び監査役会の構成員の氏名については、「4 コーポレート・ガバナンスの状況等 (2) 役員の状況 役員一覧」に記載の通りであります。



内部統制システム及びリスク管理体制並びに子会社の業務の適正を確保するための体制の整備の状況

内部統制システムに関しましては、企業倫理、法令遵守及び企業の社会的責任の観点から、「企業理念」、「ビジョン」及び「行動規範」を精神的支柱とし、これらを全役職員に周知徹底させることが重要であると認識しており、「企業理念」等を念頭に、事業経営の有効性と効率性を高め、財務報告の信頼性を確保し、事業経営に関わる法令や定款及び企業倫理の遵守を促し、また企業財産の保全が図られる企業体制を作ることとしております。

リスク管理に関しましては、会社経営に重要な影響を及ぼすおそれのあるリスクの回避または軽減を図るため、「リスクマネジメント基本規程」を制定するとともに、リスクに対応する各種マニュアルを作成し、全役職員に周知徹底しております。

また、取締役会のもとにリスクマネジメント委員会を設置し、リスクの統括的な管理を行っており、全社的な対応が必要なリスクについては、リスクの種類に応じて設置された専門部会が、部門における固有のリスクについては、各部門が主体的にリスク対策を実施しております。

法令上及び企業倫理上の問題に対しては、専門部会としてコンプライアンス部会を設置するとともに、必要に応じて顧問弁護士などの外部専門家からアドバイス及び指導を受け、常に適法性をチェックする体制を構築し、コンプライアンスを重視した経営に努めています。

緊急事態が発生した場合には、対策本部を設置し、社長他担当役員が対策本部長に就任し、対策本部長のもと関係部門が一体となり対処することとしております。

当社及び当社の子会社から成る企業集団における業務の適正性を確保するための体制に関しましては、当社グループの発展を期するために定めた「関係会社管理規程」に基づき、子会社の重要事項については、当社に承認を求めるとともに、一定の職務執行状況については、当社への報告を求めるとしてしております。また、内部監査室は子会社の内部監査を実施するとともに、その結果を取締役に報告するものとしております。

当社グループ経営の効率的な運用を目的として、当社のグループ企業管理担当部門は、子会社に対する業務指導等を実施するとともに、当社グループ内の取引において、通例的でない取引が行われない体制の構築を図っております。

当社の「企業理念」、「ビジョン」や「行動規範」、また、インサイダー取引防止制度及び内部通報制度を当社グループで共有するものとし、これらを当社グループの全役職員に広く浸透させていくことで、グループ経営をさらに推進し、IT環境の拡大整備を進めていくなかでさらなる情報の共有化に努めております。

当社の子会社のリスク管理に関しましては、当社の取締役及び執行役員が、取締役会から委嘱された職務に従って、当社と同様のリスク管理体制を構築するよう指導しております。

## 株式会社の支配に関する基本方針

### イ．基本方針の内容

当社は、当社株式の大規模買付行為が行われる場合において、その買付けに応じるか否かのご判断については、最終的には株主の皆様へ委ねられるべきものと考えております。また、経営支配権の異動に伴う企業価値向上の可能性についても、これを一概に否定するものではありません。しかしながら、大規模買付行為のなかには、その目的等から判断して、企業価値または株主共同の利益を損なうおそれがあるものも少なくありません。

当社の企業価値または株主共同の利益は、創業の理念や企業理念、ビジョンに基づく企業活動とそれを可能ならしめる経営体制や企業文化・組織風土等が一体となって、すべてのステークホルダーのご理解やご協力といった基盤の上で形付けられるものであります。このような当社の企業価値を構成するさまざまな要素への理解なくして、当社の企業価値または株主共同の利益が維持されることは困難であると考えております。

当社は、当社株式の適切な価値を株主及び投資家の皆様にご理解いただけるよう、適時・適切な情報開示に努めておりますが、突然に大規模買付行為がなされる場合には、株主の皆様が当社株式の継続保有を検討する上で、かかる買付行為が当社に与える影響や大規模買付者が当社の経営に参画した場合の経営方針、事業計画、各ステークホルダーとの関係についての考え方、さらに、当社取締役会の大規模買付行為に対する意見等の情報は、株主の皆様にとって重要な判断材料になるものと考えております。また、大規模買付者の提示する当社株式の買付価格が妥当なものであるかを比較的短期間のうちに判断をする株主の皆様にとっては、大規模買付者及び当社の双方から適切かつ十分な情報が提供されることが重要と考えております。

こうした考え方のもと、当社は、株主の皆様が当社株式の大規模買付行為に応じるか否かを適切にご判断いただく機会を提供し、あるいは当社取締役会が株主の皆様へ代替案を提示するために必要な情報や時間を確保すること、及び当社の企業価値または株主共同の利益に反するような大規模買付行為を抑止するため、一定の場合には企業価値または株主共同の利益を守るために必要かつ相応な措置をとることが、株主の皆様から経営を付託される当社取締役会の当然の責務であると考えております。

ロ．基本方針実現のための取組み

a．基本方針の実現に資する特別な取組み（企業価値向上のための取組み）

グローバル化・デジタル化といった社会環境の変化が進むなかで、個人の嗜好や価値観、生活様式も多種多様となり、食に対するニーズは複雑化・高度化が進むものと想定されます。一方で、気候変動やそれに起因する食料危機、短期的な利益追求による資源枯渇や廃棄物の増加といった社会課題に対しては、一刻も早い対処が必要な状況にあります。

当社グループは、香辛料のトップメーカーとして創業より100年にわたり培ってきた技術力と開発力を活かし、コアコンピタンスである「地の恵み スパイス&ハーブ」を常に進化させるとともに、お客様視点での研究開発や製品開発、マーケティング活動の強化により、さまざまなニーズの変化に対応してまいります。そして、これら食の進化・発展を追求するだけでなく、環境負荷の低減や社会・環境・人権に配慮した原材料調達及び製品供給を通じ、社会課題の解決に取り組んでまいります。

b．基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組み

当社は、上記イに記載の基本方針に基づき、当社の企業価値または株主共同の利益を確保し、向上させることを目的として、「当社株式の大規模買付行為に関する対応策（買収防衛策）」（以下、単に「対応策」といいます。）を導入しております。

対応策は、大規模買付者に遵守いただくべきルールと、大規模買付行為が行われた場合に当社が講じる対抗措置の手続き及び内容を定めており、その具体的な対抗措置につきましては、当社の企業価値または株主共同の利益を守るため、必要かつ相当な範囲で新株予約権の無償割当てを行うものであります。

なお、現在の対応策（以下、「本プラン」といいます。）は、2023年6月29日開催の第110期定時株主総会における関連議案の承認可決をもって更新したものであります。

本プランの詳細につきましては、当社ホームページをご覧ください。

（URL <https://www.sbfoods.co.jp/company/ir/plan.html>）

ハ．上記各取組みに対する当社取締役会の判断及びその理由

a．基本方針の実現に資する特別な取組みについて

企業価値向上のための取組みやコーポレート・ガバナンスの強化といった各施策は、当社の企業価値または株主共同の利益を持続的に向上させるために策定されたものであり、まさに基本方針の実現に資するものであります。

従って、これらの各施策は、基本方針に従い、当社の株主共同の利益に合致するものであり、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではありません。

b．基本方針に照らして不適切な者によって当社の財務及び事業の方針の決定が支配されることを防止するための取組みについて

本プランは、当該大規模買付行為に応じるか否かを株主の皆様が判断する、あるいは当社取締役会が株主の皆様へ代替案を提示するために必要な時間や情報を確保するとともに、株主の皆様のために大規模買付者と交渉を行うこと等を可能とすることにより、当社の企業価値または株主共同の利益を確保するための枠組みであり、基本方針に沿うものです。

また、本プランは、以下の理由により、当社の株主共同の利益を損なうものではなく、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではありません。

- ・経済産業省及び法務省が2005年5月27日に発表した「企業価値・株主共同の利益の確保又は向上のための買収防衛策に関する指針」の定める三原則を充足しており、また、企業価値研究会が2008年6月30日に発表した「近時の諸環境の変化を踏まえた買収防衛策の在り方」を勘案した内容となっております。
- ・2023年6月29日開催の第110期定時株主総会における、大規模買付ルールを遵守しない場合の対抗措置としての新株予約権無償割当てに関する事項の決定を当社取締役会に委任する旨の議案の承認可決をもって本プランに更新しております。
- ・大規模買付者が大規模買付ルールを遵守した場合で、当社取締役会が、当社の企業価値または株主共同の利益を損なうものであると判断し、かつ、対抗措置の発動が必要であると判断した場合は、大規模買付行為に対し対抗措置を発動するか否かの判断を株主の皆様に行っていただくために、株主総会を開催するものとしております。
- ・当社取締役会により、いつでも廃止することができることから、デッドハンド型買収防衛策（取締役の構成員の過半数を交替させてもなお、発動を阻止できない買収防衛策）ではありません。また、当社取締役の任期は1年であるため、スローハンド型買収防衛策（取締役の構成員の交代を一度に行うことができないため、その発動を阻止しにくい買収防衛策）ではありません。

## 企業統治に関するその他の事項

### イ．取締役の定数

当社の取締役は12名以内とする旨を定款に定めております。

### ロ．取締役の選任及び解任の決議要件

当社は、取締役の選任要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨及び当該選任決議は、累積投票によらないものとする旨を定款に定めております。

その解任については、定款において別段の定めはありません。

### ハ．自己株式取得の決定機関

当社は、会社法第165条第2項の規定により、取締役会の決議によって市場取引等により自己の株式を取得することができる旨を定款に定めております。

これは、機動的な資本政策を可能とすることを目的とするものであります。

### ニ．剰余金の配当等の決定機関

当社は、剰余金の配当等会社法第459条第1項に定める事項については、法令に別段の定めのある場合を除き、株主総会の決議によらず取締役会の決議によって定める旨を定款に定めております。

これは、機動的な資本政策及び配当政策を図ることを目的とするものであります。

### ホ．株主総会の特別決議要件

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使することができる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。

これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

### ヘ．役員等賠償責任保険契約の内容の概要等

当社は、当社及び子会社の取締役、監査役並びに執行役員を被保険者として、会社法第430条の3第1項に規定する役員等賠償責任保険契約（D&O保険）を締結しております。当該保険契約では、被保険者がその職務の執行に関し責任を負うこと、または、当該責任の追及にかかる請求を受けることによって生ずることのある損害について填補することとされております。なお、当該保険契約の保険料は、全額当社が負担しております。

( 2 ) 【役員の状況】

役員一覧

男性11名 女性2名( 役員のうち女性の比率15.4% )

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 ( 株 )
代表取締役 会長	小形 博行	1957年 3月 5日生	1979年 4月 当社入社 2008年 4月 会計業務管理室長 2009年 6月 執行役員 2011年 6月 監査役( 常勤 ) 2012年 6月 取締役執行役員 2013年 6月 取締役 2014年 6月 常務取締役 2016年 6月 代表取締役社長 2019年 5月 S&B INTERNATIONAL CORPORATION チェアマン( CEO )( 現 ) 2020年 5月 株式会社エスピー興産代表取締役社 長( 現 ) 2022年 6月 代表取締役会長( 現 )	(注) 3	6,000
代表取締役 社長 マーケティング企画室担当 兼海外事業部担当	池村 和也	1962年 9月 6日生	1986年 4月 当社入社 2010年10月 営業本部上席マネージャー兼同本部 商品グループユニットユニットマ ネージャー 2013年 6月 執行役員 2016年 6月 取締役執行役員 2017年 6月 取締役常務執行役員 2018年 6月 常務取締役常務執行役員 2021年 6月 常務取締役首席執行役員 2022年 6月 代表取締役社長( 現 ) 2023年 4月 マーケティング企画室担当兼海外事 業部担当( 現 )	(注) 3	3,500
常務取締役 営業グループ管掌 兼ハープ事業部担当	田口 裕司	1962年10月25日生	1985年 4月 当社入社 2011年10月 商品部上席マネージャー兼同部商品 企画ユニットユニットマネー ジャー 2013年 6月 執行役員 2017年 6月 取締役常務執行役員 2019年 6月 常務取締役常務執行役員 2020年 6月 常務取締役( 現 ) 2022年 4月 営業グループ管掌兼ハープ事業部担 当( 現 )	(注) 3	2,000
常務取締役 開発生産グループ担当 兼品質保証室担当	小島 和彦	1960年 9月19日生	1985年 4月 当社入社 2009年10月 商品本部上席マネージャー兼同本部 第1商品開発ユニットユニットマ ネージャー 2015年 6月 執行役員 2019年 6月 取締役執行役員 2021年 6月 取締役上席執行役員 2022年 6月 常務取締役開発生産グループ担当兼 品質保証室担当( 現 )	(注) 3	1,900
取締役 管理サポートグループ担当 兼人事総務室担当 兼指名諮問委員会委員 兼報酬諮問委員会委員	加治 正人	1970年10月 9日生	1993年 4月 当社入社 2018年 4月 人事総務室長兼人事秘書ユニットユ ニットマネージャー 2019年 6月 執行役員 2021年 6月 取締役執行役員 2023年 6月 取締役管理サポートグループ担当兼 人事総務室担当兼指名諮問委員会委 員兼報酬諮問委員会委員( 現 )	(注) 3	1,300
取締役 執行役員 業務改革推進室担当 兼管理サポートグループ 広報・IR室担当 兼情報統括担当役員	横井 実	1971年 7月26日生	1995年 4月 当社入社 2017年 4月 経営企画室長( 現 ) 2020年 6月 執行役員 2022年 6月 取締役執行役員( 現 ) 2023年 4月 業務改革推進室担当兼管理サポート グループ広報・IR室担当兼情報統 括担当役員( 現 )	(注) 3	1,000

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
取締役 指名諮問委員会委員長 兼報酬諮問委員会委員長	谷 修	1949年 8月24日生	1983年 4月 弁護士登録（第一東京弁護士会） 浅川法律事務所入所 1992年10月 谷法律事務所設立（現） 2004年 6月 当社補欠監査役 2006年 4月 第一東京弁護士会副会長 関東弁護士会連合会常務理事 2007年 6月 当社監査役 2012年 6月 当社取締役（非常勤・社外取締役） （現） 2020年 6月 西武信用金庫理事（現） 2021年 4月 指名諮問委員会委員長兼報酬諮問委員会委員長（現）	(注) 3	-
取締役	大嶽 佐由美	1958年 1月26日生	1985年 1月 AT&T International Japan オフィスマネージャー 1994年 6月 SAP Japan株式会社 エグゼクティブアシスタント 1997年 9月 日本 JD Edwards株式会社（現 Oracle Corporation）日本支社 マーケティングコミュニケーション マネージャー 1998年10月 フィデリティ証券株式会社東京支店 コーポレートコミュニケーションマ ネージャー 2002年 4月 EMCジャパン株式会社（現デル・テ クノロジー株式会社） コーポレートコミュニケーションマ ネージャー 2006年 9月 有限会社Office Otake設立（現） 2021年 6月 当社取締役（非常勤・社外取締役） （現）	(注) 3	-
取締役	瀧野 敏子	1954年 4月 3日生	1981年 5月 医籍登録 1983年 4月 東京女子医科大学助手 1993年 4月 淀川キリスト教病院院長 2004年 2月 ラ・クオール本町クリニック設立 （現） 2005年 1月 NPO法人イージェイネット設立 同NPO法人代表理事（現） 2011年12月 医療法人ラ・クオール会設立（現） 2022年 6月 当社取締役（非常勤・社外取締役） （現）	(注) 3	-
監査役	西邨 正敏	1964年 9月 6日生	1987年 4月 当社入社 2017年 4月 人事総務室長兼法務ユニットユニッ トマネージャー 2018年 6月 執行役員 2019年 6月 監査役（常勤）（現）	(注) 4	1,300
監査役	葛山 康典	1965年 7月27日生	1993年 4月 早稲田大学理工学部助手 1996年 4月 早稲田大学社会科学部専任講師 1998年 4月 早稲田大学社会科学部助教授 2003年 4月 早稲田大学社会科学部（現同大学社 会科学総合学院）教授（現） 2010年 6月 当社補欠監査役 2012年 6月 当社監査役（現）	(注) 6	-
監査役	松家 元	1964年 5月 7日生	1992年 4月 弁護士登録（第一東京弁護士会） 松家法律事務所入所 1998年 4月 最高裁判所司法研修所所付（民事弁 護教室） 2009年 4月 最高裁判所司法研修所教官（民事弁 護教室） 2012年 4月 立教大学大学院法務研究科特任教授 2013年 6月 当社監査役（現） 2018年 4月 筑波大学法科大学院専任教授 2019年10月 松家法律事務所所長（現） 2021年 5月 筑波大学法科大学院客員教授（現）	(注) 5	-

役職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (株)
監査役	鵜高 利行	1960年12月28日生	1987年10月 監査法人朝日新和会計社(現有限責任あずさ監査法人)入社 1991年9月 公認会計士登録 1993年4月 税理士登録 1993年8月 鵜高公認会計士事務所設立(現) 2011年7月 TFS国際税理士法人社員(現) 2012年6月 当社補欠監査役 2013年6月 当社監査役(現) 2018年4月 産業能率大学大学院兼任教員(現)	(注)5	-
計					17,000

- (注) 1. 谷修氏、大嶽佐由美氏及び瀧野敏子氏は社外取締役であります。
2. 葛山康典氏、松家元氏及び鵜高利行氏は社外監査役であります。
3. 2023年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から1年間
4. 2020年6月26日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
5. 2021年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
6. 2023年6月29日開催の定時株主総会の終結の時から4年間
7. 当社では、意思決定・監督と執行を分離するため、執行役員制度を導入しております。執行役員は取締役兼務者1名を含め12名であります。

#### 社外取締役及び社外監査役

- イ. 社外取締役及び社外監査役の員数並びに当社との人的・資金的・取引関係その他の利害関係  
当社の社外取締役は3名、社外監査役は3名であります。  
なお、谷修氏、大嶽佐由美氏、瀧野敏子氏、葛山康典氏、松家元氏及び鵜高利行氏は、当社との間に特別の利害関係はありません。

#### ロ. 社外取締役及び社外監査役が企業統治において果たす機能及び役割

社外取締役の谷修氏は、弁護士としての専門的な知識・経験等を有していることから、当社の経営全般に対する適切な助言をいただくため選任しております。社外取締役の大嶽佐由美氏は、マーケティングコミュニケーションを通じた豊富な国際経験や、リスクマネジメント等に関する高い見識を有していることから、当社の経営全般に対する適切な助言をいただくため選任しております。社外取締役の瀧野敏子氏は、医師としての豊富な経験や高い見識に加え、医療機関における組織マネジメントの経験等を有していることから、当社の経営全般に対する適切な助言をいただくため選任しております。また、各氏から独立・公正な立場からの発言をいただくことで、業務執行状況に対する監督機能の一層の強化を図っております。

社外監査役の葛山康典氏は、企業財務の専門家として高い見識を有していることから、適切な経営監視をしていただくため選任しております。社外監査役の松家元氏は、弁護士としての専門的な知識・経験等を有していることから、適切な経営監視をしていただくため選任しております。社外監査役の鵜高利行氏は、公認会計士・税理士としての専門的な知識・経験等を有していることから、適切な経営監視をしていただくため選任しております。独立性のある社外監査役を選任することで、経営監視機能における客観性及び中立性の確保に努めております。

#### ハ. 社外取締役及び社外監査役の選任状況に関する当社の考え方

取締役候補につきましては、当社は「経営の意思決定及び監督」と「業務執行」の権限と責任を明確にしておりますので、これらの役割を遂行するための資質を備えていることを指名の方針とし、監査役候補につきましては、監査業務に必要な資質を備えていることを指名の方針としております。

また、当社の社外取締役に関する独立性判断基準は、株式会社東京証券取引所が定める独立役員の要件を適用することで、実質面においても独立性を担保できると判断し、これを準用することとしております。

#### 二. 責任限定契約の内容の概要

当社と各社外取締役及び各社外監査役は、会社法第427条第1項の損害賠償責任を限定する契約を締結しております。当該契約に基づく損害賠償責任の限度額は、法令が規定する額としております。

ホ．内部監査、監査役監査及び会計監査との相互連携並びに内部監査室との関係

社外取締役は、取締役会での内部統制その他審議内容について、自らの経験と知見に基づく発言を適宜行っております。

社外監査役は、取締役会及び執行役員会の審議・報告内容を受けて業務執行状況を把握し、監査役会その他監査役監査において、それぞれの知見に基づく助言を適宜行っております。内部統制監査の状況については、内部監査室からの定期的な報告を受け、社外監査役の視点から助言を行っております。また、会計監査の経過及び結果について、定期的な報告を受ける等、会計監査人と相互連携に努めております。

(3)【監査の状況】

監査役監査の状況

イ．組織・人員

当社における監査役監査は、社外監査役3名を含む監査役4名にて監査体制を構築しております。なお、監査役4名のうち2名が財務・会計に関する相当程度の知見を有しております。

ロ．監査役及び監査役会の実活動状況

当事業年度における監査役会の開催状況及び個々の監査役の出席状況は以下の通りであります。

役職	氏名	監査役会への出席状況
監査役（常勤）	西邨 正敏	100%（8回／8回）
社外監査役	葛山 康典	100%（8回／8回）
社外監査役	松家 元	100%（8回／8回）
社外監査役	鷓高 利行	100%（8回／8回）

監査役会における具体的な検討内容は、監査方針や監査計画の策定、監査報告の作成、監査役選任議案に関する同意、会計監査人の選任に関する決定、会計監査人の報酬に関する同意等であります。

監査役は、監査役会が定めた監査役監査の基準に準拠し、監査の方針や職務の分担等に従い、監査を実施しており、監査役全員が取締役会へ出席して取締役等から職務執行の状況について報告を受けるとともに、本社及び主要な事業所において業務及び財産の状況を調査するなどの活動をしております。また、「監査上の主要な検討事項」について、会計監査人と協議しております。

常勤監査役は、取締役会以外の重要な会議に出席するとともに、重要な決裁書類等を閲覧するなど、日常的に監査を実施しており、その内容については、監査役会等で社外監査役へ報告しております。

内部監査の状況

当社における内部監査体制としては、6名で構成する取締役会直属の内部監査室が、当社及び当社の関係会社を対象に内部監査を実施するとともに、金融商品取引法に基づく財務報告に係る内部統制の評価及び報告を行っております。

内部監査室は、取締役会直属の組織として設置され業務執行部門から独立しており、取締役会と監査役会の2つの報告経路を保持しております。

監査役、会計監査人及び内部監査室は、定期的な会議と必要に応じての臨時的な会議を開催し、監査役から監査役監査について、また、会計監査人から会計監査実施状況や監査業務全般に係る問題について報告を受け、一方、内部監査室からは内部監査について報告するなど、情報交換を行い、相互連携の一層の強化を図っております。

また、内部監査室を兼務する監査役スタッフが監査役の職務を補助することで監査体制の充実に努めております。

会計監査の状況

イ．監査法人の名称

双研日栄監査法人

ロ．継続監査期間

2002年3月期以降

八．業務を執行した公認会計士

國井 隆  
 井上 敦

二．監査業務に係る補助者の構成

当社の会計監査業務に係る補助者は、公認会計士13名とその他1名であります。

ホ．監査法人の選定方針と理由

当社は会計監査人の独立性、職務執行状況等を総合的に勘案し、監査法人を選定しております。

監査役会は、会計監査人が会社法第340条第1項各号にある解任事由に当たると認められる場合、監査役全員の同意に基づき、会計監査人を解任いたします。また、監査役会は、会計監査人の独立性、職務執行状況等を総合的に評価し、変更の必要があると判断される場合には、株主総会に提出する会計監査人の解任または不再任に関する議案の内容を決定いたします。

この方針のもと、監査役会は会計監査人の職務執行は適正であると判断し、不再任の議案を提出しないことを決定し、双研日栄監査法人を再任としております。

ヘ．監査役及び監査役会による監査法人の評価

当社の監査役会は、会計監査人に対して当社監査役会で定める「会計監査人の解任または不再任の決定に関する評価基準」に則り評価を行っております。主な評価項目は、会計監査人の職務遂行状況、監査体制及び独立性、監査報酬等、監査役とのコミュニケーション、不正リスク対応であります。その結果、適正と評価しております。

監査報酬の内容等

イ．監査公認会計士等に対する報酬の内容

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬	監査証明業務に基づく報酬	非監査業務に基づく報酬
提出会社	49	-	49	1
連結子会社	-	-	-	-
計	49	-	49	1

当連結会計年度における当社の非監査業務の内容は、株式の売出しに係る「監査人から引受事務幹事会社への書簡」の作成業務であります。

ロ．監査公認会計士等と同一のネットワークに対する報酬

該当事項はありません。

ハ．その他の重要な監査証明業務に基づく報酬の内容

該当事項はありません。

二．監査報酬の決定方針

当社の監査公認会計士等に対する監査報酬は、前連結会計年度の監査実績及び当連結会計年度の監査計画における、監査内容及び監査人員、監査時間等を勘案し決定することとしております。

ホ．監査役会が会計監査人の報酬等に同意した理由

当社の監査役会は、会計監査人の前連結会計年度の監査実績及び当連結会計年度の監査計画を確認の上、報酬見積りの算定根拠及びその妥当性を検討した結果、会計監査人の報酬等につき、会社法第399条第1項の同意を行っております。

(4) 【役員の報酬等】

役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針に係る事項

当社は、2021年1月29日開催の取締役会において、取締役の個人別報酬等の内容に係る決定方針を決議しております。

また、取締役会は、当該事業年度に係る取締役の個人別報酬等について、報酬等の内容の決定方法及び決定された報酬等の内容が、当該決定方針と整合していることを確認しております。

取締役の個人別報酬等の内容に係る決定方針の内容は次の通りであります。

イ．基本報酬に関する方針

当社取締役の報酬総額は、月額30百万円以内であり、取締役（社外取締役を除く）の個人別報酬等は、報酬総額の範囲内で、取締役会が定めた規程に基づき、個々の取締役の職務と責任及び実績に業績要素を加味した固定報酬と業績連動報酬により構成されております。

また、当社社外取締役の個人別報酬等は、上記報酬総額の範囲内で、それぞれの役割を考慮し、固定報酬のみとしており、その額は規程に定めております。

ロ．業績連動報酬等に関する方針

当社取締役の個人別報酬等のうち、業績連動報酬にかかる指標は、売上高及び営業利益等の中期経営計画と連動した財務諸表における定量指標に加えて、担当部門や各取締役の目標達成度を採用しております。業績連動報酬の額又は算定方法の決定に関する方針は、個々の取締役の職務と責任及び実績に業績要素を加味することとしており、その決定権限は取締役会が有しております。

ハ．報酬等の割合に関する方針

当社取締役（社外取締役を除く）の報酬額全体における固定報酬と業績連動報酬の割合は、概ね7：3としております。

ニ．報酬付与の時期及び条件の決定方針

当社取締役の報酬等は、役位ごとに定めた固定報酬、業績連動報酬を合わせた額を、月例支給額として在任中に支給しております。

ホ．報酬等の決定に関する事項

当社取締役の個人別報酬等の内容は、個々の取締役の職務と責任及び実績に業績要素を加味することとしております。なお、客観性・透明性を確保するため、取締役会の諮問機関である、報酬諮問委員会にて、審議した結果の答申を受けて、取締役会で決定しております。

役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額(百万円)		対象となる 役員の員数 (人)
		固定報酬	業績連動報酬	
取締役(社外取締役を除く。)	186	136	49	8
監査役(社外監査役を除く。)	18	18	-	1
社外役員	38	38	-	7

(注) 1．業績連動報酬に係る定量指標の目標は、売上高、営業利益等の公表計画値を使用しており、その実績は、第109期の売上高1,180億46百万円、営業利益86億17百万円であります。当該指標を選択した理由は持続的な成長に対する貢献意識を高めるためであり、当社の業績連動報酬は、各取締役の役位及び担当部門の目標達成度も勘案して算定されております。

2．当社の役員の報酬等に関する株主総会の決議日は2006年6月29日であり、決議の内容は、取締役の報酬額は、月額30百万円以内、監査役の報酬額は、月額6百万円以内であります。

(5) 【株式の保有状況】

投資株式の区分の基準及び考え方

当社は、保有目的が純投資目的である投資株式と純投資目的以外の目的である投資株式の区分について、取引先との安定的・中長期的な取引関係の維持・強化により、当社の中長期的な企業価値向上に資すると判断し保有した株式を純投資目的以外の目的の株式とし、それ以外の株式は純投資目的の投資株式として区分しております。

保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式

イ．保有方針及び保有の合理性を検証する方法並びに個別銘柄の保有の適否に関する取締役会等における検証の内容

保有目的が純投資目的以外の目的である株式については、取引先との安定的・中長期的な取引関係の維持・強化により、当社の中長期的な企業価値向上に資する場合に保有し、毎年1回、銘柄ごとに保有目的、取引状況、含み損益、配当利回り等を確認し、政策保有の継続の可否について検証を行い、取締役会において決裁を得た上で保有することとしております。

ロ．銘柄数及び貸借対照表計上額

	銘柄数 (銘柄)	貸借対照表計上額の 合計額(百万円)
非上場株式	13	137
非上場株式以外の株式	53	8,098

(当事業年度において株式数が増加した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の増加に係る取得 価額の合計額(百万円)	株式数の増加の理由
非上場株式	1	5	取引の維持・拡大のため
非上場株式以外の株式	2	1	取引の維持・拡大のため

(当事業年度において株式数が減少した銘柄)

	銘柄数 (銘柄)	株式数の減少に係る売却 価額の合計額(百万円)
非上場株式	-	-
非上場株式以外の株式	-	-

八．特定投資株式の銘柄ごとの株式数、貸借対照表計上額等に関する情報

特定投資株式

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)三菱UFJフィ ナンシャル・グループ	2,747,580	2,747,580	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	2,329	2,088		
豊田通商(株)	181,200	181,200	食料品事業における原料仕入及び製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	1,018	916		
加藤産業(株)	218,017	218,017	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	765	691		
(株)千葉銀行	699,284	699,284	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	597	506		
(株)A D E K A	244,000	244,000	食料品事業における原料仕入の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	550	659		
三菱食品(株)	104,200	104,200	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	338	313		
大日本印刷(株)	86,500	86,500	食料品事業における資材等の仕入の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	320	248		
(株)東京きらぼしフィ ナンシャルグループ	79,659	79,659	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	209	139		
(株)ゼンショーホール ディングス	41,600	41,600	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	163	119		
(株)ニッポン	91,500	91,500	食料品事業における原料仕入の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	151	152		
三井住友トラスト・ ホールディングス(株)	30,000	30,000	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	136	120		
(株)セブン&アイ・ホ ールディングス	22,713	22,713	食料品事業及び調理済食品における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	135	132		
伊藤忠食品(株)	24,965	24,965	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	127	121		
(株)コンコルディア・ フィナンシャルグル ープ	260,379	260,379	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	127	119		
(株)三井住友フィナン シャルグループ	17,375	17,375	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	92	67		
(株)めぶきフィナンシ ャルグループ	275,478	275,478	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	89	70		
(株)みずほフィナンシ ャルグループ	46,643	46,643	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	87	73		
(株)リテールパートナ ーズ	58,849	58,849	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	80	84		
三井物産(株)	19,472	19,472	食料品事業における原料仕入及び製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	80	64		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)パローホールディングス	41,040	41,040	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	79	86		
戸田建設(株)	100,891	100,891	当社グループの施行建物の円滑な管理に関する重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	69	74		
セントラルフォレストグループ(株)	38,000	38,000	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	69	71		
ユナイテッド・スーパーマーケット・ホールディングス(株)	56,023	56,023	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	62	59		
イオン(株)	22,880	22,880	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	58	59		
(株)日清製粉グループ本社	37,207	37,207	食料品事業における原料仕入の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	57	63		
(株)マルイチ産商	45,738	45,738	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	有
	50	47		
(株)ヤオコー	4,400	4,400	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	30	29		
(株)関西フードマーケット	20,185	19,727	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。持株会を通じた株式取得のため、株式数が増加しております。	無
	30	24		
(株)ライフコーポレーション	10,419	10,419	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	26	32		
アクシアル リテイリング(株)	6,987	6,987	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	23	22		
(株)いなげや	15,155	14,746	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。持株会を通じた株式取得のため、株式数が増加しております。	無
	19	19		
(株)アークス	6,913	6,913	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	15	14		
(株)マミーマーケット	6,050	6,050	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	13	13		
(株)ベルク	2,200	2,200	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	12	11		
(株)トーヨー	4,800	4,800	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	10	5		
エイチ・ツー・オーリテイリング(株)	6,615	6,615	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	9	5		
(株)ヤマナカ	10,040	10,040	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る取引効果等を得ております。	無
	6	7		
第一生命ホールディングス(株)	2,700	2,700	当社グループの資金調達等において重要な取引先であり、円滑な取引関係維持のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無 (注)
	6	6		
(株)オークワ	7,729	7,729	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	6	7		
正栄食品工業(株)	1,330	1,330	食料品事業における原料仕入の重要な取引先であり、安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る配当利回り等を得ております。	無
	5	5		

銘柄	当事業年度	前事業年度	保有目的、定量的な保有効果 及び株式数が増加した理由	当社の株 式の保有 の有無
	株式数(株)	株式数(株)		
	貸借対照表計上額 (百万円)	貸借対照表計上額 (百万円)		
(株)平和堂	2,470	2,470	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	5	4		
イオン北海道(株)	5,280	5,280	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	4	5		
(株)ヤマザワ	2,904	2,904	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	3	4		
ユアサ・フナシヨク (株)	1,300	1,300	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 取引効果等を得ております。	有
	3	3		
ウエルシアホールデ ィングス(株)	1,200	1,200	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	3	3		
イオン九州(株)	1,200	1,200	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	2	2		
尾家産業(株)	2,200	2,200	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	2	2		
アルビス(株)	880	880	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	2	1		
(株)エコス	1,000	1,000	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	1	2		
東洋精糖(株)	1,000	1,000	食料品事業における原料仕入の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	有
	0	1		
(株)Olympicグ ループ	1,100	1,100	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	0	0		
(株)スリーエフ	1,210	1,210	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 配当利回り等を得ております。	無
	0	0		
(株)マルヨシセンター	100	100	食料品事業における製品販売の重要な取引先であり、 安定的な関係構築のために保有し、当社基準を上回る 取引効果等を得ております。	無
	0	0		

(注) 当該銘柄の会社は当社株式を保有していませんが、同会社の子会社が当社株式を保有しております。

保有目的が純投資目的である投資株式  
 該当事項はありません。

## 第5【経理の状況】

### 1．連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

(1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。

(2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下、「財務諸表等規則」といいます。）に基づいて作成しております。

また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

### 2．監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（2022年4月1日から2023年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（2022年4月1日から2023年3月31日まで）の財務諸表について、双研日栄監査法人による監査を受けております。

### 3．連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、また、会計基準等の変更等についての的確に対応するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、会計基準等の内容及び変更等について書籍等による最新の情報の収集に取り組むとともに、各種セミナーや研修会への参加をしております。

1【連結財務諸表等】  
 (1)【連結財務諸表】  
 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
<b>資産の部</b>		
流動資産		
現金及び預金	25,245	20,786
受取手形	188	164
売掛金	27,378	27,868
商品及び製品	9,218	9,681
仕掛品	2,557	3,568
原材料及び貯蔵品	7,978	11,623
その他	699	1,609
貸倒引当金	0	0
流動資産合計	73,265	75,303
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物	3, 4 42,473	3, 4 44,352
減価償却累計額	24,687	25,742
建物及び構築物(純額)	3, 4 17,785	3, 4 18,610
機械装置及び運搬具	4 39,051	4 40,007
減価償却累計額	28,301	29,837
機械装置及び運搬具(純額)	4 10,749	4 10,169
工具、器具及び備品	4 6,666	4 7,397
減価償却累計額	5,335	5,534
工具、器具及び備品(純額)	4 1,330	4 1,862
土地	2, 3, 4 8,623	2, 3, 4 8,761
リース資産	1,267	1,458
減価償却累計額	752	863
リース資産(純額)	514	594
建設仮勘定	1,164	299
有形固定資産合計	40,168	40,297
無形固定資産		
投資その他の資産	725	544
投資有価証券	1 9,436	1 10,100
長期貸付金	1,150	0
繰延税金資産	1,730	1,649
退職給付に係る資産	9	-
その他	3,588	2,587
貸倒引当金	1,090	20
投資その他の資産合計	14,825	14,316
固定資産合計	55,719	55,159
資産合計	128,984	130,462

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形及び買掛金	12,859	14,164
短期借入金	3 18,434	3 19,000
リース債務	178	201
未払金	10,728	10,571
未払法人税等	1,097	430
賞与引当金	1,425	1,505
資産除去債務	-	2
その他	1,804	1,487
流動負債合計	46,527	47,363
固定負債		
長期借入金	3 14,647	3 12,046
リース債務	434	470
再評価に係る繰延税金負債	2 1,109	2 1,107
退職給付に係る負債	6,184	6,373
資産除去債務	122	123
その他	56	52
固定負債合計	22,554	20,173
負債合計	69,081	67,536
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	1,744	1,744
資本剰余金	5,336	5,336
利益剰余金	52,140	55,615
自己株式	2,933	3,960
株主資本合計	56,288	58,735
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	3,022	3,542
土地再評価差額金	2 862	2 857
為替換算調整勘定	103	201
退職給付に係る調整累計額	373	411
その他の包括利益累計額合計	3,614	4,190
純資産合計	59,903	62,925
負債純資産合計	128,984	130,462

## 【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

## 【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)		当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)	
売上高	1	118,046	1	120,651
売上原価	2	86,138	2	91,439
売上総利益		31,908		29,211
販売費及び一般管理費				
販売促進費		1,750		1,884
荷造運搬費		3,979		4,031
広告宣伝費		3,126		2,839
給料及び手当		4,418		4,572
賞与引当金繰入額		651		678
退職給付費用		465		517
減価償却費		679		546
その他	3	8,217	3	8,742
販売費及び一般管理費合計		23,290		23,812
営業利益		8,617		5,399
営業外収益				
受取利息		18		2
受取配当金		218		263
不動産賃貸料		43		43
為替差益		122		106
その他		172		156
営業外収益合計		575		572
営業外費用				
支払利息		481		453
その他		2		52
営業外費用合計		483		506
経常利益		8,709		5,465
特別利益				
受取保険金		13		52
補助金収入	4	38	4	130
関係会社清算益	5	6	5	106
その他		1		37
特別利益合計		59		326
特別損失				
固定資産除却損	6	29	6	112
固定資産圧縮損		-	7	75
製品回収関連費用		53		-
情報セキュリティ対策費		-	8	40
その他		82		53
特別損失合計		165		281
税金等調整前当期純利益		8,603		5,510
法人税、住民税及び事業税		2,387		1,545
法人税等調整額		9		115
法人税等合計		2,377		1,429
当期純利益		6,225		4,080
非支配株主に帰属する当期純利益		-		-
親会社株主に帰属する当期純利益		6,225		4,080

## 【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
当期純利益	6,225	4,080
その他の包括利益		
其他有価証券評価差額金	446	520
為替換算調整勘定	87	97
退職給付に係る調整額	130	37
その他の包括利益合計	1 403	1 580
包括利益	6,628	4,661
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	6,628	4,661
非支配株主に係る包括利益	-	-

【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,744	5,337	47,776	2,932	51,925
当期変動額					
剰余金の配当			622		622
親会社株主に帰属する 当期純利益			6,225		6,225
自己株式の取得				1,240	1,240
自己株式の処分					-
自己株式の消却		0	1,239	1,240	-
土地再評価差額金の 取崩			0		0
連結範囲の変動					-
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	0	4,364	0	4,363
当期末残高	1,744	5,336	52,140	2,933	56,288

	その他の包括利益累計額					純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	2,575	862	16	243	3,211	55,137
当期変動額						
剰余金の配当						622
親会社株主に帰属する 当期純利益						6,225
自己株式の取得						1,240
自己株式の処分						-
自己株式の消却						-
土地再評価差額金の 取崩						0
連結範囲の変動						-
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	446	0	87	130	403	403
当期変動額合計	446	0	87	130	403	4,766
当期末残高	3,022	862	103	373	3,614	59,903

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	1,744	5,336	52,140	2,933	56,288
当期変動額					
剰余金の配当			643		643
親会社株主に帰属する 当期純利益			4,080		4,080
自己株式の取得				1,027	1,027
自己株式の処分		0		0	0
自己株式の消却					-
土地再評価差額金の 取崩			4		4
連結範囲の変動			32		32
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）					
当期変動額合計	-	0	3,474	1,027	2,446
当期末残高	1,744	5,336	55,615	3,960	58,735

	その他の包括利益累計額					純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	土地再評価差額金	為替換算調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括利益 累計額合計	
当期首残高	3,022	862	103	373	3,614	59,903
当期変動額						
剰余金の配当						643
親会社株主に帰属する 当期純利益						4,080
自己株式の取得						1,027
自己株式の処分						0
自己株式の消却						-
土地再評価差額金の 取崩						4
連結範囲の変動						32
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）	520	4	97	37	575	575
当期変動額合計	520	4	97	37	575	3,022
当期末残高	3,542	857	201	411	4,190	62,925

## 【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
<b>営業活動によるキャッシュ・フロー</b>		
税金等調整前当期純利益	8,603	5,510
減価償却費	4,649	4,660
貸倒引当金の増減額(は減少)	38	1,069
賞与引当金の増減額(は減少)	53	80
退職給付に係る資産の増減額(は増加)	27	10
退職給付に係る負債の増減額(は減少)	112	149
受取利息及び受取配当金	236	266
支払利息	481	453
固定資産除却損	29	112
固定資産圧縮損	-	75
製品回収関連費用	53	-
受取保険金	13	52
受取補償金	-	17
補助金収入	38	130
関係会社清算益	6	106
売上債権の増減額(は増加)	1,862	93
棚卸資産の増減額(は増加)	942	5,078
その他の資産の増減額(は増加)	179	997
仕入債務の増減額(は減少)	569	2,650
その他の負債の増減額(は減少)	136	263
その他	4	1,917
小計	11,433	2,935
利息及び配当金の受取額	236	266
利息の支払額	478	460
保険金の受取額	13	52
補償金の受取額	-	17
補助金の受取額	-	14
法人税等の支払額	3,033	2,184
営業活動によるキャッシュ・フロー	8,170	641
<b>投資活動によるキャッシュ・フロー</b>		
定期預金の預入による支出	21	22
定期預金の払戻による収入	1,017	24
有形固定資産の取得による支出	5,083	4,984
有形固定資産の売却による収入	7	1,199
無形固定資産の取得による支出	219	111
投資有価証券の取得による支出	1,483	56
短期貸付金の回収による収入	1	701
関係会社の清算による収入	16	134
補助金の受取額	38	116
その他	8	49
投資活動によるキャッシュ・フロー	5,736	3,049

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当連結会計年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
財務活動によるキャッシュ・フロー		
短期借入金の純増減額（は減少）	860	2,267
長期借入れによる収入	1,450	3,902
長期借入金の返済による支出	3,141	3,668
自己株式の取得による支出	1,240	1,027
配当金の支払額	622	642
その他	203	237
財務活動によるキャッシュ・フロー	2,898	3,941
現金及び現金同等物に係る換算差額	113	74
現金及び現金同等物の増減額（は減少）	350	6,274
現金及び現金同等物の期首残高	25,563	25,213
連結の範囲の変更に伴う現金及び 現金同等物の増減額（は減少）	-	1,817
現金及び現金同等物の期末残高	1 25,213	1 20,755

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

(1) 連結子会社の数及び主要な連結子会社の名称

連結子会社の数 9社

主要な連結子会社の名称

エスビーガーリック食品(株)

エスピースパイス工業(株)

(株)エスピー興産

(株)エスピーサンキョーフーズ

(株)大伸

(株)ヒガシヤデリカ

(株)泰秀

S&B INTERNATIONAL CORPORATION

S&B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.

当連結会計年度より、前連結会計年度まで非連結子会社であった株式会社泰秀及びS&B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.につきまして、重要性が増したため、連結の範囲に含めております。

(2) 主要な非連結子会社の名称等

主要な非連結子会社の名称

(株)エス・アンド・ジィ

峯栄興業(株)

非連結子会社は、いずれも小規模であり、合計の総資産、売上高、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等は、いずれも連結財務諸表に重要な影響を及ぼしていないため、連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社

該当事項はありません。

(2) 持分法を適用していない主要な非連結子会社及び関連会社の名称等

持分法を適用していない主要な非連結子会社及び関連会社の名称

(株)エス・アンド・ジィ

峯栄興業(株)

これらの会社は、当期純損益(持分に見合う額)及び利益剰余金(持分に見合う額)等からみて、持分法の対象から除いても連結財務諸表に及ぼす影響が軽微であり、かつ、全体としても重要性がないため持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社の決算日は、連結決算日と一致しております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

イ 有価証券

(イ) 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)によっております。

(ロ) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法によっております。

ロ 棚卸資産

主として総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)によっております。

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

イ 有形固定資産（リース資産を除く）

当社及び国内連結子会社は定率法によっております。また、在外連結子会社は当該国の会計基準の規定に基づく定額法によっております。

ただし、当社及び国内連結子会社は、1998年4月1日以降に取得した建物（建物附属設備を除く）並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な耐用年数は以下の通りであります。

建物及び構築物 2年～60年

機械装置及び運搬具 2年～15年

ロ 無形固定資産（リース資産を除く）

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、見込利用可能期間（5年）に基づく定額法によっております。

ハ リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法によっております。

(3) 重要な引当金の計上基準

イ 貸倒引当金

当連結会計年度末に保有する債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

ロ 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、賞与支給見込額の当連結会計年度負担額を計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

従業員の退職給付に備えるため、当連結会計年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

イ 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

ロ 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により費用処理することとしております。

数理計算上の差異は、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数（10年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日翌連結会計年度から費用処理することとしております。

未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額については、税効果を調整の上、純資産の部におけるその他の包括利益累計額の退職給付に係る調整累計額に計上しております。

ハ 小規模企業等における簡便法の採用

連結子会社は、退職給付に係る負債及び退職給付費用の計算に、退職給付に係る期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法を用いた簡便法を適用しております。

(5) 重要な収益及び費用の計上基準

主要な事業における主な履行義務の内容及び収益を認識する通常の時点は以下の通りであります。

イ 食料品事業

主に各種香辛料、即席カレー、チューブ製品、レトルトカレー等の販売から収益を稼得しております。

食料品事業の顧客との販売契約において、受注した製品を引き渡す義務を負っており、これらの履行義務を充足する時点は、通常製品の引渡時であることから、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。

なお、食料品事業の収益は、契約に定める価格から値引き及びリベート等の見積りを控除した金額で算定しており、重大な戻入が生じない可能性が非常に高い範囲でのみ認識しております。

□ 調理済食品

主に調理麺等の販売から収益を稼得しております。

調理済食品の顧客との販売契約において、受注した製品を引き渡す義務を負っており、これらの履行義務を充足する時点は、通常製品の引渡時であることから、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。

(6) 重要なヘッジ会計の方法

イ ヘッジ会計の方法

為替予約取引

振当処理の要件を満たす為替予約取引については、振当処理によっております。

金利スワップ取引

特例処理の要件を満たす金利スワップ取引については、特例処理によっております。

ロ ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建金銭債権債務について為替予約取引を行っております。

また、借入金について金利スワップ取引を行っております。

ハ ヘッジ方針

為替変動リスク及び金利変動リスクを回避する目的で行っております。なお、これらの取引は社内規定に従い、決裁を得て行っております。

ニ ヘッジ有効性評価の方法

為替予約取引及び金利スワップ取引ともに、ヘッジ対象とヘッジ手段との間に高い相関関係があることが明らかなため、有効性の評価を省略しております。

(7) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却は、子会社の実態に基づいて20年以内の適切な償却期間で均等償却しております。

(8) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なりリスクしか負わない取得日から3カ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(重要な会計上の見積り)

1. 関係会社株式の評価

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
関係会社株式	1,784	1,726

投資有価証券計上額を含む

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは関係会社株式について、市場価格のない株式等であるため、取得原価をもって連結貸借対照表価額としております。今後、当該関係会社の財政状態の悪化や経営破綻等により、株式の実質価額が著しく低下した場合には、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除き評価損を計上し、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

2. 繰延税金資産の回収可能性

(1) 当連結会計年度の連結財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
繰延税金資産	1,730	1,649

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社グループは繰延税金資産について、中期経営計画に基づいた事業計画等を前提として、回収可能性を検討し計上を行っております。当該見積りは、将来の不確実な経済情勢及び経営状況による事業計画の重要な未達等により、その回収可能性の判断に変更が生じた場合には、繰延税金資産の計上額が変動し、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

また、税率の変更を伴う税制の改正等があった場合には、法定実効税率の変動による繰延税金資産の増減が生じ、当社グループの業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

(表示方法の変更)

(連結損益計算書)

1. 前連結会計年度において、独立掲記しておりました「固定資産売却損」は、特別損失の総額の100分の10以下となったため、当連結会計年度において「特別損失」の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において表示しておりました「固定資産売却損」55百万円は、「特別損失」の「その他」として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書)

1. 前連結会計年度において、独立掲記しておりました「固定資産売却損益(は益)」は、金額の重要性が乏しくなったため、当連結会計年度において「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において表示しておりました「固定資産売却損益(は益)」53百万円は、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」として組み替えております。

2. 前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「税金等調整前当期純利益」に含めておりました「受取保険金」は、金額の重要性が増したため、当連結会計年度において独立掲記しております。

これに伴い、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「小計」欄以下において、「保険金の受取額」を独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「小計」に表示しておりました11,446百万円は、「受取保険金」13百万円、「保険金の受取額」13百万円、「小計」11,433百万円として組み替えております。

3. 前連結会計年度において、「投資活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めておりました「短期貸付金の回収による収入」は、金額の重要性が増したため、当連結会計年度において独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「投資活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示しておりました1百万円は、「短期貸付金の回収による収入」1百万円として組み替えております。

(連結貸借対照表関係)

1 非連結子会社及び関連会社項目

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
投資有価証券	1,784百万円	1,726百万円

2 土地の再評価

当社は「土地の再評価に関する法律」(平成10年3月31日公布 法律第34号)及び「土地の再評価に関する法律の一部を改正する法律」(平成13年3月31日公布 法律第19号)に基づき、事業用土地の再評価を行い、「土地再評価差額金」を純資産の部に計上しております。

再評価の方法

「土地の再評価に関する法律施行令」(平成10年3月31日公布 政令第119号)第2条第3号及び第4号に定める方法により算出しております。

再評価を行った年月日

2002年3月31日

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
再評価を行った土地の期末における時価と再評価後の帳簿価額との差額	1,255百万円	1,231百万円

3 担保提供資産及び担保付債務

担保提供資産は次の通りであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
建物及び構築物	442百万円	421百万円
土地	23百万円	23百万円
合計	465百万円	445百万円

上記に対応する債務は次の通りであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
短期借入金	370百万円	366百万円
長期借入金	360百万円	344百万円
合計	730百万円	710百万円

4 有形固定資産の圧縮記帳額

取得価額より控除した国庫補助金等の圧縮記帳額は次の通りであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
建物及び構築物	133百万円	140百万円
機械装置及び運搬具	196百万円	264百万円
工具、器具及び備品	0百万円	0百万円
土地	179百万円	179百万円
合計	510百万円	585百万円

(連結損益計算書関係)

1 顧客との契約から生じる収益

売上高につきましては、顧客との契約から生じる収益及びそれ以外の収益を区分して記載しております。顧客との契約から生じる収益の金額は、連結財務諸表「注記事項(セグメント情報等)」に記載しております。

2 棚卸資産の帳簿価額の切下額

商品及び製品期末棚卸高は収益性の低下に伴う簿価切下げ後の金額であり、次の棚卸資産評価損が売上原価に含まれております。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
	141百万円	254百万円

3 研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
	1,264百万円	1,349百万円

4 補助金収入

前連結会計年度(自2021年4月1日 至2022年3月31日)

主に、連結子会社の設備投資等によるものであります。

当連結会計年度(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

主に、連結子会社の設備投資等によるものであります。

5 関係会社清算益

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

非連結子会社である株式会社サズコートの清算結了に伴い発生したものであります。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

非連結子会社である株式会社ジー・アールの清算結了に伴い発生したものであります。

6 固定資産除却損の内訳

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
建物及び構築物	3百万円	28百万円
機械装置及び運搬具	17百万円	39百万円
工具、器具及び備品	0百万円	1百万円
解体費用等	7百万円	42百万円
合計	29百万円	112百万円

7 固定資産圧縮損の内訳

固定資産圧縮損は、補助金収入を有形固定資産の取得価額から直接減額した価額であります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
建物及び構築物	-	6百万円
機械装置及び運搬具	-	68百万円
合計	-	75百万円

8 情報セキュリティ対策費

情報セキュリティ対策費40百万円は、連結子会社のシステムへの不正アクセスに対する調査、セキュリティ対策の整備等に係る費用であります。

(連結包括利益計算書関係)

1 その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	618百万円	716百万円
組替調整額	4百万円	-
税効果調整前	622百万円	716百万円
税効果額	176百万円	196百万円
その他有価証券評価差額金	446百万円	520百万円
為替換算調整勘定：		
当期発生額	87百万円	97百万円
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	272百万円	181百万円
組替調整額	84百万円	126百万円
税効果調整前	188百万円	54百万円
税効果額	57百万円	16百万円
退職給付に係る調整額	130百万円	37百万円
その他の包括利益合計	403百万円	580百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度(自2021年4月1日 至2022年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数
発行済株式				
普通株式(注)1	13,954	-	332	13,622
合計	13,954	-	332	13,622
自己株式				
普通株式(注)2,3	1,254	332	332	1,254
合計	1,254	332	332	1,254

(注)1. 普通株式の発行済株式総数の減少332千株は、取締役会決議に基づく自己株式の消却による減少332千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の増加332千株は、取締役会決議に基づく自己株式の取得による増加332千株及び単元未満株式の買取りによる増加0千株であります。

3. 普通株式の自己株式の株式数の減少332千株は、取締役会決議に基づく自己株式の消却による減少332千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2021年5月21日 取締役会	普通株式	304	24	2021年3月31日	2021年6月11日
2021年10月29日 取締役会	普通株式	317	25	2021年9月30日	2021年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年5月23日 取締役会	普通株式	309	利益剰余金	25	2022年3月31日	2022年6月13日

当連結会計年度(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

(単位:千株)

	当連結会計年度 期首株式数	当連結会計年度 増加株式数	当連結会計年度 減少株式数	当連結会計年度 末株式数
発行済株式				
普通株式	13,622	-	-	13,622
合計	13,622	-	-	13,622
自己株式				
普通株式(注)1,2	1,254	283	0	1,537
合計	1,254	283	0	1,537

(注)1. 普通株式の自己株式の株式数の増加283千株は、取締役会決議に基づく自己株式の取得による増加283千株及び単元未満株式の買取りによる増加0千株であります。

2. 普通株式の自己株式の株式数の減少0千株は、単元未満株式の売渡しによる減少0千株であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2022年5月23日 取締役会	普通株式	309	25	2022年3月31日	2022年6月13日
2022年10月31日 取締役会	普通株式	333	27	2022年9月30日	2022年12月1日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

(決議)	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額(円)	基準日	効力発生日
2023年5月23日 取締役会	普通株式	326	利益剰余金	27	2023年3月31日	2023年6月13日

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
現金及び預金勘定	25,245百万円	20,786百万円
預入期間が3カ月を超える定期預金	32百万円	30百万円
現金及び現金同等物	25,213百万円	20,755百万円

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引(借主側)

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

イ 有形固定資産

主として、機械装置であります。

ロ 無形固定資産

ソフトウェアであります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載の通りであります。

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、スパイスとハーブを核とした製造販売事業を行うための設備投資計画に照らして、必要な資金を主に金融機関からの借入れにより調達しております。一時的な余資は安全性の高い金融資産で運用し、また、短期的な運転資金を金融機関からの借入れにより調達しております。デリバティブは、後述するリスクを回避するために利用しており、投機的な取引は行わない方針であります。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク並びにリスク管理体制

営業債権である受取手形及び売掛金は、顧客の信用リスクに晒されております。当該リスクに関しては、当社グループの与信管理規定に従い、取引先ごとの回収期日管理及び滞留残高管理を行うことにより、主な取引先の信用状況を把握する体制としております。また、グローバルに事業を展開していることから生じている外貨建ての営業債権は、為替の変動リスクに晒されておりますが、その一部は外貨建ての営業債務とネットしてヘッジしております。投資有価証券である株式は、主に業務上の関係を有する企業の株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。また、関係会社等に対し貸付を行っており、貸付の執行・管理については社内規程に従い、決裁を得て行っております。

営業債務である支払手形及び買掛金は、1年以内の支払期日であります。また、その一部には、原料等の輸入に伴う外貨建てのものがあり、為替の変動リスクに晒されておりますが、為替予約取引等を利用してヘッジしております。借入金のうち、短期借入金は主に営業取引に係る資金調達であり、長期借入金は主に営業取引や設備投資に係る資金調達であります。変動金利の借入金は、金利の変動リスクに晒されておりますが、このうち長期のものの一部については、金利スワップ取引を利用してヘッジしております。

デリバティブ取引は、外貨建ての営業債務に係る為替の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした為替予約取引、借入金に係る支払金利の変動リスクに対するヘッジ取引を目的とした金利スワップ取引であります。なお、為替予約取引及び金利スワップ取引ともに、ヘッジ対象とヘッジ手段との間に高い相関関係があることが明らかなため、有効性の評価を省略しております。

デリバティブ取引の執行・管理については取引権限を定めた社内規定に従い、決裁を得て行っており、また、デリバティブの利用にあたっては、信用度の高い金融機関を契約相手としておりますので、当該取引に信用リスクはないと判断しております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次の通りであります。

前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 投資有価証券( 2 )			
其他有価証券	7,520	7,520	-
(2) 長期貸付金	1,150		
貸倒引当金( 3 )	1,070		
	80	80	-
資産計	7,601	7,601	-
(1) 長期借入金	14,647	14,459	187
負債計	14,647	14,459	187

( 1 ) 「現金及び預金」、「受取手形」、「売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」及び「未払金」については、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

( 2 ) 市場価格のない株式等は、「(1) 投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下の通りであります。

(単位:百万円)

区分	前連結会計年度
非上場株式	1,916

( 3 ) 長期貸付金は個別に計上している貸倒引当金を控除しております。

当連結会計年度（2023年3月31日）

(単位：百万円)

	連結貸借対照表計上額	時価	差額
(1) 投資有価証券( 2) その他有価証券	8,238	8,238	-
(2) 長期貸付金 貸倒引当金	0 -		
	0	0	-
資産計	8,238	8,238	-
(1) 長期借入金	12,046	12,194	147
負債計	12,046	12,194	147

( 1 ) 「現金及び預金」、「受取手形」、「売掛金」、「支払手形及び買掛金」、「短期借入金」及び「未払金」については、現金であること、及び短期間で決済されるため時価が帳簿価額に近似するものであることから、記載を省略しております。

( 2 ) 市場価格のない株式等は、「(1) 投資有価証券」には含まれておりません。当該金融商品の連結貸借対照表計上額は以下の通りであります。

(単位：百万円)

区分	当連結会計年度
非上場株式	1,862

(注) 金銭債権の連結決算日後の償還予定額並びに有利子負債の返済予定額  
 前連結会計年度（2022年3月31日）

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	25,245	-	-	-
受取手形	188	-	-	-
売掛金	27,378	-	-	-
長期貸付金	-	1,150	-	-
合計	52,812	1,150	-	-
短期借入金	14,985	-	-	-
長期借入金	3,449	11,911	2,116	619
合計	18,434	11,911	2,116	619

当連結会計年度（2023年3月31日）

(単位：百万円)

	1年以内	1年超 5年以内	5年超 10年以内	10年超
現金及び預金	20,786	-	-	-
受取手形	164	-	-	-
売掛金	27,868	-	-	-
長期貸付金	-	0	-	-
合計	48,820	0	-	-
短期借入金	12,717	-	-	-
長期借入金	6,283	9,711	1,922	412
合計	19,000	9,711	1,922	412

3. 金融商品の時価のレベルごとの内訳等に関する事項

金融商品の時価を、時価の算定に係るインプットの観察可能性及び重要性に応じて、以下の3つのレベルに分類しております。

レベル1の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、活発な市場において形成される当該時価の算定の対象となる資産又は負債に関する相場価格により算定した時価

レベル2の時価：観察可能な時価の算定に係るインプットのうち、レベル1のインプット以外の時価の算定に係るインプットを用いて算定した時価

レベル3の時価：観察できない時価の算定に係るインプットを使用して算定した時価

時価の算定に重要な影響を与えるインプットを複数使用している場合には、それらのインプットがそれぞれ属するレベルのうち、時価の算定における優先順位が最も低いレベルに時価を分類しております。

(1) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品

前連結会計年度（2022年3月31日）

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 その他有価証券 株式	7,520	-	-	7,520
資産計	7,520	-	-	7,520

当連結会計年度（2023年3月31日）

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
投資有価証券 その他有価証券 株式	8,238	-	-	8,238
資産計	8,238	-	-	8,238

(2) 時価で連結貸借対照表に計上している金融商品以外の金融商品

前連結会計年度（2022年3月31日）

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期貸付金	-	80	-	80
資産計	-	80	-	80
長期借入金	-	14,459	-	14,459
負債計	-	14,459	-	14,459

当連結会計年度（2023年3月31日）

(単位：百万円)

区分	時価			
	レベル1	レベル2	レベル3	合計
長期貸付金	-	0	-	0
資産計	-	0	-	0
長期借入金	-	12,194	-	12,194
負債計	-	12,194	-	12,194

(注) 時価の算定に用いた評価技法及び時価の算定に係るインプットの説明

投資有価証券

上場株式は相場価格を用いて評価しております。上場株式は活発な市場で取引されているため、その時価をレベル1の時価に分類しております。

長期貸付金

長期貸付金は主に変動金利によるものであります。変動金利は一定期間ごとに金利が更改されるため、時価は帳簿価額にほぼ等しいことから、当該帳簿価額によってあり、レベル2の時価に分類しております。また、貸倒懸念債権については、回収見込額等に基づいて貸倒見積高を算定しているため、時価は連結貸借対照表計上額から現在の貸倒見積高を控除した金額にほぼ等しいことから、当該価額をもって時価としております。

長期借入金

長期借入金の時価については、元利金の合計額を新規に同様の借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しており、レベル2の時価に分類しております。変動金利による長期借入金は金利スワップと一体として処理された元利金の合計額を、同様の借入を行った場合に適用される合理的に見積もられる利率で割り引いて算定する方法によっております。

デリバティブ取引

金利スワップの時価は、国債金利等の観察可能なインプットを用いて算定しており、レベル2の時価に分類しております。

金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度(2022年3月31日)

(単位:百万円)

	種類	連結貸借対照表 計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えるもの	(1) 株式	7,413	3,078	4,334
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	7,413	3,078	4,334
連結貸借対照表計上額が取得原価を超えないもの	(1) 株式	107	127	20
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	107	127	20
合計		7,520	3,206	4,314

(注) 非上場株式(連結貸借対照表計上額1,916百万円)については、市場価格がない株式等のため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度（2023年3月31日）

（単位：百万円）

	種類	連結貸借対照表 計上額	取得原価	差額
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え るもの	(1) 株式	8,205	3,167	5,037
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	8,205	3,167	5,037
連結貸借対照表計上 額が取得原価を超え ないもの	(1) 株式	32	39	6
	(2) 債券			
	国債・地方債等	-	-	-
	社債	-	-	-
	その他	-	-	-
	(3) その他	-	-	-
	小計	32	39	6
合計		8,238	3,207	5,031

（注）非上場株式（連結貸借対照表計上額1,862百万円）については、市場価格がない株式等のため、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

## 2. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度において、その他有価証券で時価のある株式について4百万円減損処理を行っております。

なお、減損処理に当たっては、その他有価証券で時価のある株式については、期末における時価が取得原価に比べ50%を超えて下落した場合にはすべて減損処理を行い、30～50%下落した場合には、回復可能性を検討の上減損処理を行っております。また、非上場株式については、1株当たりの純資産額が取得原価に比べ50%を超えて下落した場合には、回復可能性が十分な証拠によって裏付けられる場合を除き減損処理を行い、30～50%下落した場合には、回復可能性を検討の上減損処理を行っております。

## （デリバティブ取引関係）

### 1. ヘッジ会計が適用されていないデリバティブ取引

#### (1) 通貨関連

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

該当する取引はありません。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

該当する取引はありません。

#### (2) 金利関連

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

該当する取引はありません。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

該当する取引はありません。

### 2. ヘッジ会計が適用されているデリバティブ取引

#### (1) 通貨関連

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

該当する取引はありません。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）  
 該当する取引はありません。

(2) 金利関連

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
金利スワップ取引の特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	4,427	3,386	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

(単位：百万円)

ヘッジ会計の方法	取引の種類	主なヘッジ対象	契約額等	契約額等のうち1年超	時価
金利スワップ取引の特例処理	金利スワップ取引 変動受取・固定支払	長期借入金	3,386	2,551	(注)

(注) 金利スワップの特例処理によるものは、ヘッジ対象とされている長期借入金と一体として処理されているため、その時価は、当該長期借入金の時価に含めて記載しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

退職給付制度としては退職一時金制度、確定拠出年金制度、規約型確定給付企業年金制度及び基金型確定給付企業年金制度を設けております。

また、従業員の退職に際して、退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合もあります。

退職一時金制度は当社及び連結子会社7社、基金型確定給付企業年金制度は当社及び連結子会社2社、確定拠出年金制度及び規約型確定給付企業年金制度は当社が有しております。

なお、複数事業主制度の企業年金基金制度については、当社及び連結子会社2社ともに、酒フーズ企業年金基金に加入しており、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
退職給付債務の期首残高	9,141百万円	9,402百万円
連結範囲の変更に伴う増加額	-	5百万円
勤務費用	425百万円	446百万円
利息費用	64百万円	65百万円
数理計算上の差異の発生額	311百万円	64百万円
退職給付の支払額	567百万円	565百万円
過去勤務費用の発生額	94百万円	-
簡便法による連結子会社の退職給付費用	120百万円	131百万円
退職給付債務の期末残高	9,402百万円	9,549百万円

(注) 連結子会社につきましては、簡便法(期末自己都合要支給額を退職給付債務とする方法)によっております。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
年金資産の期首残高	3,239百万円	3,227百万円
期待運用収益	80百万円	80百万円
数理計算上の差異の発生額	54百万円	116百万円
事業主からの拠出額	144百万円	146百万円
退職給付の支払額	183百万円	161百万円
年金資産の期末残高	3,227百万円	3,176百万円

(3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	3,217百万円	3,250百万円
年金資産	3,227百万円	3,176百万円
	9百万円	74百万円
非積立型制度の退職給付債務	6,184百万円	6,298百万円
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	6,175百万円	6,373百万円
退職給付に係る負債	6,184百万円	6,373百万円
退職給付に係る資産	9百万円	-
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	6,175百万円	6,373百万円

(4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
勤務費用	425百万円	445百万円
利息費用	64百万円	65百万円
期待運用収益	80百万円	80百万円
数理計算上の差異の費用処理額	88百万円	136百万円
過去勤務費用の費用処理額	4百万円	9百万円
臨時に支払った割増退職金	10百万円	18百万円
簡便法による連結子会社の退職給付費用	120百万円	131百万円
確定給付制度に係る退職給付費用	623百万円	706百万円

(注) 「勤務費用」は、出向者に係る出向先負担額を控除しております。

(5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次の通りであります。

	前連結会計年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当連結会計年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
数理計算上の差異	277百万円	45百万円
過去勤務費用	89百万円	9百万円
合計	188百万円	54百万円

(6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目(税効果控除前)の内訳は次の通りであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
未認識数理計算上の差異	627百万円	672百万円
未認識過去勤務費用	89百万円	80百万円
合計	538百万円	592百万円

(7) 年金資産に関する事項

年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次の通りであります。

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
国内債券	27.1%	21.6%
国内株式	1.4%	3.7%
外国債券	13.3%	10.6%
外国株式	1.3%	3.0%
生保一般勘定	54.1%	55.4%
その他	2.8%	5.7%
合計	100.0%	100.0%

長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎（加重平均で表わしております。）

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
割引率	0.8%	0.8%
長期期待運用収益率	2.5%	2.5%
一時金選択率	40.0%	40.0%

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度（確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の企業年金基金制度を含む。）への要拠出額は、前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）285百万円、当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）301百万円であります。

要拠出額を退職給付費用として処理している複数事業主制度の企業年金基金に関する事項は以下の通りであります。

(1) 複数事業主制度の直近の積立状況

	前連結会計年度 (2021年3月31日現在)	当連結会計年度 (2022年3月31日現在)
年金資産の額	4,209百万円	4,415百万円
年金財政計算上の数理債務の額と 最低責任準備金の額との合計額	3,933百万円	4,139百万円
差引額	276百万円	276百万円

(2) 複数事業主制度の掛金に占める当社グループの割合

前連結会計年度 29.8%（2021年3月31日現在）

当連結会計年度 30.1%（2022年3月31日現在）

(3) 補足説明

上記(1)の差引額の主な要因は、前連結会計年度は別途積立金276百万円、当連結会計年度は別途積立金276百万円であります。

また、本制度において、将来の財政悪化に備え、予め資産を積み立てる為、リスク対応掛金を設定しており、当社グループは連結財務諸表上、前連結会計年度14百万円、当連結会計年度23百万円を費用処理しております。

なお、上記(2)の割合は当社グループの実際の負担割合とは一致しません。

年金制度の積立状況については、入手可能な直近時点の年金財政計算に基づく数値を記載しております。

( 税効果会計関係 )

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 ( 2022年 3月31日 )	当連結会計年度 ( 2023年 3月31日 )
繰延税金資産		
税務上の繰越欠損金 ( 注 ) 2	1,402百万円	1,677百万円
退職給付に係る負債	1,933百万円	1,993百万円
貸倒引当金	333百万円	6百万円
賞与引当金	446百万円	471百万円
未払金	230百万円	230百万円
未実現利益	262百万円	333百万円
減損資産	166百万円	395百万円
その他	335百万円	309百万円
繰延税金資産小計	5,111百万円	5,417百万円
税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額 ( 注 ) 2	1,294百万円	1,532百万円
将来減算一時差異等の合計に係る評価性引当額	741百万円	698百万円
評価性引当額小計 ( 注 ) 1	2,036百万円	2,231百万円
繰延税金資産合計	3,075百万円	3,185百万円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額	1,291百万円	1,488百万円
固定資産圧縮積立金	41百万円	39百万円
その他	10百万円	7百万円
繰延税金負債合計	1,344百万円	1,536百万円
繰延税金資産の純額	1,730百万円	1,649百万円

( 注 ) 1. 評価性引当額が195百万円増加しております。これは主に、当社において貸倒引当金に係る評価性引当額が270百万円減少したほか、連結子会社の(株)ヒガンヤデリカにおいて税務上の繰越欠損金に係る評価性引当額が109百万円減少したものの、当連結会計年度より(株)泰秀を連結の範囲に含めたことに伴い評価性引当額が572百万円増加したことによるものであります。

2. 税務上の繰越欠損金及びその繰延税金資産の繰越期限別の金額

前連結会計年度 ( 2022年 3月31日 )

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金 ( )	-	-	329	251	219	601	1,402百万円
評価性引当額	-	-	221	251	219	601	1,294百万円
繰延税金資産	-	-	108	-	-	-	108百万円

( ) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

当連結会計年度 ( 2023年 3月31日 )

	1年以内	1年超 2年以内	2年超 3年以内	3年超 4年以内	4年超 5年以内	5年超	合計
税務上の繰越欠損金 ( )	-	211	251	461	-	752	1,677百万円
評価性引当額	-	112	251	415	-	752	1,532百万円
繰延税金資産	-	98	-	45	-	-	144百万円

( ) 税務上の繰越欠損金は、法定実効税率を乗じた額であります。

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (2022年3月31日)	当連結会計年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2%	0.3%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.2%	1.0%
住民税均等割	0.6%	0.9%
法人税額の特別控除	2.0%	3.0%
評価性引当額	2.1%	2.1%
その他	0.5%	0.1%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.6%	25.9%

(収益認識関係)

- 顧客との契約から生じる収益を分解した情報  
 顧客との契約から生じる収益を分解した情報は、「注記事項(セグメント情報等)」に記載の通りであります。
- 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報  
 顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項(5) 重要な収益及び費用の計上基準」に記載の通りであります。
- 顧客との契約に基づく履行義務の充足と当該契約から生じるキャッシュ・フローとの関係並びに当連結会計年度末において存在する顧客との契約から翌連結会計年度以降に認識すると見込まれる収益の金額及び時期に関する情報

(1) 契約残高

顧客との契約から生じた債権、契約資産の残高は以下の通りであります。

(単位：百万円)

	前連結会計年度	当連結会計年度
顧客との契約から生じた債権(期首残高)	25,704	27,567
顧客との契約から生じた債権(期末残高)	27,567	28,033
契約資産(期首残高)	-	-
契約資産(期末残高)	-	-

(2) 残存履行義務に配分した取引価格

当社グループにおいては、予想契約期間が1年を超える重要な取引はありません。また、顧客との契約から生じる対価の中に、取引価格に含まれていない重要な金額はありません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、取締役会が経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものであります。

当社グループは、国内及び海外において事業活動を展開しており、製品・サービス別に戦略の立案を行っております。

したがいまして、当社グループは、製品・サービス別のセグメントから構成されており、「食料品事業」、「調理済食品」の2つを報告セグメントとしております。

「食料品事業」におきましては、各種香辛料、即席カレー、チューブ製品、レトルトカレー等の製造・販売のほか、関連する原材料の調達を行っております。また、「調理済食品」におきましては、調理麺等の製造・販売を行っております。

2. 報告セグメントの売上高、利益又は損失、資産、その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は、第三者間取引価格に基づいております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、その他の項目の金額に関する情報及び収益の分解情報

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額(注) 2
	食料品事業	調理済食品	計		
売上高					
一時点で移転される財	104,948	13,098	118,046	-	118,046
一定の期間にわたり移転される財	-	-	-	-	-
顧客との契約から生じる収益	104,948	13,098	118,046	-	118,046
その他の収益	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	104,948	13,098	118,046	-	118,046
セグメント間の内部売上高又は振替高	-	-	-	-	-
計	104,948	13,098	118,046	-	118,046
セグメント利益	7,805	769	8,575	42	8,617
セグメント資産	89,507	3,647	93,155	35,829	128,984
その他の項目					
減価償却費	4,258	391	4,649	-	4,649
有形固定資産及び無形固定資産の増加額	4,754	323	5,077	-	5,077

(注) 1. 調整額の内容は以下の通りであります。

(1) セグメント利益の調整額42百万円は、セグメント間取引消去42百万円であります。

(2) セグメント資産の調整額35,829百万円には、セグメント間債権債務消去 4百万円、各報告セグメントに配分していない全社資産（運用資金等）35,833百万円が含まれております。

2. セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			調整額 (注) 1	連結財務諸表 計上額(注) 2
	食料品事業	調理済食品	計		
売上高					
一時点で移転される財	107,382	13,268	120,651	-	120,651
一定の期間にわたり移 転される財	-	-	-	-	-
顧客との契約から生じ る収益	107,382	13,268	120,651	-	120,651
その他の収益	-	-	-	-	-
外部顧客への売上高	107,382	13,268	120,651	-	120,651
セグメント間の内部 売上高又は振替高	-	-	-	-	-
計	107,382	13,268	120,651	-	120,651
セグメント利益	4,568	787	5,356	42	5,399
セグメント資産	96,045	3,533	99,578	30,883	130,462
その他の項目					
減価償却費	4,285	394	4,680	-	4,680
有形固定資産及び 無形固定資産の増加額	4,203	285	4,488	-	4,488

(注) 1. 調整額の内容は以下の通りであります。

(1) セグメント利益の調整額42百万円は、セグメント間取引消去42百万円であります。

(2) セグメント資産の調整額30,883百万円には、セグメント間債権債務消去 4百万円、各報告セグメントに配分していない全社資産（運用資金等）30,887百万円が含まれております。

2. セグメント利益は、連結損益計算書の営業利益と調整を行っております。

#### 【関連情報】

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

##### 1. 製品及びサービスごとの情報

「セグメント情報」に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

##### 2. 地域ごとの情報

###### (1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

###### (2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

##### 3. 主要な顧客ごとの情報

（単位：百万円）

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱食品(株)	38,279	食料品事業
三井物産(株)	30,830	食料品事業
国分グループ本社(株)	22,358	食料品事業

(注) 売上高は出荷価格ベースとなっております。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

##### 1. 製品及びサービスごとの情報

「セグメント情報」に同様の情報を開示しているため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
三菱食品(株)	38,062	食料品事業
三井物産(株)	29,530	食料品事業
国分グループ本社(株)	22,946	食料品事業

(注) 売上高は出荷価格ベースとなっております。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度(自2021年4月1日 至2022年3月31日)

(単位：百万円)

	食料品事業	調理済食品	全社	合計
減損損失	6	-	-	6

当連結会計年度(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

(単位：百万円)

	食料品事業	調理済食品	全社	合計
減損損失	20	-	-	20

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度(自2021年4月1日 至2022年3月31日)

該当事項はありません。

なお、2010年4月1日前行われた子会社の企業結合により発生した負ののれんの償却額及び未償却残高は、以下の通りであります。

(単位：百万円)

	食料品事業	調理済食品	全社	合計
当期償却額	2	-	-	2
当期末残高	15	-	-	15

当連結会計年度(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

該当事項はありません。

なお、2010年4月1日前行われた子会社の企業結合により発生した負ののれんの償却額及び未償却残高は、以下の通りであります。

(単位：百万円)

	食料品事業	調理済食品	全社	合計
当期償却額	2	-	-	2
当期末残高	13	-	-	13

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

前連結会計年度(自2021年4月1日 至2022年3月31日)

該当事項はありません。

当連結会計年度(自2022年4月1日 至2023年3月31日)

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社と関連当事者との取引

連結財務諸表提出会社の非連結子会社及び関連会社等

前連結会計年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

該当事項はありません。

当連結会計年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

該当事項はありません。

（1株当たり情報）

	前連結会計年度 （自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）	当連結会計年度 （自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）
1株当たり純資産額	4,843.38円	5,207.10円
1株当たり当期純利益金額	492.16円	332.28円

（注）1株当たり当期純利益金額の算定上の基礎は、以下の通りであります。

	前連結会計年度 （自 2021年4月1日 至 2022年3月31日）	当連結会計年度 （自 2022年4月1日 至 2023年3月31日）
親会社株主に帰属する当期純利益金額 （百万円）	6,225	4,080
普通株主に帰属しない金額（百万円）	-	-
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益金額（百万円）	6,225	4,080
普通株式の期中平均株式数（千株）	12,649	12,280

（注）潜在株式調整後1株当たり当期純利益金額については、潜在株式が存在しないため記載しておりません。

（重要な後発事象）

該当事項はありません。

【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	14,985	12,717	0.86	-
1年以内に返済予定の長期借入金	3,449	6,283	1.26	-
1年以内に返済予定のリース債務	178	201	-	-
長期借入金(1年以内に返済予定のものを除く。)	14,647	12,046	1.11	2024年～2035年
リース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)	434	470	-	2024年～2030年
其他有利子負債	-	-	-	-
合計	33,693	31,719	-	-

- (注) 1. 平均利率については、期末借入金残高に対する加重平均利率を記載しております。  
 2. リース債務の平均利率については一部の連結子会社を除き、リース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。  
 3. 長期借入金及びリース債務(1年以内に返済予定のものを除く。)の連結決算日後5年間の返済予定額は以下の通りであります。

(単位：百万円)

	1年超2年以内	2年超3年以内	3年超4年以内	4年超5年以内
長期借入金	4,672	2,360	1,336	1,341
リース債務	239	127	81	14

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2) 【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高(百万円)	30,616	61,433	93,853	120,651
税金等調整前四半期(当期) 純利益金額(百万円)	2,483	3,484	5,816	5,510
親会社株主に帰属する四半期 (当期)純利益金額(百万円)	1,792	2,588	4,249	4,080
1株当たり四半期(当期) 純利益金額(円)	144.97	209.32	344.35	332.28

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益金額 又は純損失金額( ) (円)	144.97	64.36	135.01	13.94

## 2【財務諸表等】

## (1)【財務諸表】

## 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
<b>資産の部</b>		
<b>流動資産</b>		
現金及び預金	19,212	12,115
受取手形	188	164
売掛金	1 26,521	1 27,253
商品及び製品	8,689	9,218
仕掛品	2,395	3,401
原材料及び貯蔵品	7,093	10,599
前払費用	385	487
短期貸付金	1	1 400
その他	1 228	1 1,157
貸倒引当金	0	337
<b>流動資産合計</b>	<b>64,716</b>	<b>64,460</b>
<b>固定資産</b>		
<b>有形固定資産</b>		
建物	10,800	11,683
構築物	3 295	3 497
機械及び装置	5,012	5,095
車両運搬具	13	7
工具、器具及び備品	586	897
土地	6,517	6,586
リース資産	426	380
建設仮勘定	1,037	279
<b>有形固定資産合計</b>	<b>24,689</b>	<b>25,427</b>
<b>無形固定資産</b>		
ソフトウェア	575	424
その他	86	77
<b>無形固定資産合計</b>	<b>661</b>	<b>502</b>
<b>投資その他の資産</b>		
投資有価証券	7,525	8,235
関係会社株式	2,285	2,336
出資金	77	77
長期貸付金	1 1,150	1 750
前払年金費用	249	260
繰延税金資産	955	669
長期保険掛金	1,949	2,119
その他	1,540	350
貸倒引当金	1,087	650
<b>投資その他の資産合計</b>	<b>14,645</b>	<b>14,148</b>
<b>固定資産合計</b>	<b>39,996</b>	<b>40,078</b>
<b>資産合計</b>	<b>104,713</b>	<b>104,539</b>

(単位：百万円)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
<b>負債の部</b>		
流動負債		
支払手形	1,894	210
買掛金	1 10,431	1 12,194
短期借入金	6,165	5,067
1年内返済予定の長期借入金	2,027	4,797
リース債務	133	133
未払金	1 10,047	1 9,801
未払費用	516	540
未払法人税等	866	143
預り金	64	63
賞与引当金	1,121	1,199
資産除去債務	-	2
設備関係支払手形	156	-
その他	41	55
流動負債合計	33,465	34,210
固定負債		
長期借入金	7,780	5,442
リース債務	351	296
再評価に係る繰延税金負債	1,109	1,107
退職給付引当金	4,679	4,763
債務保証損失引当金	2,065	1,461
資産除去債務	121	122
その他	40	38
固定負債合計	16,147	13,231
負債合計	49,613	47,441
<b>純資産の部</b>		
株主資本		
資本金	1,744	1,744
資本剰余金		
資本準備金	5,343	5,343
その他資本剰余金	-	0
資本剰余金合計	5,343	5,343
利益剰余金		
利益準備金	436	436
その他利益剰余金		
厚生施設積立金	700	700
固定資産圧縮積立金	94	90
別途積立金	16,318	16,318
繰越利益剰余金	29,533	32,056
利益剰余金合計	47,082	49,600
自己株式	2,933	3,960
株主資本合計	51,236	52,726
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	3,001	3,513
土地再評価差額金	862	857
評価・換算差額等合計	3,863	4,371
純資産合計	55,100	57,098
負債純資産合計	104,713	104,539

## 【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 2021年 4月 1日 至 2022年 3月 31日)	当事業年度 (自 2022年 4月 1日 至 2023年 3月 31日)
売上高	1 103,898	1 105,427
売上原価	1 75,212	1 80,240
売上総利益	28,685	25,186
販売費及び一般管理費	1, 2 21,728	1, 2 21,856
営業利益	6,957	3,330
営業外収益		
受取利息	1 18	1 17
受取配当金	215	259
不動産賃貸料	1 57	1 57
貸倒引当金戻入額	39	100
為替差益	108	143
その他	1 60	1 86
営業外収益合計	498	664
営業外費用		
支払利息	314	289
支払手数料	-	50
その他	1	2
営業外費用合計	315	342
経常利益	7,140	3,653
特別利益		
債務保証損失引当金戻入額	656	604
その他	29	88
特別利益合計	685	692
特別損失		
固定資産除却損	3 20	3 86
損害賠償金	-	17
製品回収関連費用	53	-
その他	78	8
特別損失合計	153	112
税引前当期純利益	7,673	4,233
法人税、住民税及び事業税	1,911	985
法人税等調整額	55	91
法人税等合計	1,966	1,076
当期純利益	5,706	3,156

【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自2021年4月1日 至2022年3月31日）

(単位：百万円)

	株主資本										自己株式	株主資本合計
	資本金	資本剰余金			利益準備金	利益剰余金				利益剰余金合計		
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計		その他利益剰余金						
					厚生施設積立金	固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金				
当期首残高	1,744	5,343	0	5,344	436	700	99	16,318	25,683	43,236	2,932	47,392
当期変動額												
固定資産圧縮積立金の取崩							4		4	-		-
剰余金の配当									622	622		622
当期純利益									5,706	5,706		5,706
自己株式の取得											1,240	1,240
自己株式の処分												-
自己株式の消却			0	0					1,239	1,239	1,240	-
土地再評価差額金の取崩									0	0		0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）												
当期変動額合計	-	-	0	0	-	-	4	-	3,850	3,845	0	3,844
当期末残高	1,744	5,343	-	5,343	436	700	94	16,318	29,533	47,082	2,933	51,236

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	2,563	862	3,425	50,818
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩				-
剰余金の配当				622
当期純利益				5,706
自己株式の取得				1,240
自己株式の処分				-
自己株式の消却				-
土地再評価差額金の取崩				0
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	437	0	437	437
当期変動額合計	437	0	437	4,281
当期末残高	3,001	862	3,863	55,100

当事業年度（自2022年4月1日 至2023年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本											
	資本金	資本剰余金			利益剰余金						自己株式	株主資本合計
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金				利益剰余金合計		
						厚生施設積立金	固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金			
当期首残高	1,744	5,343	-	5,343	436	700	94	16,318	29,533	47,082	2,933	51,236
当期変動額												
固定資産圧縮積立金の取崩									4	4		-
剰余金の配当									643	643		643
当期純利益									3,156	3,156		3,156
自己株式の取得											1,027	1,027
自己株式の処分			0	0							0	0
自己株式の消却												-
土地再評価差額金の取崩									4	4		4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）												
当期変動額合計	-	-	0	0	-	-	4	-	2,522	2,517	1,027	1,490
当期末残高	1,744	5,343	0	5,343	436	700	90	16,318	32,056	49,600	3,960	52,726

	評価・換算差額等			純資産合計
	その他有価証券評価差額金	土地再評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	3,001	862	3,863	55,100
当期変動額				
固定資産圧縮積立金の取崩				-
剰余金の配当				643
当期純利益				3,156
自己株式の取得				1,027
自己株式の処分				0
自己株式の消却				-
土地再評価差額金の取崩				4
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	512	4	507	507
当期変動額合計	512	4	507	1,997
当期末残高	3,513	857	4,371	57,098

【注記事項】

(継続企業の前提に関する事項)

該当事項はありません。

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 満期保有目的の債券

償却原価法(定額法)によっております。

(2) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法によっております。

(3) その他有価証券

市場価格のない株式等以外のもの

時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)によっております。

市場価格のない株式等

主として移動平均法による原価法によっております。

2. 棚卸資産の評価基準及び評価方法

主として総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)によっております。

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産(リース資産を除く)

定率法によっております。

ただし、1998年4月1日以降に取得した建物(建物附属設備を除く)並びに2016年4月1日以降に取得した建物附属設備及び構築物については、定額法によっております。

なお、主な耐用年数は以下の通りであります。

建物 3年～50年

機械及び装置 2年～12年

(2) 無形固定資産(リース資産を除く)

定額法によっております。

なお、自社利用のソフトウェアについては、見込利用可能期間(5年)に基づく定額法によっております。

(3) リース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額をゼロとする定額法によっております。

4. 引当金の計上基準

(1) 貸倒引当金

当事業年度末に保有する債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

(2) 賞与引当金

従業員の賞与の支給に充てるため、賞与支給見込額の当事業年度負担額を計上しております。

(3) 退職給付引当金(前払年金費用)

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

イ 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、期間定額基準によっております。

ロ 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用は、その発生時の従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により費用処理することとしております。

数理計算上の差異は、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間以内の一定の年数(10年)による定額法により按分した額を、それぞれ発生の日事業年度から費用処理することとしております。

なお、当事業年度末における年金資産が、退職給付債務から数理計算上の差異等を控除した額を超過する場合には、前払年金費用(投資その他の資産)に計上しております。

(4) 債務保証損失引当金

債務保証等に係る損失に備えるため、被保証者の財政状態等を勘案し、損失負担見込額を計上しております。

5. 収益及び費用の計上基準

主要な事業における主な履行義務の内容及び収益を認識する通常の時点は以下の通りであります。

(1) 食料品事業

主に各種香辛料、即席カレー、チューブ製品、レトルトカレー等の販売から収益を稼得しております。

食料品事業の顧客との販売契約において、受注した製品を引き渡す義務を負っており、これらの履行義務を充足する時点は、通常製品の引渡時であることから、当該製品の引渡時点で収益を認識しております。

なお、食料品事業の収益は、契約に定める価格から値引き及びリベート等の見積りを控除した金額で算定しており、重大な戻入が生じない可能性が非常に高い範囲でのみ認識しております。

6. ヘッジ会計の方法

(1) ヘッジ会計の方法

為替予約取引

振当処理の要件を満たす為替予約取引については、振当処理によっております。

金利スワップ取引

特例処理の要件を満たす金利スワップ取引については、特例処理によっております。

(2) ヘッジ手段とヘッジ対象

外貨建金銭債権債務について為替予約取引を行っております。

また、借入金について金利スワップ取引を行っております。

(3) ヘッジ方針

為替変動リスク及び金利変動リスクを回避する目的で行っております。なお、これらの取引は社内規定に従い、決裁を得て行っております。

(4) ヘッジ有効性評価の方法

為替予約取引及び金利スワップ取引ともに、ヘッジ対象とヘッジ手段との間に高い相関関係があることが明らかのため、有効性の評価を省略しております。

7. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(重要な会計上の見積り)

1. 関係会社株式の評価

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度	当事業年度
関係会社株式	2,285	2,336

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り)1. 関係会社株式の評価」に記載した内容と同一であります。

2. 繰延税金資産の回収可能性

(1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度	当事業年度
繰延税金資産	955	669

(2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

連結財務諸表「注記事項(重要な会計上の見積り)2. 繰延税金資産の回収可能性」に記載した内容と同一であります。

## 3. 貸倒引当金

## (1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度	当事業年度
貸倒引当金	1,087	988

うち関係会社に対する貸倒引当金は前事業年度 1,070百万円、当事業年度 970百万円であります。

## (2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社は貸倒引当金について、当事業年度末に保有する債権の貸倒による損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については相手先の財政状態に関する検討に基づいて個別に回収可能性を勘案し、回収不能見込額を計上しております。

今後、取引先の経営状況の悪化や経営破綻等により、貸倒引当金の追加計上や想定を上回る貸倒損失が発生した場合、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

## 4. 債務保証損失引当金

## (1) 当事業年度の財務諸表に計上した金額

(単位：百万円)

	前事業年度	当事業年度
債務保証損失引当金	2,065	1,461

## (2) 識別した項目に係る重要な会計上の見積りの内容に関する情報

当社は債務保証損失引当金について、債務保証等に係る損失に備えるため、被保証者の財政状態等を勘案し、損失負担見込額を計上しております。

今後、被保証者の財政状態の悪化や経営破綻等により、債務保証損失引当金の追加計上や引当額を超える保証債務の履行が発生した場合、当社の業績及び財政状態に影響を及ぼす可能性があります。

## (表示方法の変更)

## (貸借対照表)

1. 前事業年度において、「流動資産」の「その他」に含めておりました「短期貸付金」は、金額の重要性が増したため、当事業年度において独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の貸借対照表において「流動資産」の「その他」に表示しておりました229百万円は、「短期貸付金」1百万円、「その他」228百万円として組み替えております。

## (損益計算書)

1. 前事業年度において、「営業外収益」の「その他」に含めておりました「貸倒引当金戻入額」は、営業外収益の総額の100分の10を超えたため、当事業年度において独立掲記しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において「営業外収益」の「その他」に表示しておりました99百万円は、「貸倒引当金戻入額」39百万円、「その他」60百万円として組み替えております。

2. 前事業年度において、独立掲記しておりました「固定資産売却損」は、特別損失の総額の100分の10以下となったため、当事業年度において「特別損失」の「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前事業年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前事業年度の損益計算書において表示しておりました「固定資産売却損」55百万円は、「特別損失」の「その他」として組み替えております。

## (貸借対照表関係)

## 1 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務(区分表示されたものを除く)

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
短期金銭債権	871百万円	1,560百万円
長期金銭債権	1,150百万円	750百万円
短期金銭債務	6,491百万円	6,774百万円

2 保証債務

事業年度末において銀行借入等に対する保証債務は次の通りであります。

	前事業年度 (2022年3月31日)		当事業年度 (2023年3月31日)
(株)エスピーサンキョーフーズ	4,530百万円	(株)エスピーサンキョーフーズ	4,041百万円
(株)ヒガシヤデリカ	3,128百万円	(株)ヒガシヤデリカ	3,571百万円
合計	7,659百万円	合計	7,612百万円

3 圧縮記帳

取得価額より控除した国庫補助金等の圧縮記帳額は次の通りであります。

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
構築物	2百万円	2百万円

(損益計算書関係)

1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	4,366百万円	5,253百万円
仕入高、外注加工費他	34,768百万円	38,782百万円
営業取引以外の取引高	57百万円	1,185百万円

2 販売費に属する費用のおおよその割合は前事業年度48%、当事業年度47%、一般管理費に属する費用のおおよその割合は前事業年度52%、当事業年度53%であります。

販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は次の通りであります。

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
販売促進費	1,738百万円	1,753百万円
荷造運搬費	3,248百万円	3,262百万円
広告宣伝費	3,100百万円	2,824百万円
給料及び手当	4,186百万円	4,265百万円
賞与引当金繰入額	637百万円	663百万円
退職給付費用	454百万円	501百万円
減価償却費	651百万円	481百万円

3 固定資産除却損の内訳

	前事業年度 (自 2021年4月1日 至 2022年3月31日)	当事業年度 (自 2022年4月1日 至 2023年3月31日)
建物	2百万円	19百万円
機械及び装置	11百万円	23百万円
解体費用等	6百万円	42百万円
その他	0百万円	0百万円
合計	20百万円	86百万円

(有価証券関係)

前事業年度(2022年3月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式2,285百万円)は、市場価格のない株式等のため、記載していません。

当事業年度(2023年3月31日)

子会社株式(貸借対照表計上額 子会社株式2,336百万円)は、市場価格のない株式等のため、記載していません。

(税効果会計関係)

1 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
繰延税金資産		
賞与引当金	343百万円	366百万円
未払金	230百万円	230百万円
退職給付引当金	1,432百万円	1,457百万円
ゴルフ会員権評価損	51百万円	51百万円
貸倒引当金	332百万円	302百万円
債務保証損失引当金	631百万円	447百万円
その他	232百万円	199百万円
繰延税金資産小計	3,254百万円	3,056百万円
評価性引当額	892百万円	786百万円
繰延税金資産合計	2,362百万円	2,269百万円
繰延税金負債		
その他有価証券評価差額	1,281百万円	1,473百万円
固定資産圧縮積立金	41百万円	39百万円
前払年金費用	76百万円	79百万円
その他	7百万円	7百万円
繰延税金負債合計	1,407百万円	1,600百万円
繰延税金資産の純額	955百万円	669百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (2022年3月31日)	当事業年度 (2023年3月31日)
法定実効税率	30.6%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	0.2%	0.4%
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	0.2%	0.4%
住民税均等割	0.6%	1.2%
法人税額の特別控除	2.2%	3.5%
評価性引当額	3.5%	2.5%
その他	0.1%	0.4%
税効果会計適用後の法人税等の負担率	25.6%	25.4%

(収益認識関係)

顧客との契約から生じる収益を理解するための基礎となる情報は、連結財務諸表「注記事項(収益認識関係)」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高	減価償却 累計額	当期償却額	差引期末 帳簿価額
有形 固定 資産	建物	25,861	1,584	128	27,317	15,633	678	11,683
	構築物	1,887	260	1	2,146	1,648	58	497
	機械及び装置	17,839	1,451	556	18,734	13,639	1,346	5,095
	車両運搬具	56	1	12	46	39	6	7
	工具、器具及び 備品	5,330	540	57	5,812	4,915	229	897
	土地	6,517 [1,971]	78	9 [6]	6,586 [1,964]	-	-	6,586
	リース資産	777	84	85	776	395	129	380
	建設仮勘定	1,037	3,667	4,425	279	-	-	279
	計	59,308 [1,971]	7,669	5,277 [6]	61,699 [1,964]	36,271	2,449	25,427
無形 固定 資産	ソフトウェア	1,217	81	234	1,063	638	229	424
	その他	104	0	7 (3)	96	19	5	77
	計	1,321	81	242 (3)	1,160	658	235	502

- (注) 1. 当期減少額の( )内は内書きで、減損損失の計上額であります。  
 2. 土地の当期首残高及び当期末残高の[ ]内は、土地再評価差額(繰延税金負債控除前)の残高であります。また、当期減少額における[ ]内は土地再評価差額(繰延税金負債控除前)の減少であり、売却によるものであります。  
 3. 当期首残高及び当期末残高については、取得価額により記載しております。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
貸倒引当金	1,087	988	1,087	988
賞与引当金	1,121	1,199	1,121	1,199
債務保証損失引当金	2,065	1,461	2,065	1,461

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

## 第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し	
取扱場所	(特別口座) 東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番4号 日本証券代行株式会社本店
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都中央区日本橋茅場町一丁目2番4号 日本証券代行株式会社
取次所	
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法	電子公告とする。ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による公告をすることができない場合は、日本経済新聞に掲載して行う。 公告掲載URL <a href="https://www.sbfoods.co.jp/">https://www.sbfoods.co.jp/</a>
株主に対する特典	(注)2

(注)1. 当社定款の定めにより、単元未満株主は、会社法第189条第2項各号に掲げる権利、会社法第166条第1項の規定による請求をする権利、株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利並びに単元未満株式の売渡請求をする権利以外の権利を有していません。

2. 株主に対する特典は、次の通りです。

保有株式数	継続保有期間	優待内容
100株以上	3年未満	1,000円相当の当社製品詰め合わせ
	3年以上( )	2,000円相当の当社製品詰め合わせ

( ) 「継続保有期間3年以上」の株主とは、株主名簿基準日(毎年3月31日及び9月30日)の株主名簿に同一の株主番号で7回以上連続して記載または記録された株主をいいます。

## 第7【提出会社の参考情報】

### 1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、金融商品取引法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

### 2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

(1) 有価証券報告書及びその添付書類並びに確認書

事業年度（第109期）（自2021年4月1日 至2022年3月31日）2022年6月29日関東財務局長に提出

(2) 内部統制報告書及びその添付書類

2022年6月29日関東財務局長に提出

(3) 四半期報告書及び確認書

（第110期第1四半期）（自2022年4月1日 至2022年6月30日）2022年8月8日関東財務局長に提出

（第110期第2四半期）（自2022年7月1日 至2022年9月30日）2022年11月11日関東財務局長に提出

（第110期第3四半期）（自2022年10月1日 至2022年12月31日）2023年2月10日関東財務局長に提出

(4) 臨時報告書

2022年7月1日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2（株主総会における議決権行使の結果）の規定に基づく臨時報告書であります。

2022年10月14日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第16号（連結子会社の事業の譲渡の決定）の規定に基づく臨時報告書であります。

2022年12月26日関東財務局長に提出

金融商品取引法第24条の5第4項及び企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第4号（主要株主の異動）の規定に基づく臨時報告書であります。

(5) 自己株券買付状況報告書

報告期間（自2022年12月1日 至2022年12月31日）2023年1月13日関東財務局長に提出

## 第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

2023年 6月23日

エスピー食品株式会社

取締役会 御中

双研日栄監査法人

東京都中央区

指定社員  
業務執行社員 公認会計士 國井 隆

指定社員  
業務執行社員 公認会計士 井上 敦

< 財務諸表監査 >

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているエスピー食品株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、エスピー食品株式会社及び連結子会社の2023年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「連結財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当連結会計年度の連結財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、連結財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

新規連結子会社と連結の範囲	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>会社は、【注記事項】(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)に記載のとおり、当連結会計年度より株式会社泰秀及びS&amp;B FOODS SINGAPORE PTE.LTD.について、重要性が増したことにより連結の範囲に含めている。</p> <p>他方、前期に子会社化した峯栄興業株式会社については、当連結会計年度において、それまで株式保有規制があった全ての親会社株式(603,340株)を売却し、その一部を親会社が自己株式(213,340株)として取得しているが、重要性の乏しい会社として連結子会社として連結の範囲から除外している。</p> <p>連結財務諸表作成会社は、原則としてすべての子会社を連結の範囲に含めなければならないが、規則等により重要性の乏しい子会社は、連結の範囲に含めないことができることとされている。</p> <p>上記のように、連結の範囲については経営者の重要な判断を伴い、連結財務諸表に与える潜在的な影響が大きいことから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項に該当するものと判断した。</p>	<p>当監査法人は、連結の範囲を検討するに当たり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・連結の範囲の決定に関する会社の内部統制の整備及び運用状況の有効性を評価した。</li> <li>・新規連結子会社の状況など連結の範囲に影響を及ぼす会計事実の変化の有無について経営者等に質問した。</li> <li>・子会社及び関連会社一覧表、連結の範囲決定に関する量的及び質的重要性の判断基準に関する資料等を検討し、連結の範囲の妥当性を確かめた。</li> <li>・子会社における親会社株式保有規制に関する解消スキームについて、経営者等に質問した。</li> <li>・子会社の保有する親会社株式の売却に関連する資料を閲覧し、当該親会社株式売却取引の根拠資料との照合を行った。</li> <li>・子会社の保有する親会社株式を自己株式として取得する取引について、議事録及び取得に関する根拠資料との照合を行った。</li> </ul>

#### その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の連結財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

連結財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と連結財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうか注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

#### 連結財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

連結財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業の前提に基づき連結財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

#### 連結財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての連結財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、連結財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。

- ・ 連結財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として連結財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において連結財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する連結財務諸表の注記事項が適切でない場合は、連結財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 連結財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた連結財務諸表の表示、構成及び内容、並びに連結財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。
- ・ 連結財務諸表に対する意見を表明するために、会社及び連結子会社の財務情報に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、連結財務諸表の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当連結会計年度の連結財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

#### < 内部統制監査 >

##### 監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、エスピー食品株式会社の2023年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

当監査法人は、エスピー食品株式会社が2023年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

##### 監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準における当監査法人の責任は、「内部統制監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社及び連結子会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

##### 内部統制報告書に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告に係る内部統制の整備及び運用状況を監視、検証することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

##### 内部統制監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した内部統制監査に基づいて、内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、内部統制監査報告書において独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための監査手続を実施する。内部統制監査の監査手続は、監査人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。
- ・ 財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討する。
- ・ 内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果に関する十分かつ適切な監査証拠を入手する。監査人は、内部統制報告書の監査に関する指示、監督及び実施に関して責任がある。監査人は、単独で監査意見に対して責任を負う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した内部統制監査の範囲とその実施時期、内部統制監査の実施結果、識別した内部統制の開示すべき重要な不備、その是正結果、及び内部統制の監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

#### 利害関係

会社及び連結子会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

---

(注) 1 . 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。

2 . X B R L データは監査の対象には含まれていません。



独立監査人の監査報告書

2023年 6月23日

アスピー食品株式会社  
取締役会 御中

双研日栄監査法人

東京都中央区

指定社員 公認会計士 國井 隆  
業務執行社員

指定社員 公認会計士 井上 敦  
業務執行社員

監査意見

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられているアスピー食品株式会社の2022年4月1日から2023年3月31日までの第110期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、アスピー食品株式会社の2023年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績を、全ての重要な点において適正に表示しているものと認める。

監査意見の根拠

当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準における当監査法人の責任は、「財務諸表監査における監査人の責任」に記載されている。当監査法人は、我が国における職業倫理に関する規定に従って、会社から独立しており、また、監査人としてのその他の倫理上の責任を果たしている。当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査上の主要な検討事項

監査上の主要な検討事項とは、当事業年度の財務諸表の監査において、監査人が職業的専門家として特に重要であると判断した事項である。監査上の主要な検討事項は、財務諸表全体に対する監査の実施過程及び監査意見の形成において対応した事項であり、当監査法人は、当該事項に対して個別に意見を表明するものではない。

関係会社の投融資に関する評価	
監査上の主要な検討事項の内容及び決定理由	監査上の対応
<p>2023年3月31日現在、関係会社株式の貸借対照表計上額は2,336百万円、関係会社貸付金の貸借対照表計上額は、短期貸付金400百万円、長期貸付金750百万円である。また関係会社に対する債務保証損失引当金1,461百万円、関係会社に対する貸倒引当金970百万円が計上されている。</p> <p>関係会社の投融資の評価の際には、会社は業績が悪化した関係会社について、市場価格のない株式として実質価額を算定し、さらに債務超過の場合には実質債務超過額を算定した上で、関係会社の投融資の評価の判断をしている。既に株式の減損を実施している場合には、債務保証損失引当金及び貸倒引当金の計上の要否を検討している。</p> <p>債務超過会社への投融資の評価については、関係会社に対する債務保証損失引当金及び貸倒引当金に関して金額的重要性が高いこと及び実質債務超過額の算定の際に関係会社が保有する資産の時価評価が重要なことから、当監査法人は当該事項を監査上の主要な検討事項に該当すると判断した。</p>	<p>当監査法人は、関係会社の投融資に関する評価を検討するに当たり、主として以下の監査手続を実施した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・関係会社の投融資の評価に関連する内部統制の整備状況及び運用状況を検討し評価した。評価した内部統制には関係会社株式の評価に用いられた事業計画の社内における検証手続や承認手続を含んでいる。</li> <li>・関係会社株式の実質債務超過額の算定に用いられた重要な仮定を含め検討した。当該検討には、関係会社が保有する資産の時価算定の検討を含んでいる。</li> <li>・将来の事業予測及び事業計画等に考慮されている重要な仮定について経営者及び財務報告の責任者と議論し、過年度については予算実績比較等を実施し総合的に検討した。</li> </ul>

その他の記載内容

その他の記載内容は、有価証券報告書に含まれる情報のうち、連結財務諸表及び財務諸表並びにこれらの監査報告書以外の情報である。経営者の責任は、その他の記載内容を作成し開示することにある。また、監査役及び監査役会の責任は、その他の記載内容の報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

当監査法人の財務諸表に対する監査意見の対象にはその他の記載内容は含まれておらず、当監査法人はその他の記載内容に対して意見を表明するものではない。

財務諸表監査における当監査法人の責任は、その他の記載内容を通読し、通読の過程において、その他の記載内容と財務諸表又は当監査法人が監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること、また、そのような重要な相違以外にその他の記載内容に重要な誤りの兆候があるかどうかを注意を払うことにある。

当監査法人は、実施した作業に基づき、その他の記載内容に重要な誤りがあると判断した場合には、その事実を報告することが求められている。

その他の記載内容に関して、当監査法人が報告すべき事項はない。

財務諸表に対する経営者並びに監査役及び監査役会の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

財務諸表を作成するに当たり、経営者は、継続企業的前提に基づき財務諸表を作成することが適切であるかどうかを評価し、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に基づいて継続企業に関する事項を開示する必要がある場合には当該事項を開示する責任がある。

監査役及び監査役会の責任は、財務報告プロセスの整備及び運用における取締役の職務の執行を監視することにある。

財務諸表監査における監査人の責任

監査人の責任は、監査人が実施した監査に基づいて、全体としての財務諸表に不正又は誤謬による重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得て、監査報告書において独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。虚偽表示は、不正又は誤謬により発生する可能性があり、個別に又は集計すると、財務諸表の利用者の意思決定に影響を与えると合理的に見込まれる場合に、重要性があると判断される。

監査人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に従って、監査の過程を通じて、職業的専門家としての判断を行い、職業的懐疑心を保持して以下を実施する。

- ・ 不正又は誤謬による重要な虚偽表示リスクを識別し、評価する。また、重要な虚偽表示リスクに対応した監査手続を立案し、実施する。監査手続の選択及び適用は監査人の判断による。さらに、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手する。
- ・ 財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、監査人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、監査に関連する内部統制を検討する。
- ・ 経営者が採用した会計方針及びその適用方法の適切性、並びに経営者によって行われた会計上の見積りの合理性及び関連する注記事項の妥当性を評価する。
- ・ 経営者が継続企業を前提として財務諸表を作成することが適切であるかどうか、また、入手した監査証拠に基づき、継続企業の前提に重要な疑義を生じさせるような事象又は状況に関して重要な不確実性が認められるかどうか結論付ける。継続企業の前提に関する重要な不確実性が認められる場合は、監査報告書において財務諸表の注記事項に注意を喚起すること、又は重要な不確実性に関する財務諸表の注記事項が適切でない場合は、財務諸表に対して除外事項付意見を表明することが求められている。監査人の結論は、監査報告書日までに入手した監査証拠に基づいているが、将来の事象や状況により、企業は継続企業として存続できなくなる可能性がある。
- ・ 財務諸表の表示及び注記事項が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠しているかどうかとともに、関連する注記事項を含めた財務諸表の表示、構成及び内容、並びに財務諸表が基礎となる取引や会計事象を適正に表示しているかどうかを評価する。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、計画した監査の範囲とその実施時期、監査の実施過程で識別した内部統制の重要な不備を含む監査上の重要な発見事項、及び監査の基準で求められているその他の事項について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会に対して、独立性についての我が国における職業倫理に関する規定を遵守したこと、並びに監査人の独立性に影響を与えると合理的に考えられる事項、及び阻害要因を除去又は軽減するためにセーフガードを講じている場合はその内容について報告を行う。

監査人は、監査役及び監査役会と協議した事項のうち、当事業年度の財務諸表の監査で特に重要であると判断した事項を監査上の主要な検討事項と決定し、監査報告書において記載する。ただし、法令等により当該事項の公表が禁止されている場合や、極めて限定的ではあるが、監査報告書において報告することにより生じる不利益が公共の利益を上回ると合理的に見込まれるため、監査人が報告すべきでないと判断した場合は、当該事項を記載しない。

#### 利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

- 
- (注) 1. 上記の監査報告書の原本は当社(有価証券報告書提出会社)が別途保管しております。  
2. X B R L データは監査の対象には含まれていません。